遊戯王 俺達が歩いていく道

紫苑の槍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　俺達が歩いていく道

【Ｎコード】
Ｎ７２５８Ｔ

【作者名】
紫苑の槍

【あらすじ】
俺は榊洸司郎（さかきこうしろう）。デュエルモンスターズを愛する決闘者（デュエリスト）だ

ある日、いつもの様に同じくデュエルモンスターズを愛する親友の諏訪晃（すわあきら）とで遊ぶ……筈だったんだが……

待ち合わせ場所に向かう俺の目の前に現れたどこまでも黒い謎の怪しい男……

「オレと……デュエルをしろ……」

――俺達は歩む。悪魔に囁かれて。

――彼らは進む。天使に導かれて。

ＰＣの方への注意：ルビ振りの都合上、ＰＣによる閲覧の質は非常に劣悪、難読です。
携帯からの方が見やすいです。それでも構わない方はどうぞ。

どうも。作者の紫苑の槍です。

『廃棄人形』様とのコラボ作品です
至らない点も多々ありますでしょうが、よろしくお願いします。

《お約束と注意》
＊遊戯王オリジナルストーリー。
＊オリカ沢山。
＊『廃棄人形』様の作品を見る事で完結します。
＊主人公は補正付き。
＊主人公はモテる（注：ハーレム。リア充爆発）
＊ツンデレは至高。
＊ポニテも至高。
＊美佳は作者のお気に入り。
＊作者はカプ厨（なのにハーレム）

＊洸司郎×美佳（↑オイ

感想を心からお待ちしております。切実です。

第一話　猫と晃と黒（前書き）

こちらの作品では榊洸司郎視点でお楽しみ下さい。

廃棄人形様の作品では諏訪晃視点をお楽しみ下さいませ。

第一話　猫と晃と黒

今日は一段と暑い。自分の家の自分の部屋で俺は荷物を確認していた。

俺、榊洸司郎は親友の諏訪晃（すわアキラ）と共にいつもの如くデュエルモンスターズを持って遊ぶ約束をしていた。

着替えるのも面倒だ。制服のままでいいか。

鞄に使えそうなカードやファイル、デッキケースに財布……暑いしタオルも入れておこう。

制服のズボンに携帯電話と、ベルトにお気に入りのデッキケースを掛けて家を出る。

「ニャー！」

「おっ、アズキ。帰って来たら遊んでやるぞ」

灰色の毛並をした猫、アズキに行ってきますを告げ、施錠し、目的地へと歩き出す。

親友で、同時にライバルでもある諏訪晃と俺は同じ高校で、いつもデュエルしたりデッキを改造したり、一緒にいる。

晃の性格はとにかく優しい奴だ。寧ろ、通り越して甘い。

だが、それが晃の良い所だ。悪い奴に利用されないか心配で仕方ねぇ。

因みに、晃はかなりデュエルが強い。俺と世界大会の決勝を争った事もある。

「今頃、桜に駄々こねられてんだろうな……」

そんな事を呟きながら俺は歩いていた。

ふと、途中にあるカードショップ・フロストに目が行く。

そうだ。欲しいカードがあった。

「はい……全部で１４８０円」

１５００円を渡しお釣りの２０円を財布に入れ、鞄に突っ込み、カードはデッキケースに入れて店を出た。

店の時計を見る。時間は丁度いいな。歩いていれば後ろから晃が追いつくかもな。

なーんて「貴様が榊洸司郎だな……？」

不意に後ろから声を掛けられた。振り向くと、男の人が黒いローブに身を包みその奥に隠れる肌も黒かった……なんて怪しい！

「そうだが……」

「いや、オレに間違い等有り得んか」

あ？何コイツ気味悪い……

「貴様、オレとデュエルしろ……」

そう言って男はフードを外し、紫色の物体を投げ渡してきた。

これは……アニメで見たな。デュエルディスクだ！珍しい、青紫のデュエルディスクだ。

ふと、相手の顔を見ると肌は黒く、タトゥーの様な紋様が見え隠れしていて……左腕には少しクリアーな黒いデュエルディスク。

「断る事が出来ると思うな……断ると言うのなら……諏訪晃がどうなるか……くく……」

「……んだと……っ！」

ふざけてやがって……俺の弱点と、怒るポイント押さえてやがる……わかってるじゃねぇか……

「上等だ……覚悟しろ……」

俺はベルトのケースから菫色のスリーブに包まれたデッキをディスクに装着すると、淡く光り、ディスクには８０００の数字が表示された。

第二話　悪魔と恐怖と山羊（前書き）

洸司郎は基本的にオリカしか使わないつもりです。チート効果はご愛嬌（笑）

第二話　悪魔と恐怖と山羊

――路地裏――

「「デュエル！」」

相手のデュエルディスクのランプが光る。

「クク……オレの先攻。ドロー……モンスター1体とカード2枚伏せてターンエンドだ」

相手に裏側守備表示のモンスターと裏側表示のカード2枚が立体映像で表示された。

「仕組みは解らないが……ソリッドビジョンって奴か。俺のターン。ドロー！……手札から《信者（ビリーバー）・強力のレイジ》を召喚！」

俺の目の前には、首に十字架のペンダントを掛け、黒い服を着た、屈強な男の戦士が現れた。

「行くぜ？バトルフェイズ！」

まずは相手のデッキが解らない以上、モンスター一体で攻撃してみるか。

「《信者・強力のレイジ》で裏側表示のモンスターにアタックだ！」

レイジは手に持ったショートソードで未知のモンスターに向かって行った。

「攻撃を通す。モンスターオープン。モンスターは《コアデビル・ベビー》」

ソリッドビジョンに映されたのは防御している細身の悪魔の様なモンスター。ってなんだそいつ……見たことないモンスターだ……。つか、知らねぇ……。

┣バトル┫

《信者・強力のレイジ》
Ａ１９００

《コアデビル・ベビー》

D５００

レイジは振り上げたショートソードでベビーを簡単に切り裂いた。
ベビーは小さな悲鳴と共に消えた。

「倒された《コアデビル・ベビー》の効果を発動……デッキから悪魔の種を手札に加える」

「っ……メイン2……カードを一枚伏せてエンドだ」
「その時、リバースカード発動。《増殖する悪魔》手札の悪魔の種を捨てて発動だ。コアデビルと名のついたモンスターが破壊されたターンに発動可能。破壊されたコアデビルを1体除外し、攻守２００のコアデビルトークンを2体守備表示で特殊召喚する。」

先程のベビーが一回り大きくなったモンスターが2体、現れた。

「そのままエンドだ……まじかよ……」

知らないカードだ……。まずいな……これだと何が入ってるか解らねぇ……。

「貴様……恐怖しているな……」

「っ！？」

「まぁ、仕方ないだろう。オレのターン、ドロー……コアデビルトークン2体をリリース、《コアデビル・サタキア》をアドバンス召喚」

フィールドに大きな二足歩行の爪の鋭い体格のいい悪魔が出現した。で、でけぇ……迫力が凄い……。

「このモンスターは1ターンに二度、相手の魔法、罠の効果を受けない。攻守は生け贄に捧げたコアデビルの守備力を合計した分だ。」

「攻守……４０００か！？」

「バトルフェイズ。雑魚を消せ。サタキアでアタック。キャンセラーネイル！」

サタキア
Ａ４０００

レイジ
Ａ１９００

サタキアは自慢の鋭利な爪でレイジを切り裂く。一瞬でレイジは消えた。

洸司郎ＬＰ８０００→５９００

「!?っ……がぁぁ……」

なんだ!?ライフが減った瞬間、体に激痛が……

「言い忘れていたな。このデュエルではライフポイントへのダメージは、プレイヤーにも伝わる。ライフが０になれば……死ぬ」

「……っ!」

……冗談じゃねえ。完全に嵌められた……。

「っ……まだだ!リバースカード発動!《黒の教え》!墓地の信者と名のついたモンスター１枚と手札の信者と名のついたカードを１枚除外する!」

「……まだ足掻くか。通るぞ」

「よし。手札の《信者・知能のアスレイ》と、墓地の《信者・強力のレイジ》を除外。と同時に2枚ドロー！」

……よし、行ける！

「カードを2枚伏せ、ターンエンド。エンド時サタキアは手札から闇属性悪魔族モンスターを捨て無ければ破壊される。オレはコアデビル・ハデスを捨ててサタキアを維持する」

成程、流石に強いと思ったら……維持コストがある訳だ……。さて、サタキアを攻略出来るかどうか……。

「貴様にサタキアが攻略出来るか？……ククク……どう足掻くか見せてもらおうか臆病者……」

コイツっ……。

「デュエルモンスターズなら正当に一方的な勝利を手にする事が出

来る。敗北を恐怖する必要はない。貴様はデュエルを捌け口とする臆病者だ」

「んだとっ！……クソッ……ドロー。……っふふ……」

俺はドローしたカードを見て、思わず笑みを溢した。

「どうした……死の恐怖に頭がやられたか？」

「違ぇ……。煽るだけ無駄だぜ？俺は確かに、さっきからこのデュエル……震えが止まらない……。だがそれは……っ！」

俺はドローしたカードを発動した。それは俺のこのデッキの一番のパワーカードにして一番の切り札！

「儀式魔法、発動！《サバトの儀式》！自分の除外されている信者

を任意の枚数墓地に戻し、戻したモンスターの合計レベルと同じレベルの《囁く者》と名のついた儀式モンスターを手札から特殊召喚する！」

「なにっ！？」

「……ふん。残念だったな。カウンター罠、《魔宮の賄賂》」

「……それはどうかな？サバトの儀式は無効となり、俺は1枚ドロー」

俺はデッキから1枚ドローする。……まだ笑いが止まらないぜ！

「墓地のサバトの儀式の効果発動！手札から信者を1枚墓地に送り、サバトの儀式を手札に戻す！」

「何だと？」

「さぁ再び《サバトの儀式》発動！除外されたレイジとアスレイを墓地に戻す！」
レイジ☆☆☆☆
アスレイ☆☆☆☆

黒い蝋燭で飾られた燭台が何本も出現し、中央に大きな釜の様な容器が姿を現す。そして、黒い光が場を支配し、光が収まると、燭台は消え、そこには……。
「レベルは8！欲に塗れた悪を堕とせ！《囁く者（ウィスパーズ）・デザイア―バフォメット―》降臨！」

山羊の頭を持った、巨大な体格。本当の悪魔がそこにいた……。

『我を……満たせ！』

重厚な重みのある声が響く……。俺はこの時別段不思議には思わなかった。

「それはな……死んでもいい程、デュエルが楽しいからだ！バフォメットの効果発動！墓地の信者を一体除外し、相手のモンスター一

体を装備カード扱いとしてこのカードに装備する！……そう！サタキアを装備する！」

「な……っ！」

相手のサタキアがバフォメットに引き寄せられ、やがて粒状に分解しバフォメットに吸収された。

「バトルフェイズ！このカードが装備カードを装備してる場合、1ターンに2回攻撃できる！バフォメット、攻撃！」

「っ……攻撃宣言時！《次元幽閉》！」

空間が裂け、狭間にバフォメットが飲み込まれた。しかし……

「無駄だ。バフォメットの効果！このカードがカードの効果を受ける場合、代わりに装備しているカードを墓地に送る事ができる！サタキアを墓地に送る」

次元の狭間からバフォメットが飛び出して来た。

「ダイレクトアタック！」　バフォメットＡＴＫ３０００

巨大な拳で男を殴りつける。

男ＬＰ８０００→ＬＰ５０００

「ぐっ……」

「速攻魔法発動！《グリード・ターミネート》！囁く者一体の守備力を、フィールド上の囁く者と名のついたモンスターの攻撃力に加算し、加算されたモンスターは攻撃する！」

バフォメットＤＥＦ２７００＋ＡＴＫ３０００→ＡＴＫ５７００

「馬鹿な……」

「ダイレクトアタック！イレイザーディザイアー！」

次はその拳に膨大な魔力を宿し、巨大な魔力の球体を男にぶつけ

た……。

男ＬＰ５０００→ＬＰ０．

第一章～第一話　異世界、ユグル（前書き）

ヒロインが出ます。
尚前回書き忘れましたが、凶悪なチートカードには勿論デメリットがあります。

モンスターのステータスやそのデメリット等は、そのデメリットを受けるまであまり、書きません。

ちゃんとバランスをとれるように調整していますので、チートカード乙ｗｗｗ
とか言わず見守ってくださいませ。

第一章〜第一話　異世界、ユグル

気が付けば俺は、たんぽぽ畑のど真ん中にいた。

辺り一面たんぽぽで、ここは少し山の方か。少し離れた所に街の様なのが見える。

空気がなかなか綺麗で澄んでいる。空気がおいしいとはこういう事を言うのか。

気温はそこまで高くなく、風もあり、涼しい。

さて、これから、俺はどう動こうか。

どうせならまずはこの風とたんぽぽを堪能してから考えよう。

事は数時間前に遡る――――路地裏――

俺はデュエルに勝った。見ると、ソリッドビジョンと、男の着けていたデュエルディスクは消えていた。

「死のデュエルじゃねぇのか？」

「嘘に決まっている。オレの目的はお前を殺す事ではない。……これは試験だ。お前の精神力とデュエルの強さを確かめる為のな……お前はオレに勝った。試験は合格だ」

試験？……体にはなんともないがあの痛みは現実のものだった……。ソリッドビジョンといい……いったい……？

「貴様にはこれから、デュエルモンスターズで巡る世界、ユグルに行ってもらう」

「は……？ユグル？」

「答えは聞かん。必要な物はこちらから渡すが、基本的にすべて自分でどうにかしろ。やる事も何もかも自分で探せ」

んな無茶苦茶な！……って……！？俺の体が、光の粒みたいになって消えていく……。移動させられてるのか？

「おい……色々と待てよ！まだ俺は……！」

「答えは聞かん」

「あっ……！」

――そして今に至る――

くそ……あの男、勝手にも程がある。

……晃、心配すっかなぁ……？

……俺、これからどうすっかな……。

「ねぇ……ちょっとそこのあなた！」

「ん？」

誰かが話し掛けてきたのに気付き、俺は体を起こし声の主を探す。

そこには明るい茶髪のポニーテール、綺麗な黒い瞳、小顔で身長は１６０ｃｍくらいか？可愛さと少しの美しさを兼ね備えた少女がいた。

ここは……異世界だったな。服装は割と俺がいた世界と似ているが、少しファンタジーな感じがする。

「聞いてるの？あんたよ！」

「あ、悪いな。俺に何か用か？」

「……ったく……あんた見ない顔だし、服は珍しいし……ここで何してんの？」

Ｙシャツと制服のズボンが珍しい？

「……あ、あぁ……行く宛もなくて、これからどうするか考えてた。ここは落ち着くし、いい場所だな」

「確かにいい場所だけど……てかあんた……家出か何か？行く宛がないって……」

「……いや、まぁ……そんな所だ」

何か憐れみと同情の目で見てないか？そんな目で俺を見るな！

まぁ、でも。

「なぁ？出会って早々悪いんだが、そこの街の事を教えてくれないか？出来たら案内もして欲しい」

「……ま、まぁ……別にいいわよ。可哀想だから教えてあげる」

「あぁ、頼むよ」

か、可哀想！？俺か？否定出来ないけどな……。

連れて行ってくれるのか、少女は歩きながら説明を始めた。

「……そこは首都『ビルズィラ』。この国、『デイルード』の一番大きい都市ね。この街では農業や環境保護の為の機械の開発が進んでいるわ」

通りで綺麗な空気なのか。
頭の中にメモしながら説明を聞く。

「名物は皮ごと食べれる、オレンジよ。疲れがとれる事で有名で大体の旅人は買うわ」
「へぇ～……」

「それから……」

話しているうちに、街に着いたみたいだ。
開いている厚く大きな門の扉。それは鉄の枠で縁取り、木が重ねられ、頑丈な作りになっている。

中に入ると住宅街、更に奥に進むと、人が沢山見える。
市場の通りだ。祭りみたいに屋台やら自分達でテントを張り、果物等を売買している。
「ねぇ、あんたさ」

「なんだ？」

市場の一角で少女にオレンジを買ってもらい、道の隅にいた。
なんでも、通貨が円ではなく『リュール』とか言うらしい。
持ち合わせる筈もないので、その旨を伝えると少女はため息をついてお金を出してくれた。
女に払わせるなんて、俺は最低だな。
「そのデッキケース、隠した方がいいわよ」
「!?」
オレンジを渡された時、ベルトに付けたままのデッキケースを指される。
「盗難に会うわよ?」
「あ、あぁ、ありがとう」
そうか、デュエルモンスターズで巡り廻っているんだっけな。
そうでなくても元の世界でも高価なカードは盗難に会うからな。
俺は少々軽率だった。

少女を見ると皮ごとオレンジにかじりついている。確かに薄皮だが……。
思い切って俺もかじりついてみると、程良い酸味と甘味が口いっぱいに広がった。美味い。

「美味しいでしょ？」

「ああ」

農業が進んでいる証拠だ。
環境的に、この世界は素晴らしいな。
気付けば、あっという間にオレンジを食べ終わっていた。
「ね。あんたもデュエリストでしょ？」

「そうだが。『も』って事はお前も？」

「当たり前でしょ？」

そうだった。

「デュエルしない？」

少女は鞄から明るい赤のデュエルディスクを取り出した。
元の世界でも女デュエリストは珍しいしな。
なんだか少し嬉しい。

「いつまでもこんな感じで過ごす訳じゃないでしょ？また困ったら人に頼る気？何をするにしても、お金が必要よ。だから貴方が私に勝てばお金貸してあげる」

気持ちは嬉しいが……正直お金を借りるのは嫌だ。しかし正論だ。

ん？あれ？俺、デュエルディスク貰ったよな？腕に着いてないんだが……。

俺は探す為に自分の鞄を確認しようとした瞬間、いつの間にか腕に青紫のデュエルディスクが装着されていた。

「！？」

戸惑いながらもデッキを挿す。
ライフカウンターに８０００と表示される。

「じゃあ、私が勝ったら隠している事全部教えてもらうわ！」

……バレバレか。仕方ねぇ。

「いいぜ。俺は榊洸司郎」

「私は縁逢寺美佳（えんおうじミカ）」

「「デュエルよ（だ）！」」

第一章～第二話　欲望、風に舞う（前書き）

更新速度を落とさず、頑張って書き続けますので、応援してくださいませ。

よろしければ感想、レビュー、ポイント等もよろしくお願いします。

尚、誤字脱字には細心の注意を払っていますが、見つけた場合、御一報くださるとありがたいです。

魔法罠のオリカって意外と難しいですね（苦笑）

第一章〜第二話　欲望、風に舞う

――丘のたんぽぽ畑――

俺達は先程のたんぽぽ畑に戻り、デュエルを開始した。
お互いにデュエルを人に観られるのが嫌だったからだ。
まぁ、俺のバフォメットは見せ物にはならないと思うがな。

ターンランプは俺の方が光る。

今回は俺が先攻だ。

手札にいきなりバフォメットがいるな。しかしサバトの儀式がない。
こいつらはデッキから直接サーチ出来ないから一々墓地に送ったり、除外したりしなければならないのが面倒だ。

「ドロー。メインフェイズ」

お。いいのを引いたな。

「《信者・ズィロ》を召喚。ズィロの効果発動！」

フィールドには、無精髭を携えた中年オヤジ。たがこいつの効果は強ぇぞ！

「このカードの召喚時、デッキの一番上を除外し、手札からレベル４以下の信者を特殊召喚できる！」

「え！？な、何よそのカード……私、知らないわよ！？」

ユグルには信者のシリーズは無いのか？

と考えつつも効果の処理。

デッキの一番上から除外されたのは《信者・ローワン》。ついてる！

これで一気に展開出来る！

「手札から《信者・知能のアスレイ》を特殊召喚。そして、除外されたローワンの効果発動！ローワンは除外された場合、魔法カード、《黒の復活》を手札に加える。」

ディスクによりデッキから排出された黒の復活を手札に加え、俺の口は勝手に言葉を紡ぐ。

「さらに、レベル４のアスレイにレベル１のズィロをチューニング。その瞳に何が映る！過去と現在（いま）を語り、未来はお前が決めろ！シンクロ召喚！《囁く者・ウヴァル》！」

俺の前に細く鋭い目つきの綺麗な女悪魔が現れた。俺の頭に妖艶な声が響く。

『行くわよ。坊や。それとも、イかせて欲しい？』

あぁ。と返事する前にウヴァルが何か変な事を言いだすから俺はズッコケる所だった。

「効果発動、ウヴァルはシンクロ召喚時にデッキからレベル２以下の信者を除外出来る！」

ウヴァルの力は強い。スピードと展開が自慢だ。

「デッキからレベル２の《信者・ジュンター》を除外し、ジュンターの効果発動！」

ジュンターは除外された場合デッキからレイジかアスレイを特殊召喚出来る！

「デッキから《信者・強力のレイジ》を特殊召喚！カードを一枚伏せてターンエンド」

「やるわね……私のターン。ドロー！メインフェイズ」

美佳はどんなデッキだ？イメージ的にはそんなにガチなデッキとは思えないな。

「手札から、《霞の谷の指揮官》の効果発動！デッキから《霞の谷の神風》を手札に加えるわ！」

み、霞の谷ーっ！？しかも知らないカードだ。ユグルで強化されたのか？ってなるとまさか……

「《霞の谷の神風》を発動して、《霞の谷の雷鳥》を召喚。雷鳥を手札に戻して、《ミスト・コンドル》を特殊召喚。雷鳥の効果、手札から特殊召喚！チェーンして神風の効果でデッキから《霞の谷の風使い》を特殊召喚。」

俺の前で流れるように、雷の鳥が、風より速くコンドルが、風を操る小さな孔雀が舞う。

このパターン……まさか！

「レベル3雷鳥とレベル4コンドルにレベル2風使いをチューニング！《ミスト・ウォーム》をシンクロ召喚！効果！ウヴァルとレイジと伏せを手札に戻すわ！」

霧の中から雷を起こし、風を操りミストウォームが現れる。
ウヴァルがエクストラに他の2枚は手札に戻ってきた。

「やるな！」

「まぁね！バトル！ミストウォームでアタック！」

ミストウォームが俺に向かって来て、近くに来ると雷を、身を裂くような強風を巻き起こす。

「うっ……！」

洸司郎ＬＰ８０００→ＬＰ５５００

迫力と風に圧されたが、俺は踏ん張り、耐えた。その迫力はまるで死を思わせる……このスリル……やっぱデュエルは楽しいな。

「カードを一枚伏せてエンドよ。どう?私の霞の谷。あなたのカ

ード……見た事もないけど、そんな調子で大丈夫かしら？」

「お陰様でな！やるじゃねぇか。いきなりミストウォームとは。最初はトリシュでも来るかと思ったぜ？」

「あら？トリシューラの方がよかった？」

言うねぇ……。さて、反撃出来るか……？俺の手札はレイジと伏せを戻され、このドローで7枚になる……。

「ドロー！……伏せが気になるな……まずはメインフェイズ！レイジ召喚」

ショートソードを持った戦士が俺の前に現れる。

「そして《黒の復活》を発動！手札、フィールドから囁く者と名のつく融合モンスターによって決められた融合素材を除外して、融合モンスターを融合召喚する！」

「ゆ、融合！？」

「場のレイジと手札の悪魔族（バフォメット）を除外！《囁く者・デザイア┣ザガン┫》を融合召喚！」

黒く長めの髪が揺れる。

……イケメンだと……

赤黒い一対の翼を羽ばたかせ、ザガンは舞い降りた。

「さらに、レイジはフィールドから除外された場合、デッキからサバトの儀式を除外出来る！」

デッキからサバトの儀式が除外される。これなら回収は簡単だ。

「そして、ザガンの効果！相手フィールド上のカードを一枚除外する！対象はセットされたカードだ！」

「強いモンスターだけど残念ね！リバース！《デモンズ・チェーン》！対象はザガンよ！これでザガンの効果は無効。攻撃も出来ないわよ」

魔の力を持って魔を封じる強固な鎖がザガンの手足を封じる。

絵的に、ウヴァルがかからなくてホントよかったかも知れねぇ…
…とか思った俺がいた。　つか、デモチェかよ！
やっぱりセルフ・バウンスか！？

「……可愛いと思って油断してたな」

「え！？な、何言ってんのよ！」

美佳が何か言ってるが、基本的に俺のデュエルに手加減なんて存在しない！
「魔法カード《欲望の対価》発動！自分の信者または囁く者を除外する事でデッキから1枚ドローする。ザガンを除外！」

ザガンは闇に呑まれ、鎖から脱け出し、俺は1枚ドローした。

「さらに、除外したモンスターが囁く者と名の付いたモンスターなら、もう1枚ドローするか、相手の表の魔法罠を破壊できる」

もう1枚ドローする。よし。

「墓地の欲望の対価の効果発動！墓地のサバトの儀式または、黒の復活とこのカードを除外し相手の墓地のレベル３以下のモンスター１体を除外する！指揮官を除外！」

「あっ！」

「手札から速攻魔法《欲堕とし》発動！除外されたサバトの儀式、または黒の復活と自分の除外された魔法罠を２枚墓地に戻して、除外された囁く者を１体手札に加える！」

儀式、復活、対価を墓地に戻してバフォメットを回収する。

――――行けるか？

第一章～第二話　欲望、風に舞う（後書き）

既存のシリーズのオリカ

霞の谷の指揮官
風属性　雷族
☆☆☆　Ａ１０００　Ｄ９００

このカードを手札から墓地に送る事で、「霞の谷」と名の付いたフィールド魔法を1枚、デッキから手札に加える。
「霞の谷」と名の付いたフィールド魔法が存在する場合、このカードを手札から捨てる事で、相手のフィールド魔法の発動を無効にし、破壊する。または、このターン「霞の谷」と名の付いたフィールド魔法は相手のカードの効果を受けない。

なかなか強くしました。
コンボ方法はわかる人は色々思い付きます。

尚、既存シリーズのオリカのステータスは偶にしか載せません（笑）

第一章～第三話　運び込まれた偶然は（前書き）

霞の谷のオリカ、強くしすぎました。

霞の谷大好きなので許してください！（笑）

第一章〜第三話　運び込まれた偶然は

俺の手札は5枚。うち、1枚はバフォメット。
相手の場は、今は無力となったデモンズチェーン、神風、そして俺を見下ろすミストウォーム。

「厄介な動きをするわね」

「あぁ……お陰で逆転出来そうだ」

行くぞ！

「墓地のサバトの儀式の効果発動。手札の信者を墓地に送り、このカードを手札に戻す！」

手札から信者・スレイを墓地に送る。手札に儀式が戻ってきた。

「そして発動！《サバトの儀式》！除外された囁く者または信者を任意の枚数墓地に戻し、その合計レベルと同じレベルの囁く者を手札から特殊召喚する。俺はザガンを墓地に戻す」

ザガン
☆×8

「手札からレベル8、《囁く者・デザイアー┣バフォメット┫》を儀式召喚！」

またお前か。頼りになるぜ。
現れた山羊の頭の悪魔。
さぁ、俺を勝利へと導け！

「そんな……儀式召喚なのに消費が少な過ぎ……」

「だろ？バフォメットの効果発動。墓地の囁く者か信者を1枚除外して相手のモンスターを装備する！ザガンを除外し、ミストウォームを吸収！」

「え？あぁっ！？ミストウォームが！」

ミストウォームは光の粒子となり、バフォメットに吸収された。

「さぁ行くぞ！バトルフェイズ。バフォメットの攻撃！」

「きゃっ！」

バフォメットは拳を振り上げ、魔力を込めた一撃を美佳に振り降ろす。
うわ、怖そうだ。
美佳……すまん。

美佳ＬＰ８０００→ＬＰ５０００

「更に、バフォメットは相手モンスターを装備している間は2回攻撃出来る。追撃だ！皇紅連拳（こうこうれんけん）！」

再び、腕を振り降ろす。

美佳ＬＰ５０００→ＬＰ２０００

「いやぁっ！……っ……強いわね……」

「メイン2。俺はカードを一枚伏せてエンドだ」

神風を除去出来なかったな。もしかしたら逆転されるかもな……

「私のターン！ドロー！」

美佳の手札はこれで3枚。……手札に霞の谷とコンドルがいたら、次はトリシューラでも出されるかもしれない。

美佳の手札は……？

「……あんたもついてないわね……私の手札、絶好調よ！」

「……ははっ……楽しみだな……」

怖いな……ハッタリじゃないな。あれは。

「手札から、《霞の谷の先駆け》を特殊召喚！このカードは相手より自分のライフが少ない場合に特殊召喚出来る！」

忍者のような格好をした、細い体の、ナイフを持った男性が現れた。

まてよ？これと言った制約がなければ……あのカード……。

「さらに、《霞の谷の狩人》の効果！霞の谷と名のついたカードが存在する場合このカードを手札から特殊召喚できるわ。特殊召喚！」

名前からは人型だと思ったが、鷹に似た鳥モンスターが現れた。

「この効果で特殊召喚に成功した場合、自分の霞の谷と名のついたカードを手札に戻すの。先駆けを手札に！この時、神風の効果発動！」

……嫌な予感が……っ！？まさか……？

「デッキから《霞の谷の祈祷師》を特殊召喚」

次は露出度の高い祈祷服に身を包んだ女性が現れた。

「祈祷師の効果で狩人を手札に戻して攻撃力アップ！狩人を再び特殊召喚して神風を戻して、もう一度神風を発動！」

……？まさか美佳の残り一枚の手札……

「そして手札から《霞の谷の祈祷師》を召喚！」

まずい……ループが起きる！止めないと負けだ！

「罠カード発動！《罰黒（ばっこく）》自分フィールドに囁く者が存在し、相手のカードが自分より多い時に発動出来る。相手の魔法罠を全て破壊する！次のターンのエンド時まで自分のモンスター１体を除外する」

デモチェと神風が破壊され、バフォメットは一時的にフィールドから離れた。このターン俺を守るモンスターはいない。

「う、嘘！？……っ……手札から先駆けを特殊召喚！もう片方の祈祷師の効果で先駆けを戻してパワーアップ！もう一度先駆けを特殊召喚！バトルフェイズ！」

祈祷師　ＡＴＫ１７００×２体
先駆け　ＡＴＫ７００

狩人　　ＡＴＫ１３００

「攻撃力が低い順に攻撃よ！」

霞の谷の先駆け、狩人、祈祷師2体の順に攻撃を仕掛けてくる。
引っ掻き、突つかれ、刺される。
正直怖い……

洸司郎ＬＰ５５００→ＬＰ４８００→ＬＰ３５００→ＬＰ１８００→ＬＰ１００

あっ……危ねぇ……っ！ギリギリじゃねぇか！

「惜しいわね……メイン2。先駆けと祈祷師、狩人と祈祷師でシンクロ！」
先駆け　祈祷師
☆☆　＋☆☆☆
狩人　　祈祷師
☆☆☆＋☆☆☆

「《ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン》をシンクロ召喚！次に《大地の騎士ガイアナイト》をシンクロ召喚！ライブラリアンの効果で１枚ドロー！……ターンエンドよ」

狩人や先駆けの攻撃力が低くて助かったな……

「やっぱ強ぇな……ライブラにガイアか……」

正直、勝てる気がしないが……デュエルは最後まで諦めない。

……俺は晃と戦う為にも、帰る。それまで負けるつもりはない！

「ドロー！メインフェイズ。手札から《信者・チトゼ》を召喚！」

相手が誰であろうと……

「チトゼの効果！デッキの上から3枚をめくり、その中の信者と囁く者の合計レベルと同じレベルの除外されている自分のモンスターを特殊召喚する！」

立ち止まらない！

「1枚目《信者・ズィロ》レベル1！」

残りの2枚もモンスターである必要があるな……

「2枚目《信者・ベッカ》レベル3！」

合計で4。次に魔法罠を捲っても不発にはならない。だが、俺は次に、レベル4を引く！そんな気がする……

「3枚目は……」

美佳がゴクリと唾を飲む。こっちも向こうも緊張してるみたいだ。

「3枚目は……！《信者・知能のアスレイ》！レベル4だ！これでレベルは8！除外されたザガンを特殊召喚！効果は無効になるけどな……」

「……あ……」

「さぁ、レベル8のザガンにレベル2のチトゼをチューニング！レベルは10、世界を怒りと憎しみで包み、混沌で支配しろ！愚者に裁きを、信じる者に力と栄光を！シンクロ召喚！《囁く者・怒りのルキフェル》！」

風が止む。しかし暗雲が立ち込める。

暗黒の闇から現れたのは漆黒の翼、赤髪碧眼。人堕天使の一人にして、最高位の悪魔。

「あっ……ら、ライブラリアンの効果で1ドロー……」

だけど、どうせ俺のターンだ、たいして意味はない。何故なら……

「ルキフェルの効果！このターン相手が効果モンスターの効果を発動した場合、自分の除外されているモンスターを特殊召喚できる！復活しろ、《囁く者・デザイア┣バフォメット┫》！」

ルキフェルは口元に笑みを浮かべ、指をパチンと鳴らす。

すると、次元の狭間からバフォメットが飛び出した。

演出ご苦労っ！

「バトルフェイズ！バフォメットでガイアナイトにアタック！」

バフォメットＡＴＬ３０００

ガイアナイトＡＴＫ２６００

闇の魔力の波動の前にガイアナイトは溶ける様に消滅した。

美佳ＬＰ２０００→１６００

「ルキフェルの攻撃！Ｗｏｒｌｄ　Ｅｎｄ（ワールドエンド）！」

ルキフェル　ＡＴＫ４０００
ライブラリアンＡＴＫ２４００

ルキフェルが天に手を翳すと、小さなブラックホールが生まれ、そこに吸い込まれる様に星屑や小惑星が場を通り、ライブラリアンを襲い、ライブラリアンも星屑と共にブラックホールに吸い込まれた。

美佳ＬＰ１６００→ＬＰ０．

「私の……負け……？」

第一章～第三話　運び込まれた偶然は（後書き）

気付いた人はいるでしょうか？

デュエル中の狩人、先駆け、祈祷師２体のループ

フィールドには未使用の神風と、狩人、効果未使用の祈祷師と使用済みの祈祷師１体づつ

祈祷師の効果で狩人を戻し神風の効果でレベル４の霞の谷のモンスター特殊召喚

祈祷師とレベル４で雷神鬼ＳＳ

狩人特殊→神風戻し、再び発動

雷神鬼効果で狩人戻し、神風効果でレベル４霞の谷特殊

祈祷師とレベル４で２体目の雷神鬼ＳＳ

狩人特殊→神風戻し、再び発動

雷神鬼効果で狩人戻し、神風効果で霞の谷の戦士特殊

狩人をＳＳ→神風を戻し発動

戦士と狩人でシンクロ→雷神鬼→先駆け特殊（または元からいる）雷神鬼効果で先駆けを手札に戻しレベル３～４のチューナーを特殊し先駆けを特殊してシンクロ→レベル５～６のシンクロモンスター特殊といった流れになると思います。

拙い文で申し訳ございません（＿＿）

理解できたらあなたは恐怖するでしょう

間違えていたら御一報下さいませ。

第一章～第四話　すべての始まり、終わり、寿命（前書き）

デュエルが終わりました。

次の街へ旅立ちます。

第一章～第四話　すべての始まり、終わり、寿命

「へぇ……とても信じられない話ね」

「だけど、事実だ」

俺達は街……ビルズィラを歩いて……いや、走っていた。
観光バスで港に向かっている。

俺は、旅をする事にした。

やる事はわからないし、この国も世界も……一つの街も……果実だって知らない。

地図を見ても自分の位置、目的地、国や街の名前もわからないんじゃ話にならない。笑えないな。

だから、色々と見て、学び、知り、知識を集め、自分のやる事を探す。
まずは大きな都市を渡り歩き、図書館等を訪ねる。

その為に美佳に港へと案内して貰っている。
そして、今は客の少ないバスの中、美佳に俺がこの世界に来た経(いき)緯(さつ)

緯を話していた。

俺はデュエルに勝ったけど、お金を貸して貰う訳だし、相手の要望に答えるのは当然だ。

「その男、何者なのかしらね……」

「わからねぇ。だけど、俺は元の世界に帰る為にも何か動かないといけないしな」

「……仕方ないわね。私、優しいから手伝ってあげるわ」

「あぁ……美佳はホントに優しいな。助かる」

「……！べ、別に、あんたの為じゃないわ！私がそうしたいからよ！」

美佳は褒められるのに慣れてないのか？頬を赤く染めてソッポ向いてしまった。

これはまさかツンデレって奴か？

言葉が荒いと思ったが、照れ隠しか、美佳なりの優しさだと思うと、なんだか可愛く思えた。

「じゃ、お前が満足するまででいいから、助けてくれ。いつかお礼もする」

バスが停まり、美佳が立ち上がる。俺も後に続く。

「い、いいわよ。ほら、降りるわよ！」

「……あぁ……」

降りてからもまた少し歩く。

段々、潮風の匂いがしてきた。

海に近づいているみたいだ。

「あんたいくつ？」

「歳か？１６歳だ」

「あ、私も１６よ」

同い年か。親近感が湧くな。

「美佳は学生じゃないのか？」

「そうよ。デュエルアカデミアの生徒」

「……アカデミア……行かないのか？」

「困ってる奴放って置いて行けって言うの？行っていいの？」

痛い所を突く……！そりゃ、助けて欲しいけど、学校サボってまで……申し訳ない。

と考えていたら、美佳が優しく微笑んだ。

「冗談よ。今日は土曜日、休みよ」

「あ、そ……そうか」

「ほら、着いたわ」

巨大な貿易船や、貨物船、豪華な客船が見える。

大きな港だ。きっと、自給自足が出来るこの街でも足りない物を、外交で補っているんだろう。

「いくら土曜日でも、船にまでは着いて行けないわ。後は自分で、ね」

船着き場に来て、丁度船が出る前らしい。乗る事にした。一つ二つ島を渡ると大きな大陸に着くらしい。

美佳に、お金が入っているであろう袋を渡される。

「あぁ……ありがとう。この恩は絶対に返す。って……意外と多くないか？」

「サービスよ。……また……会えるわよね？」

「そりゃな。金、返すからな」

「……じゃあ、またいつか……会いましょう。……その……元気でね」

「あぁ！美佳もな。色々とありがとな」

船に乗ると汽笛が鳴る。出発するようだ。

「……コウシロー！……が、頑張りなさいよ！また！絶対また会うんだからねーっ！」

「……おう！」

美佳と俺は姿が見えなくなるまで手を振りあっていた。

……後から思ったが、周りの目が一部痛かった。

☆　☆　☆　☆　☆

船の隅で、荷物の整理をしていた。

ん？鞄の中に見慣れない袋がある……

！？

美佳から貸して貰ったお金とは違う、また大金だ。

頭上から、声がした。

「プレゼントだ。金は必要だろ？」

男がいた。そいつは、俺がこのユグルに来る事になった原因。
地球で戦った、あの男だ。

「て、てめ！」

「そう力むな」

力むな？力むに決まってるだろ！って言うかプレゼントが遅ぇ！！

「お前が向かっているのは上質な鉱物が採れる、【ミラン】。未だに未開拓の鉱山【ジェリラル】が有名だ。尽きる事なく鉱物が採れ、まるでカラクリ屋敷の様に不思議な仕掛け。未だに未開拓地なのはその複雑怪奇さ故とも言われている」

急に男が説明したから驚いたが……次は鉱山……ミランか……。

「デュエリストなら仕事を請け負う事ができるギルド協会、デュエリストハンターズギルド、その支部もある」

デュエリストハンターズギルド??

「ミランで一度立ち止まるといい。……何かがある」

「何かってなんだよ……」

「自分で確かめろ」

またかっ！こいつは……っ！！

「……あ……お前、なんて呼んだら？」

思い出したかの様に、一応訊いてみる。『男』ではわかりにくいからな。

「……ディモでいい」

ディモと言うらしい。

「そうか……なぁ、ディモ。俺は何したらいいんだ？自分で探すに

しても、漠然としすぎている」

星の数を数える様な無謀な事に、俺は挑まされている気がする。

「金を集めるだとか、この世界で革命的何かをおこすとか、そういうデカイ事やるのか？俺には目的が遠すぎる。俺は早く元の世界に帰りてぇ……」

「……そうだな。一つ教えるなら、この世界はデュエルモンスターズで廻っている。だからデュエルを続け、戦う事で、少なくともやる事は見つかる」

デュエルか……。

確かにデュエルは好きだ。それでやる事が見付かるなら一石二鳥って奴だ。

だけど、もし俺がこうしている事で、元の世界でも同じ様に時間が流れているなら、晃は、きっと俺を探してくれている。

そう考えるとノンビリしたくないし、どうせなら晃と一緒にこの世界に来たかった。

……だけど、今更どうしようもない。とにかく動かねぇとな。

「常に冷静になれ。だが、心を冷たくするな。貴様の熱い心を、魂を選んだのだ……それに……」

「それに……？」

「なんでもない。貴様にこれをやる」

紙束を投げ渡された。と思ったら地図だ。とても詳しく載っている世界地図。

「……サンキュー」

お金を、美佳に貸して貰った分とディモに貰った分、いくらかを確認して、地図と共に大事にしまいこんだ。

「貴様は強くなる。この世界で、確実にな」

ディモは怪しく笑うと、姿が消えた。

な、何者だアイツはぁっ！？

第一章～第四話　すべての始まり、終わり、寿命（後書き）

おまけ

ＮＧシーン

ｔａｋｅ１

ディモ
「お前が向かっているのは上質な鉱物が採れる……なんだったっけ？」

監督
「カット！」

洸司郎
「ミランじゃないっすか？」

ｔａｋｅ２

ディモ
「お前が向かっているのは上質な好物がとれる…」

洸司郎
「すまん、作者が誤字った」

シーン2

ｔａｋｅ1

ディモ
「デュエリストなら仕事を請け負う事が出来るギルド協会、∀Д〆＝＝@＞□☆≡」

洸司郎
「忘れたなｗｗｗ」

ｔａｋｅ2

ディモ
「デュエリストなら仕事を請け負う事が出来るギルド協会、デュエリストハンターズギルド、その支部もある。一度ミラ…ノ？み、ミラ…ごめん忘れたｗｗｗ」

監督
「はいカット！ｗｗｗ」

洸司郎
「間違えるの早いｗｗ」

ネタですすいませんでしたw

第一章～第五話　ミラン。宝石と美女（前書き）

ヒロイン二人目です。

第一章〜第五話　ミラン。宝石と美女

――ジェリラル・坑道――

俺は今、走っている。

後ろからは３ｍくらいの大きな岩が転がってきていた。
今にも俺を押し潰さんという勢いで俺を追いかけて来るのだ。

「はぁ……はぁ……もうっ……無理ぃ……っ！」

俺は既に息も絶え絶えで、もう押し潰される直前だ。

かれこれ何分走ったかわからない。

そもそも、何故俺がこんな目にあっているのかと言うと、それはほんの１、２時間程度前の話である。

それは、俺がミランに着いてすぐの話だ。

――ミラン――

俺はまた街を練り歩いていた。

港に着いてすぐに中世ヨーロッパ風の街があったのはいいが、……ディモの渡してくれた地図は、残念ながら役に立たなかった。
なので俺はとりあえずディモに聞いたデュエリストハンターズギルドとやらを探す事にしてみた。

暫くまっすぐ歩いてみると、スーパーマーケットぐらいの大きさはあるであろう木造の建造物が見えてきた。

入り口のドアの横にある看板には『デュエリストハンターズギルド南支部』と書かれていた。

……？俺、入る気満々で来たは良いけど……入ってどうするんだ？どうしたら良いかわからねぇ……。

と佇んでいる所で、後ろから声が掛かった。

「ちょっと、そこのボク？どいてくれる？」

振り返ると、金髪赤眼の絶世の美女がそこにはいた……。
赤のキャミソールからはみ出しそうな大きな胸。引き締まった腰は美しいラインが生まれ、下は膝上、太ももが見えるくらい短いミニスカ。そして黒いロングコートを羽織っている。身長は俺より数ｃｍ低い。結構高い身長だ。
女性は、俺の顔をまじまじと見つめてくる。

ち、近ぇ……。

「あら、見ない顔ね。……なかなかいい顔してるわね。お姉さんの好みよ」

正直悪い気はしない。てか……この感じ……どっかで……。

「お姉さんとイイことしない？」

わかった！ウヴァルと似てるんだ！！

「いえ……それより」

俺は『デュエリストハンターズギルド南支部』と書かれている看板を指差し。

「ここについて教えてくれないか？ここに用があるんだろ？」

「あら……アタシの誘惑を無視するなんて……あなた……」

無視しないとダメだろ！

「いいわ、気に入ったわ。あなた、デュエリストでしょ？ちょっと手伝ってくれないかしら？」

「手伝う？……何を？」

「これから鉱山ジェリラルに向かってマッピング。それと宝探しをするのよ」

ジェリラルってディモが言ってた忍者屋敷的な奴だろ？下手すりゃ死ぬじゃねぇか。……だけど。

「いいぜ。だけど、俺は何をすりゃいいんだ？」

「簡単よ。アタシのサポートをすればいいの」

「はぁ……？」

「着いてくればわかるわ」

嫌な予感しかしねぇ……。

☆　☆　☆　☆　☆

そして、今はジェリラルに向かっている途中、サポートの具体的

な内容と、先程華麗にスルーされた俺の質問を訊いている。

「デュエリストに向けた罠や仕掛け、問答ばかりなのよ。だから、必然的に上級者向けになるわ」

「なるほどな。でも、随分と適当な決め方したよな？」

「あら？自信がないなら受けたりしないわよ？だからあなたは実力を持っていると見たわ。これでも、わたしハンターズギルドではトップランカーなのよ」

「へぇ……なんか……凄ぇな……」

「うふふ……あなた、名前は？」

「名前？俺は榊洸司郎。よろしくな」

俺は握手を求め、右手を差し出した。

「ふふ……よろしくね。叶棗（かのうナツメ）よ」

俺達は固く、互いの手を繋いだ。

☆　☆　☆

「あなた、本当にデュエリストハンターズギルドを知らないのね～……見ない顔だし、どっから来たの？」

……これからは軽率な言動は控えよう。余計な詮索はされたくない。

「え、えーっと……で、デイルードから……」

「ふ～ん？……下手な嘘は辞めた方がいいわよ？」

何故バレた。

第一章～第五話　ミラン。宝石と美女（後書き）

作者は展開を急いでる様にしか見えません（笑）

第一章〜第六話　欲望の数。

☆

その後、ジェリラルに着いて『危険！』の看板をスルーしトンネルの様な穴の中へと入る。

入り口付近だからかある程度開拓され、松明が添え付けられ舗装された道が続き、1階？に当たるフロアを進み続け、階段を登る。

「他にも進行ルートは沢山あるから、純粋に外から登山して入り込む強者もいるのよ？」

「はい？うぇ〜……ご苦労なこった」

そうして、順調に（途中、本気で命を奪いに来る様な危険な罠もあったが）進み、マッピングして……フロアにして4、5階か？それぐらいの所でいきなり罠が作動した。

棗の立っていた床が穴を開けた。落とし穴！

「棗！」

「うっ！」

間一発、俺は棗の手を掴む事が出来た。しかし、俺の背後からゴ

ゴゴ……っと嫌な音がする。

「このわたしが、ドジ踏むなんて……洸司郎！手を離しなさい！あなたも巻き込まれるわよ！」

「ざけんな！出来るかよ！お前置いて逃げるなんて……」

「洸司郎……あなた……」

後ろを振り帰り、罠を確認する暇もない。急だったから、あまり力も入ってねぇ……。

まずいと思った次の瞬間には、棗が俺の手を払い、穴の奥へと落ちていった。

「な！？何で……ナツメーっ！」

落とし穴が閉まる。……棗なら大丈夫かもしれないが、落とし穴の先なんて考えたくない。俺は後ろを確認した。３ｍ程の岩が転がって来ている。さっきからゴゴゴ……っていってたのはコイツか！

そして俺は棗と分断され、独り悲しくも無機物の塊と鬼ごっこを

する羽目にあった。

――戻って、坑道――

そして現在に至るって訳だが……

「うぁぁぁぁあああ！！」

死ぬ！死ぬって！もう追い付かれてる！

「くっそ……ついて……ねぇな……っ！？」

刹那、俺の体が宙に浮いた。

あっ……俺……死んだ……

と思ったら、下に落ちた。

下に……落ちた？

次の瞬間、俺は滑り台から滑る様に急降下していく。なめらかな

壁に擦りながら。

あまり勢いはついてなかったが、俺は滑り台の果てに着いて尻餅をついた。痛い。

結論。俺は落とし穴に引っかかって落ち、助かった……？

小さな落とし穴の様だ。岩は追って来ない。縦も横も3mくらいのゴツゴツした丸い岩だったな。割と大きい岩だから、一緒に落とし穴に引っかかったら俺はペシャンコ。お陀仏だ。

「棗……無事だろうな……？」

立ち上がり、辺りを見回すと、燭台に灯がついている。なにやら……遺跡？みたいな所だ。

奥にしては沢山明かりがついている事から俺は下に戻されたかと思ったが、違うみたいだ。

壁にはいっぱい文字が書かれている。

こういうのは大体変な文字で読めないんだろう。俺は燭台の並びを頼りに奥へと進んだ。

燭台の並びは、サバトの儀式を発動した時みたいに祭壇の様な物で、中央の何かを囲んでいた。

中央には台座の様な物があり、そこにはいかにも高価そうな碧の宝玉と紅の宝玉。

その周りには15枚程のメダルみたいな…硬貨か？コインが並べられていた。

「へぇ？なんだ……？……褒へのお土産にはなるか？」

この時俺はすぐ後悔した。俺は迂濶にも硬貨や宝玉に手を伸ばし、触れてしまう。

宝玉に触れた瞬間。周りの15枚の硬貨が宙に浮かび、回転したりして弧を描き、急に俺の方へ向かって来た。

「っ！？やっ……やべっ！」

俺は紅の宝玉を持ったまま、すぐに硬貨を回避した。だが……硬貨は執拗に俺を追いかけて来る。

だから怖いって！

俺は逃げきる事が出来ず、硬貨は俺の体へと向かい……

ズプリと、俺の体に入り込んだ。１５枚全て。

「……え？」

ちょっと擽ったい変な感じだったが体に異常は無い。

寧ろ、なんだか元気が湧いて来た気がする。

そしてまた、俺の心臓を脅かす事態が起こる。

地鳴りの様な音……いや、声が俺を呼んだ。

「貴様が、榊洸司郎か……？まだガキではないか」

「なっ……！？」

声がした方向、台座の方を向くと……そこにいたのは……

《堕天使ディザイア》だ

赤い翼、藍色に近い装甲に金のラインの装飾。

高い身長が段々と縮み、人間の形をとる。

まるでディモみたいに肌や髪など、何処までも黒い男だ。

割と美形だが、鋭い目つきは俺を睨み離さない。

「……ふぅむ、成程。貴様が選ばれた理由も解った……しかし、私はまだ認めていない」

……選ばれた？認める？

俺は頭の片隅で色々と考えながら、ディザイアの話を聞いていた。

「……私とデュエルしてもらう！断るのならば……そうだな……貴様と共にいた女でも戴こうか。勿論、我が名に恥じぬ様にな」

女？……棗の事か！ディザイアって言うと欲望を指す……俺の信者や囁く者もそういった類のカードだ。宗教的な問題からか、外国ではまだＯＣＧ化されてなかったな……って！んな事より！

まぁ間違いなく、断れば性的にも、命的にも棗が危ない……だが逆に、生きてるって分かった。ありがたい。

……これは俺のデュエルだ。棗を危険に晒す訳にも行かない。

「いいぜ！デュエルしてやるよ！」

「私に負ける様ならば、貴様も女も、タダではすまさぬ！」

決して逃げる事は罪ではない。どっちを選ぼうと人として当然だが、ここで人の為に動いてしまう俺は晃より甘いのかも知れない。

いつの間にか左腕に装着されていた紫のデュエルディスクにデッキを差し込むと自動（オート）シャッフルされる。

相手の腕にも真っ黒なデュエルディスクが装着されていた。

……今思えば、この時俺は何も見えてなかった気がした。視力的にではなくて。

第一章～第六話　欲望の数。（後書き）

棗の名前の由来はポケモンからです。
って言うのは秘密で（笑）

第一章～第七話　力の大きさ。守る戦い。

――ジェリラル奥地・封印の間――

「「デュエル！！」」

二人はそう言ってデュエルを開始したわ。

落とし穴に落ちてから進み直すと、落とし穴に見せかけた道があって、そこを通ったらこの遺跡みたいな場所に出て……洸司郎が男の人にデュエルを申し込まれた所を見た。

少し遠くの岩の陰からわたしはそのデュエルを見ているから、偶に会話が聞こえない。

洸司郎の方は見たことない、宗教団体みたいなモンスター達と悪魔を従えて、相手の男は……ディザイアだったわね。モンスターは闇天使を主軸としたデッキ……わたしのよく知るデュエル考察集会ではたしか【しゅうせい】とか呼ばれていたわ。

それにしても洸司郎……わたしの為にあのデュエルを受けてくれたのよね……？

さっきも、まだよく知らないわたしの事、助けてくれたわ。

……なんだか、お姉さん……胸の奥がキューンとして熱くなっちゃった。

「っぐぁあああっ！」

洸司郎の声にハッとなり見てみると、洸司郎のモンスターが破壊されて、ダイレクトアタックが洸司郎に決まった……。

洸司郎……負けたらタダじゃおかないわよ……？

☆

相手の《堕天使ゼラート》の攻撃が通った。

洸司郎ＬＰ６９００→４１００

問題は、そのダメージに痛みがあった事……これは、ディモの時と同じ……！死のデュエル……

俺はただ必死に痛みを耐えた。

「《アドバンスドロー》を発動。ゼラートを墓地へ送り、２枚ドロー。１枚伏せてエンド。貴様のターンだ」

「……ふー……俺のターン」

このデュエルに負ければ、俺どころか、棗まで……。

落ち着け、俺。深呼吸して息を整える。ドロー……スタンバイ……メインフェイズ。

今までの展開は大まかに言えば、相手は《神の居城―ヴァルハラ》から《堕天使アスモディウス》を特殊召喚し、効果で《アテナ》を落とした。

そして俺はレイジを破壊され１１００ダメージ受けたが黒の教えを発動して２枚ドローし、返しのターンにバフォメットを儀式召喚し、アスモを吸収……しようとしたが、相手が《堕落連鎖》とか言うカードでアスモディウスをリリースし、デッキから召喚条件を無視して堕天使を特殊召喚する。

《堕天使ディザイア》が出てきたが、攻撃力は２０００下がる制約により攻撃力１０００になり、攻撃表示で特殊召喚されたので恐る恐るも攻撃した結果、《スタンバイダークロード》と言うカードを使われ、堕天使がいる時、デッキから《堕天使スペルビア》を墓地へ送り、バトルフェイズを終了させられる。

そしてその次のターン。
墓地とフィールドに合計3体以上堕天使が存在する場合デッキから堕天使を特殊召喚する……名前なんてもう覚えてない。魔法カードを使われ、ゼラートが現れた。
そしてディザイアを守備にし、効果でバフォメットを墓地に送られ、ゼラートのダイレクトを受けた次第だ。

ん？なんであいつは攻撃力0のディザイアをアドバンスドローのコストにしなかったんだ？

怪しいな……。

相手は守備表示のディザイアと魔法罠はヴァルハラと伏せが1枚。

もし相手にライダーがいるならあまのじゃくの呪いが入ってても良いが……

守備表示となるとわからない。

純粋に除去か？……焦るなよ、俺……。
手札は5枚。判断を誤れば多分、次のターンには負ける……。
意に反して腕が震える……。

ディモの時も、今もそうだ。
デュエルは楽しい。大好きだ。死ぬ程好きだ。

……だけど、死んでもいいかってなると話は別。

事実、負けるのは怖い。ディモの言った挑発はあながち間違ってない。

しかも……ただ負けるだけじゃない。俺と、棗の命がかかってるんだ。

また、人を守りながら戦うのか……

――ふと頭を横切ったのは昔の光景だった――

『あ、ありがとうございました！怪我までさせて本当に……本当に……っ……』

『おう……どうって事ないから、気にするなよ……無事でよかった』

『流石、洸司郎だね』

――……違う。その時女の子は人質に取られ、俺は殴られ放題だった。晃がいたから、なんとかなった……――

人の為に動ける。自慢だ。

だが俺は晃とは違って、弱い……（いや、晃が喧嘩強い訳ではなくて）。人質なんか取られりゃ手も足も出せない。

いや、晃が人質を無視する様な奴じゃなくて。

晃ならもっと上手くやれるって話だ。

……俺は以前相手を逆上させてしまい、人質に取られた人は大怪我した。それからだ……

『大丈夫。洸司郎だから出来る……洸司郎じゃなきゃ、出来ないんだよ？』

……晃……っ！？

空耳だ。だが俺の弱い気持ちが都合良くそう聞いたのだろう。だけどその声を聞いた途端、不思議と腕の震えは止まり、足はしっかり地面を踏みしめる事が出来たのは確かだ。

「……サンキュー……晃……」

俺はお前を超える……。

こんな所で、負けてられないよな……。

「目つきが、気迫が違う。大分変わったな。本気の様だな」

「あぁ……行くぜ！魔法カード《黒の復活》！自分の手札、フィールドから囁く者と名のついた融合モンスターによって決められた融合素材を除外し、融合召喚を行う！手札の《信者・スレイ》と《信者・ローワン》を除外！信者と名のついたモンスターと、戦士族のモンスター（スレイ）を融合！隠された過去（こたえ）を伝えろ。未来を見据え、真実（ちから）を持って敵を薙ぎ払え。愛を我が手に！融合召喚！《囁く者・エリゴス》！」

現れたのは白銀の鎗を携えた騎士。端正な顔立ちで、赤い瞳はディザイアを睨みつけていた。

「ローワンの効果で墓地の黒の復活を回収。同時に、エリゴスの効果。特殊召喚成功時に相手のカードを1枚墓地へ送る！対象は伏せカードだ！」

エリゴスが鎗を突き立て、伏せカードを貫いた。

「何っ！？《次元幽閉》が……」

流石、優秀なだけはある。採用率高いな。これで安全だ！

「墓地の《信者・ジャメラ》の効果！墓地のこのカードを除外しモンスター1体の表示形式を変更する。リバース効果は発動しない。更に、フィールドに囁く者が存在すれば1ドロー！」

「……なんだと?」

遂にディザイアの余裕の表情は崩れた。

そしてフィールドにいる堕天使ディザイアは攻撃表示になり、俺は1枚ドローした。

……ん?……来た!

「手札から《信者・ダリツー》を墓地へ送り、サバトの儀式を回収!ダリツーの効果、墓地のダリツーを全て除外し、除外した枚数と同じレベルになる様に信者チューナーをサーチする!レベル1の《信者・ズィロ》を手札に加え、手札の黒の復活の効果発動!手札のこのカードを除外し手札の信者チューナー(ズィロ)を墓地に送り、墓地のカードを1枚手札に加える。手札に加えるのはバフォメット!」

さぁ、フィニッシュだ!

「サバトの儀式発動!除外されたジャメラ(4)、ローワン(1)、スレイ(3)を墓地に戻し、レベル8!欲に塗れた悪を堕とせ!儀式召喚!《囁く者・デザイア┣バフォメット┫》降臨!」

『欲深き者は我を越えられぬ。ひれ伏せ……』

「ジャメラの効果!ジャメラを除外再びディザイアの表示形式を変更する。更に、1ドロー!そしてバフォメットの効果で、ローワンを除外し、ディザイアを吸収!ローワンの効果で除外された黒の復

活を墓地に戻す……ま、もう意味ないけどな」

堕天使ディザイアはバフォメットに吸収されていく。光の粉となり、バフォメットの力となる。

「……これが選ばれた者の力か。認めざるをえないな……」

「バトルフェイズ！エリゴスでダイレクトアタック！愛火葬鎗（あいかそうそう）」

エリゴスの持つ洋風の鎗で横に払い、斬り、突き刺す。素早い攻撃だ。

エリゴスＡＴＫ２６００

ディザイアＬＰ８０００→５４００

「続けて、バフォメットで2回ダイレクトアタックだ！皇紅連拳！」

2回、魔力を纏わせた拳で殴りつける。その威力と威圧感は、従える俺でもわかる。

バフォメットＡＴＫ３０００

ディザイアＬＰ５６００→２６００→０．

……か、勝った……。

「認めよう。汝にその二つの宝玉と15枚のコインをくれてやる。さらばだ……」

そう言ってディザイアは跡形もなく消え去った。

コインと宝玉、俺の体に入り込んだ奴とさっきの碧と紅の小さな玉か。

戦利品の事と……気になる事を頭の中で考えていた時。

「洸司郎！」

その声に振り向けば、棗が俺の方に走って来ていた。

「棗！」

第一章～第七話　力の大きさ。守る戦い。（後書き）

本当はもっと長くするつもりでしたが
予定を変更して1キルしました。

第一章〜第八話　真の理……意味と目的と

デュエルに勝利した俺は声がした方を振り向く。

振り向けば棗が俺の方へと走って来ていた。

と思ったら腕を広げ、俺に飛び付いて来た！

「洸司郎！」

「なつ……うっ！」

ムニッ

柔らかく、心地よい感触に襲われる。

柔らかい……？

俺は棗の豊満な双丘に顔を埋める事となっていた。

「格好良かったわよ……ありがとね」

棗！胸がっ！胸がぁっ！！

「んん～！」

俺は棗の背中や肩を叩き離れるように伝えた。

伝わったのか棗は離れてくれた。

一時のしあわ……ゲフン

……苦しかった。

「にしても、棗がどうして此処に？」

「落とし穴から抜けて進んだら此処に。そして……見てたわ。デュエルをする所辺りから」

「あ……見て……た？」

俺、デュエル中に変な事言ってなかっただろうな？急に怖くなった。

「まぁ、後で色々訊かせて貰うわ。とりあえず出口を探しましょう」

「あ、あぁ」

☆　☆　☆

俺達は出口らしきモノが無いか探していた。

しかし、探す事数十分。何も見つからない。

「はぁ……なんも見つからないな……」

しかし、俺は先程見つけた文字が沢山書かれた壁を思い出し、その前に来ていた。

文字の形はどちらかと言えば、韓国語に似た形だ。

……読める訳ねぇじゃん。

……いや、読める。

何て読むか分かる。

理由はわからないけど……。

えーっと……？

……の……は、伝説……であ……。

二人の……い……選ばれた……

世界の……ぶ……前、……デュエル……

相手の……を……にて……す事で……認め……

☆　☆　☆

「洸司郎！ここから出られそうよ」

棗の呼ぶ声がした。
俺はそれに気付き棗の方へと向かった。

「洸司郎……どうしたの？様子が変よ？」

……？そんな事はない。
俺は首を横に振った。

「そう？ほら、行くわよ」

「……あぁ」

俺達はディザイアから譲与された宝玉2つと幾つかの宝石や鉱物を持ち帰り、ジェリラルを抜け出した。

……俺がジェリラルで見たアレは何だったのか、出来れば知りたくなかった。

ジェリラルを出れば、太陽の光が俺達を迎えてくれた。

眩しさに俺は手を翳し、目元への光を遮った。

……なぁ、晃。

俺は……どうしたらいい？

……お前が俺の立場だったらどうしてるかな……？

第一章～第八話　真の理……意味と目的と（後書き）

今回の話……短い……

馬鹿なっ！

まだ私には書く事が……っ

くっ！

第一章～第九話　別れ、運命も分かれ（前書き）

ちょっと今回はやる事がなかったので繋ぎ程度です。

申し訳ない

第一章～第九話　別れ、運命も分かれ

ジェリラルからミランに戻って二日。俺は旅の支度をしていた。

どうやらユグルでは全国共通でローブを羽織っている人は大方旅人だと言う認識があるらしい。制服だと一々怪しまれてしまうので俺はミランに戻って商店にてローブを購入した。

灰色のローブを羽織り、バッグの中身を確認している。

携帯とデッキとカードと……そういえば入れていたタオルとその他……

「よしっ……準備完了……ん？」

……携帯？……そういや……繋がるのか？

……圏……外……だと……

☆

結局携帯電話は使用出来ず、俺は食料と水を貯え準備を宿屋で済ませ、酒場で棗と昼飯を食べていた。

「へぇ？じゃあこれはどんな食べ物なんですか？」

「そちらは麺をオーブンで……」

地球にはなかった食べ物や料理が色々で俺は子供みたいだったのを覚えている。

とりあえず地球と調理器具は変わらないらしい。

工業が発展してる国もあるんだろうな。

適当に昼飯を終らせ酒場を出ると棗が話し掛けてきた。

「それで洸司郎？確か……これからエデラウンに向かうのよね？」

「あぁ～……いや、いろんな国や街を見たいから途中のウェーリアって国に寄るつもりだ」

「……わたしも、着いて行こうかしら？」

「え……？」

「冗談よ。わたし、まだやる事あるから着いて行けないわ。残念ね」

「あ、あぁ……そうか、確かに残念だ」

「じゃあね。洸司郎、また会いましょう。わたし以外のお姉さんに着いて行ったら駄目よ？」

誰が着いて行くか！

「おぅ、またな！」

「うふふ……。またね」

そう言って棗は手を振りながらどこかへ行ってしまった。

……俺も宿屋に戻るか。

☆　☆　☆

俺は宿屋に戻り荷物を取り、ターミナルへと向かう。

次の目的地はウェーリア。

そこには、電車で行けるらしい。

改札を通り、人混みをすり抜けて路線の前へ　。

丁度電車が来た。他にも電車に乗る人は多くターミナルには人の行列が多い。

電車に乗ると、中は広く、皆が皆座席に座る余裕がある。

俺も座席に座ると、車両のドアが閉まり、電車は走りだした。

新幹線みたいに座席は向かいあっている。縦長の座席ではない。

ふと、窓を見る。

早くも景色が流れる。

ん？あれは棗？

棗が手を振っているのが見えた。

わざわざ見送りに来てくれたのか……。

俺は小さい手振りだが、必死にしっかりと、手を振り返した。

またいつか会おうな、棗。

電車が走り始めて数時間、車窓の外は暗く、太陽は沈んでいた。

俺は荷物を――と言ってもバッグだけだが――抱え、小さくなって寝ていた。

地球で言う日本の、青函トンネルみたいな物か。ユグルは海中トンネルが多く、ミラン、ウェーリア、サーヴァイル、エデラウン。この４つの国を結び、更に、通常の貿易船を併用し各国の貿易を盛んにしているらしい。

もうトンネルは抜けただろうか？

結局外は暗いからわからない。

俺が目を覚ました時には街灯が夜の街を照らし、昼夜問わない賑やかさを映しだしていた。

ここで俺は何をするのか、今はまだわからない。

舞台は、ウェーリアへ。

第一章～第九話　別れ、運命も分かれ（後書き）

次はウェーリア。

お楽しみに？

第一章～第十話　ウェーリア。サイカイ、バイバイ（前書き）

3人目のヒロインが出ます。

第一章～第十話　ウェーリア。サイカイ、バイバイ

朝。

カーテンの隙間から太陽の日差しが俺の目を襲った。

「暑い……って言ーか眩しい……」

……

「あちぃっ！」

思わずベッドからガバッ、と飛び起き、掛布団を引き剥がした。

朝……と言うには少し遅く、時計は１０時を指していた。

ガシガシと頭を乱雑に掻いて俺は顔を洗いに部屋を出た。

ここはウェーリアのとある宿屋。

昨日、俺はウェーリアに着いてすぐ宿屋を探したが、深夜なのでそうそう見付かる訳ではなかったが、偶然、夜間運行便でウェーリアに来た客用の宿屋を見付けたのだ。

水道を借り、顔を洗い終え、自分の部屋に戻りカーテンを開いた。

「おぉ……」

俺は感嘆の声を漏らした。

それもそうだ。

わいわいがやがやと、そんな擬音を使っても相違ない喧騒で街は賑わっている。

とりあえず、外へ出よう。

軽い身支度をして、今夜の分の宿も予約し、俺は外へ出た。

☆　☆　☆

ミランやデイルードに似た街並みが俺を迎えてくれた。

まずは街について知る為に、宿屋に支給されていた観光パンフレットを片手に、俺は街を練り歩いていた。

この街には闘技場ならぬ決闘場……《コロッセウム》がある事で有名だ、不定期だが割と早めなペースでデュエルトーナメントも行われるらしい。しかもどうやら明後日にもやるらしい。暇があれば出てみたいものだが、あまり目立ちたくはないな……。

ここは中央国家エデラウンに近い国だから結構各国の名産物が揃っている。

もう少ししたら、何か食べようかな……。

ん？

俺は見逃さなかった。女の子が無理矢理、男二人に裏路地へと連れ込まれるのを……。

「ちっ……仕方ねぇな！」

俺は人を避け、女の子が連れ込まれた裏路地へと急いだ。

俺は裏路地に入り、バレない様に後を追った。

俺が男達に追いつくと、やはりそっちが目的か、お楽しみを始めようとしていた。
要するに、強姦だ。
女の子は必死に抵抗している。

こんな世界でもそんな事があるのは当然かも知れないが、俺は認めたくなかった。

男の手が女の子の胸に触れる直前。

「おい……待てよコラ！」

俺は飛び出し、胸を触ろうとした男の手を掴み阻止した。

「あぁん？んだぁ、てめぇ？」

「オレらの邪魔するたぁいい度胸してんなぁ……あぁ！？」

無視、俺は男達から女の子を引き剥がし、声を掛ける。

「無事か？早く逃げろ！」

「……こ、コウシローっ！」

「ぁ……み、美佳！？なんで此処に……いや、まず美佳は外で待ってろ！」

「え、えぇ……」

美佳は素直に走り、安全な場所へと逃げた。

これでよし。

「こら待て……あぁ！？邪魔すんな！」

邪魔するさ。

俺は男達の進行方向に立ち塞がり、行く手を阻む。

「邪魔するならてめぇからだ！」

「覚悟しやがれ！」

「ぐっ……」

スピードは遅い。威力も全然だ。だが、俺はそれを顔面にモロに喰らう。

「偉そーに出てきておいて、弱っちーなオイ！」

腹に顔に、横腹や肩、頬や足……全身に至るまで好き放題殴られ、蹴られ、物で叩かれた。

最後に側頭部に角材を一撃。そこで俺は地面に伏した。

「クソまじ、死んどけ粕野郎」

「次から出てくんなよ？」

「「アハハハハ！」」

くそ……流石にパイプや角材は痛ぇじゃねぇかよ……。

「お前……まだ立てるのかよ」

「悪いな。そろそろ正当防衛さしてもらう……ぜ！」

短めジャブ、相手の鼻の頭に軽く一発。

次に鳩尾に一撃。後退りする男の口の辺りに強烈なストレート。

「ごあっ……」

勢い良く後ろに下がった男は壁に頭を打ち付け、地面に転がる。

残った一人は驚き、後ろに後退りする所で、俺は頬の辺りにフッ

クを決める。

「美佳の分……それと俺の分！」

頬を数回殴り、腹に膝を入れ、逃げた所を最後に尻を蹴ってやるとゴミ箱に突っ込んだ。

気分爽快。

意味は違うが、まさにダストシュート。

さて、美佳の所に戻るか。

俺はローブの埃を払い、タオルで傷を拭い、美佳が逃げた方向へと歩いた。

「バカ！ばか！馬鹿！この大馬鹿！！」

俺は今、美佳に怒られている。確かに、正当防衛にするには殴られすぎた気がする。

「えと……美佳、すまん。でも、無事でよかった……」

「っ！……ばか……心配したんだから……」

そう言ってローブごしに俺の胸に顔を埋める美佳。

ちょっとばかし、気恥ずかしい。

「怖かった……でもコーシローがいてよかった……安心した……ありがと」

ズキュン！

俺のライフに５０００のダメージ！

涙目のまま、上目遣いで、そしてニコッとして、笑顔を見せた美佳。

凄く……ツボでした。不謹慎ながら、凄く……可愛いかったです。

☆　☆　☆

「それで美佳はなんでこんな所に？」

「あんたが心配だったから……コウシローを追い掛けて来たの」

「俺を……あ、アカデミアは？」

「適当な理由つけて休みにしたわ。暫く一緒に行動するけど、いいわよね？」

「あぁ……いいぞ。だけど……俺の為に、ありがとな？」

「いいのよ。頼まれてないのに私が勝手にしてる事だから」

まぁ、このまま無限ループしても美佳を怒らせるだけだし、素直にお礼を言おう。

「サンキューな」

「あ……うん」

美佳は顔を赤く染めて嬉しそうに横を向いた。のをこの時俺は気付かなかった。

☆　☆　☆

俺は美佳に案内して貰いながら国立図書館へと向かっていた。

途中で色々と見て周りながら。
祭の出店みたいに屋台を沢山。

「ねぇ、こーしろ？」

なんか可愛い呼び方された。
美佳は上機嫌で俺の横を歩いている。

「どした？」

「で、デートみたいねっ！」

「っ！？」

急に美佳が頬を染めつつそんな事を言うから思わず、飲んでいたジュースを吹いてしまいそうだった。あぶねぇ……

「何言ってんだよ、急に。……確かに……なんかデートっぽく無い訳では……」

「べ、別に、あんたと一緒にいるのが……てかデートが嬉しい訳じゃ……て言うか！デートみたいだからデートみたいだねって何気なく言ったつもりだったのよ！」

美佳は更に顔を赤く染め、力み、捲し立てる様に続けた。

わわ……馬鹿！

「お熱いわね～」

「今時珍しいな～」

「ヒューヒュー！」

「お似合いだよー？」

俺達が騒がしくした所為か、周りの野次馬が冷やかす。

俺は「結構です！」と美佳の手を引いて路地裏へ逃げ込んだ。

美佳が「あっ……」って乙女になっていたが知らない。

☆

くそ……野次馬め、なんか意識しちまうじゃねぇか……。

別に美佳に興味無い訳でも、ましてや可愛くない訳でもない。寧ろ可愛い。

……だけど……そう……ただ、友達だろ？

☆

なんで私はあんな事を言ったのかしら。

……コウシローは確かに格好良いし、男前だし、助けてくれた優しい奴だし……

今までそんな事なくて、男なんて獣ばかりだと思っていたのに、あの日出会った時から……コーシローの事ばかり考えてた。

……もしかして、私……

☆

俺と美佳はお互い、顔を少し赤くしたまま歩いていた。

話し掛けて、物を買って、段々、二人の顔の赤みは無くなっていった。

やがて大きな市場に出ると、人だかりが見えた。

「なんだ？」

「あっ……あまり良いモンじゃないわ」

見ると少女が首輪を填められて、売られていた。

「……は？」

「サーヴァイルから流れて来たのね。奴隷としてウェーリアに売られたのよ。コウシローの世界じゃわからないけど、ユグルでは、奴隷制度が政府に黙認されてるのよ」

最後の一人。パッと見た所、４、５０万リュールって所か……

「ふざけてやがる……」

あのデブ（奴隷を買った人）……ニヤニヤしやがってこのペドフィリアめ！ロリコンに失礼だ！

「あ、ちょっとコウシロー！？」

「おいちょっとそこのお兄さんよ？」

俺はデブに話し掛けた。

「な、なんだねチミは！？」

チミって……こいつ……いかにも小心者って感じだな……行けるか？

「ちょっとその女の子を譲ってもらえないですかね～？」

挑発する様な、ムカつく話し方で攻める。

少女を見ると、藍色の髪は右サイドポニー。翡翠の小さな瞳。まだ……多分１３って所か。

怯えている。目には涙が沢山溢れ、不安そうにチラチラと俺を見ていた。

「だ、だけどボクが大金で買ったんだ！ち、チミがそれより高い値段で買うなら話は別だけど……」

「お？言ったな？いくらだ？」

「７０万リュール」

クソ……足下見てやがるな？

「ちょっとちょっと！コウシロ！」

美佳が俺に耳打ちしてきた。

どうやら持ち主の証として首輪の鍵が必要らしい。

「おい、鍵もよこせよ」

俺の右手には５０万リュール。紙束が多いから見た目誤魔化せる。

「鍵も付けて１００万リュールだよ……」

……ぷっちーん。

いや、待てこれだと……

「おい。金を今から用意する。その子には手を出すなよ？これは取引だ。商品は綺麗なままでないといけない。わかるよな？」

「い、いいだろう……ただし、３日後の正午までだよ！」

「上等だ」

☆

「コウシローと同じ部屋！？」

「あぁ……急な人数変更で、他に空き部屋も無いらしい。……悪いが我慢してくれ」

「（……コウシローと同じ部屋……コウシローとおなじへや……コウシロートオナジヘヤ……）」

美佳の顔が真っ赤なのは覚えている。

第一章～第十話　ウェーリア。サイカイ、バイバイ（後書き）

晃側より描写が少ないのは仕様です。

作者の文才が無い訳ではありませんが（笑）

次の話でも美佳は可愛いです。

第一章〜第十一話　トーナメント開始！退けぬ戦い

――宿屋の一室――

コウシローと同じ部屋……

……ベッド……1つしかないじゃない……

だ、ダメよ……私まだ16だし……処女に決まってるじゃない！

でもコウシローが私を求めたら……？

そ、そうよね。野宿して、また危ない橋を渡るくらいならコウシローとの方が……

あぁん！もう！私は何を考えてるの！？

☆

その日の夜。俺はディモと話していた。

「よう、やっぱ見てたか……ディモ……言いたい事はわかるよな？」

「ふん……それで、貴様は金が欲しいと？」

「あぁ、流石にあの女の子の為に１００万使う事になると、ちと、これから辛いからな」

「まったく、欲深い奴だ。だが、嫌いじゃない。いいか？１００万とコレをやる」

コレと言ってディモが見せたのは一見普通の金色で出来た派手な装飾の鍵。

「コレはあらゆる鍵穴にも合う魔法の鍵だ。コレは便利だろう？……だが条件がある」

「……条件？」

「明後日のシングルデュエルトーナメントに優勝しろ。ダメージを一切受けずにな」

「……ライフコストは」

「許可しよう。結果はしっかり見ているが、優勝賞品と引換だ。欲望には対価が必要だ」

「……わかった」

☆

俺は宿屋へ戻り、部屋に入る。
部屋に入ると美佳が迎えてくれた。

「おかえり……コーシロー」

「おう」

「シャワー……浴びてきたら？私はもう入ったわ」

「あぁ、わかった……」

ずっと一人にさせるのも忍びないが、俺はシャワーを浴びに行く。

☆

へ、平常心。平常心……

私、顔赤くないかしら？

何事も無いフリするのも、大変ね……。

私は心を落ち着かせる為に備え付けの水を一気に飲んだ。

☆

熱を持った水滴が髪を、肌を通り滴る。

雨の様に降り注ぐ温水に体を清めてもらう。

……美佳がなんか落ち着いてなかった気がしたんだが、気の所為だったか？

……美佳は俺の恩人だ。何かあったなら助けてやりたいし、これからも、何もなくても……

まず第一に、友達として、助けてやりたい。

何か悩んでいるのか？それはわからない。……もう少し、様子を見た方がいいか……？

……俺、頼りねぇな……。

「……はぁ……あーっ！クソ！」

給湯を止め、シャワールームから出て体を拭き、髪を乾かしさっさと着替える。

──俺は今、俺に出来る事をやろう──

――翌日――

俺は今、決闘場に来ている。

シングルデュエルトーナメントの開会式は開催の前日に行われるらしい。変な話だ。

『皆様、ようこそおいでくださいました。これより、開会式を行います』

『……の影響で参加人数が非常に減り、本日中はまだエントリーを受け付けております。まだ参加していない方はどうぞご参加ください』

今まさに開会式の途中だ。

正直、退屈。

……そういえば、昨日の夜……

☆　☆　☆

「いや待て！落ち着け美佳！」

「なんでよ！コウシローは私じゃ不満なの！？……あ……そうよ…
…胸ね！？あの奴隷の子も、おっぱい大きいから助けるんでしょ？
私なんか……」

「違う！落ち着けって！女がおっぱい言うな！」

「違わないわ！……どうせ……どうせ私のなんか小さいわ……
小さくて悪かったわね！」

「何も言ってねぇだろ！」

俺はピンチだ……（主に貞操が）

どうやら美佳は何故か知らないが酒を飲んだらしく、顔を赤くし、
酒臭く俺を捲し立てていた。

酔っぱらった影響で性欲が爆発したのか俺を誘っている。

このままやり過ごせば何とかなりそうだが……

「どうせ私なんか……ぐすっ」

泣きだした

そこから先の記憶はあやふやだが、互いの貞操は守れたのを覚えている。

朝になって服装の乱れに気付いた美佳が顔を赤くして「私の……初めて……」とか何とか呟いていたが、誤解は解いた。

とても時間が掛かったが……

☆　☆　☆

『それでは優勝賞品を見ていただきましょう！』

俺はハッと顔を上げ、会場のモニターを見た。

モニターに映っていたのは蒼い、球体の水晶玉。ディザイアに貰った宝玉と似ている。

『この水晶玉は非常に珍しい材質で出来ています。材質的にはあの白竜青眼石に等しい存在だと思われます』

観客から「オォー！」と感嘆の声が沸き上がる。

どうやらそのハクリューなんとかが極レアのモンである事がわかった。

まぁ関係ないか。渡すんだし。

『……では、皆様、また明日。これにて開会式を終了とします』

また少し何やら話し、開会式を終了した。

どんどんと時は過ぎ、翌日。

シングルデュエルトーナメント当日。

俺と手を繋ぎ歩く首輪を付けたままの少女がいた。

そう。二日前に見掛けた奴隷の少女だ。

今さっき、あのデブ野郎から７０万リュールで買って来た。鍵無しだ。

「あ……あのです……」

少女が恐る恐る、やっと口を開いた。

まだ、怖いのだろうか。

「心配するな。首輪を外すアテはある。そしたら、お前は自由だ」

「え……？助けてくれるですか！？」

「あぁ」

少女は二次元でよく見る間違ったデスマス敬語口調。

「ホントですか！？一体どうして……」

「どうして……って言われてもな……奴隷なんて自分からなる物じゃない。それに……奴隷は人として扱われない。人権が無い。

只の道具だ……だからボロ雑巾の様に使い回され捨てられる。俺はそんなの許さない……奴隷制度なんて許せない……」

「……だ、だからって見ず知らずの子供に大金を使うですか？」

「……俺がデュエルトーナメントで優勝すれば、ある人物からお金を貰えるし、お前の首輪を外して貰える。少しの辛抱だ……待っていてくれよ？」

「え……あ……」

少女は黙って俯く。
何を考えているかわからないが、俺は間違えた選択はしていない。

「なぁ……名前、教えてくれよ……」

「あ……リィナ……リィナ＝オールド・ランナ……」

「よし……リィナか、良い名前だ。俺は榊洸司郎」

「……洸司郎様……「《さん》でいい」洸司郎さんですね」

「まぁ、さん付けでなくてもいいけどな。さぁ、俺の友人が宿屋で待ってる。俺は今からトーナメントだ……待っててくれ……」

「は……はいです！」

少女の碧の瞳には、希望の光が生まれていた。

☆

「リィナちゃん……ね……少しの間かもしれないけど、よろしくね？」

「よ、よろしくお願い致しますです！」

宿屋。美佳とリィナが顔合わせをしている。

「コウシロー。ホントに大会、一人でいいの？私も出た方が、少しは戦力に……」

「いや、美佳はリィナと一緒にいて守ってくれ。独りだと不安だろ？それと、３人で寝れる大きい部屋に移っておいてくれ。じゃ、行ってくる」

「コウシロー……わかったわ。あなたが帰る場所は私が守るわ。ちゃんと勝ちなさいよ？」

「あぁ……」

「あ！待つです、洸司郎さん！」

「ん？」

振り返るとリィナが手招いていた為、近付くと耳打ちしようと手振りした。

俺が耳を近付けると、すぐ、柔らかくて擽ったい感覚が頬を襲った。

「え？」

「あ……」

「えへへ……ちゅーしちゃったですよ……頑張ってください！」

どうやら頬にキスされたらしい。

俺は少し照れたが、リィナの頭を撫で、立ち上がる。

美佳は口をパクパクしていた。

「い……行ってきます……」

「い……行ってらっしゃい……」

「待ってるですよー！」

美佳の表情が引き釣っていたのを俺は気付かなかった。

『以上がルールとなります。まずＡブロックの試合を行います。では再びトーナメント表を表示、掲載致しますので、ＡブロックのデュエリストＮｏ．３２番までの方は位置についてください』

大会のルールやトーナメント表の説明が終わり、会場は騒がしくなった。

参加人数は３２０人。１ブロック８０人で俺はＡブロック。

いきなりデュエルだ。

デュエル場は８つ。ａ対ｂの２人１組、ｃ対ｄの２人１組で計２組が１つのデュエル場でそれぞれデュエルを行う。

１つのデュエル場で４人ずつデュエルする訳だ。だから４×８＝３２人か。

俺は案内に従い、会場のデュエル場に歩を進める。

既に対戦相手ともう一組、そして１組に付き１人の審判が（つまり２人）位置についていた。

「用意はいいな？それでは、デュエルを始める！」

相手は至って普通な青年。

悪いが、負けてやれないんで、俺と当たった事が運の尽きだ。

「デュエル！」
「デュエル！」

掛け合う様に互いにデュエル開始を宣言した。

相手のターンランプが光る。

「ボクのターン！ドロー。ボクは魔法カード《イリュージョンサーベル》を発動！手札の《神剣－フェニックスブレード》を捨てて、デッキから2枚戦士族モンスターを墓地へ送る。《光帝クライス》と《Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ》を墓地へ！」

戦士族？しかもフェニックスブレードとクライスとディアボリックか……厄介なデッキだ……

「さらに《アームズ・ホール》！デッキトップを墓地に、デッキから《Ｄ・Ｄ・Ｒ》を手札に！そして《増援》と《おろかな埋葬》を発動！《ネクロ・ガードナー》を手札に《Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン》を墓地へ送る」

ん？逆じゃないか？……いや……フェニックスブレードか！

「墓地のフェニックスブレードの効果でクライスとエアーマンを除外！フェニックスブレードを手札に加えて、それをコストにＤＤＲ！除外されたクライスを特殊召喚！ＤＤＲとクライスを破壊し、２ドロー！……再び、ネクガを捨ててＤＤＲ！エアーマンを特殊、効果でバブルマンを手札に加える！そして……」

まだ動くのか！？先攻１ターン目だろ？だからバブルマンか……？

「《ミラクル・フュージョン》！フィールドのエアーマンと墓地のクライスを除外し、《Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング》を融合召喚！」

シャイニングＡＴＫ２６００→２９００

正直、圧巻とはこの事か……もう少し手札がよくて、後攻だったらやばかった筈だ。

だが、これで相手の手札はバブルマンと１枚……墓地にネクガか……

バブルマンがある以上、頑張ってネクガを潰さないと危険だ……。

反芻するように唾液を飲んだ。

「……残念な手札だなー……やっぱエアーマン召喚だけでよかった

か。ターンエンド！」

「よし、ドロー！メインフェイズ、手札から魔法カード《黒兎鳥》を発動。手札から信者と名のついたチューナーを除外しデッキから信者と名のついたチューナーを特殊召喚する。《信者・ジュンター》を除外し《信者・ジャメラ》を特殊召喚！そして、ジュンターの効果でデッキから《信者・知能のアスレイ》を特殊召喚！そのままレベル４アスレイにレベル４ジャメラをチューニング！……地を砕き、敵を逃がすな。同等の力を持って驕り高ぶる者を平伏させん！シンクロ召喚！制圧せよ！《囁く者・アガレス》！」

現れたのはクロコダイル……に乗った、具合の悪そうな青褪めた老人。その手には大鷹が止まっている。だが、老いても力は衰えていない。

「アガレスの効果！シンクロ召喚成功時、除外された相手のカードをデッキに戻す。そしてこのカードがいる間、相手は自分のカードの効果、コストでカードを除外する事が出来ない！」

「えっ……」

相手の除外されたカードはデッキに戻り、ネクガもディアボリックも使えなくなった。これは勝ち戦だ。

シャイニングＡＴＫ２９００↓ＡＴＫ２６００

「さぁ……バトルフェイズだ！！」

第一章～第十一話　トーナメント開始！退けぬ戦い（後書き）

完璧決闘者……いや、なんでもありません（笑）

第一章～第十二話　強者の余裕。無傷の勝利？（前書き）

何度も言います。

チートカードはちゃんとバランスとって考えてます。

ＴＧよかマシだ！↑

なんでもないですｗｗｗ

第一章～第十二話　強者の余裕。無傷の勝利？

「勝者、榊洸司郎！」

結局、一回戦目はあのまま相手のギミックを封殺し、勝利した。

決勝戦を含め、９回戦う必要がある内の既に５戦、勝利している。

つまり、後４戦勝つ必要があるが、かなり順調だ。ライフは一度も減らしていない。

今日の分のトーナメントはもう終わり。各ブロック、４人残し合計１６人。

明日同じブロックの２人を倒し、Ａブロックの代表となり、Ｂ～Ｄのどれか２ブロック倒して優勝だ。

「おめでとうございます。お疲れ様でした。また明日、お待ちしております」

受付嬢の愛想振り撒く笑顔にさよならして、俺は会場を後にした。

……。先日寄りそびれた国立図書館に寄ってから戻ろう。

☆

『勝者、榊洸司郎！』

私達はテレビやラジオの中継を聞いて歓喜した。

「「やったわ（です）！！」」

流石コウシローね！

純粋に、凄いと思う。

横にいるリィナちゃんは興奮冷めやらぬ……って感じだけど、どうしても、コウシローにキスした所がフラッシュバックする。

今は落ち着いたけど、その時ちょっと、嫉妬とか……そんな気持

ちになったのを私は自覚した。

「ねぇ、リィナちゃん？」

「はいです！」

訊いてみる。不安で胸が押し潰されそうだけど。

「コーシローの事、好き？」

「ふぇっ！？……は、恥ずかしいですよぅ……」

この反応は……

「好きなのね？異性として……」

「……は……はいですぅ……」

顔を真っ赤にしたリィナちゃんは可愛い。大胆な行動していて、純情だった……それは私もか。訊いている私も顔が赤くなって

いるのに気付き、少し恥ずかしくなった。

「美佳さんも洸司郎さんの事……す、す、しゅきなんですか！？」

噛んだ。凄い可愛い。けどその質問……

「う……え……あ……えと……」

私を混乱に陥れるには十分な破壊力を持っていた。

「……す……好きなんですね……で、でも、例え美佳さんにでも洸司郎さんを譲る気は無いのですよ！勝負ですよ！」

「ええー……え……あう……の、の、望む所よ！！」

何故私はこんな事を言ってしまったのだろう。

それは私も洸司郎が好きだという裏付けとして十分だった。

だけどこの時の私はそれを確信できないでいた……。

☆

ガチャ……と音を立てて扉が開く。

「よう。ただいま、勝って来たぜ！」

「コーシロー！！」
「洸司郎さん！！」

二人が俺の前まで走って来て出迎えた。

言葉の通り、勝って来た事をもう一度伝えると、二人は確認する様に喜んでいた。

☆

少し時間が経ち、俺達は宿屋の食堂の隅の方で食事を採っていた。

「へぇ～……ダメージを一度も受けずに……！」

「凄いです！洸司郎さんはやっぱり凄いですよ！」

「まぁ、これでも経験と実績はある方だからな。あと４戦も……ノーダメージで勝てば、リィナの首輪も外せる……」

「でも次の対戦相手……４人の優勝候補の一人、律稀（りつき）って人じゃない？」

「優勝候補……ですか？」

「あぁ～……確かに、ちょっとばかり観戦してたが、同じブロックに強そうな奴は二人はいたな」

食事を終わらせる。今日の帰りに現状のトーナメント表を印刷して貰って来た。それを二人の前で広げ、赤いペンで次の『律稀』って奴の名前を丸で囲む。

「Ａブロックには二人いるわね、優勝候補。律稀、翔太（しょうた）……この二人よ」

「……成程。他の二人は？」

「Bブロックの康介、Dブロックの淳也。この4人がデュエルトーナメントでいつも優勝を争っているわ。でも仲はいいらしいわ。…トーナメントには9割方出てるけど、ウェーリアに住んでいるかは分からないわ。実力はほぼ互角……強敵よ……」

「へぇ……」

相手のデッキがわかればいいけど、わかっても、別のデッキは使えないけどな。

相手にどんな事情があっても俺は負ける気は無い。パーフェクトデュエルを成立させてもらう……！

と、意気込んだ所で、何やら複数人の男が俺達のテーブルを囲んでいた。

「よーよー兄ちゃんよ？可愛い女二人も連れて羨ましいなぁ？」

「しかも片方首輪付けてんぜ？……奴隷か～……いい趣味してんなー」

俺に近かった二人が口を開いた。

「俺達にも分けてよー。いるなら金払うよー？」

まったく……こんなトラブルが起こるのは晃が持ってくるので十分だ……。

男は6人。俺達3人に2人づつ横に付いている。美佳は警戒して身を固め、リィナは怯えている。まったく……腹が立つ。

俺が立ち上がろうとしたその時、テーブルから少し離れた所から声が掛かった。

「おい……おれの前で幼女を怯えさせてんじゃねぇよ……飯が不味くなんだろ？」

眼鏡を掛けた、俺と同じ位の歳だろう青年が、腕を組み、眉間に皺を寄せて男達を睨みつけていた。

助っ人か？

「んだぁ？てめぇ……」

「ふっ……名乗る程の相手じゃないな」

眼鏡の男は相手を小馬鹿にする様に鼻で笑う。

スカッとするな。

「んだとぉ～？」

「おい待てよ……俺の事忘れてないか？」

美佳とリィナを怯えさせといて、逃げようったってそうは行かないぜ？

「くっ……」

「でゅ、デュエルしろ！俺達が勝ったら女を貰うぞ！」

男の一人がそう叫ぶ。

「勝手に決めてんじゃねーよ……だったらお前らは負けたらデッキを捨てて全裸で街一周だ」

「おう、おれもそれでいいぞ」

眼鏡の人から賛同された。

「くっそ……後悔すんなよ!?」

「なぁ、あんた名前は？」

眼鏡の人に訊いてみる。

「淳也。斎藤淳也（さいとうジュンヤ）」

「え、淳也って……」

「よし、半分任せていいよな？淳也」

「任せろ。幼女を守る為だ。本気だす」

「くっそ～……舐めやがって……」

「調子乗ってんのも今の内だぞ？おぉ！？」

「……ちっ……うるせぇな……黙れカス野郎」

淳也さんがお怒りだ。あっちは任せよう。頼むぞ紳士（ロリコン）。

「じゃ、こっちの3人は俺と勝負だな。デュエルのルールは墓地、フィールド共有でそっちはローテーションでいいな？」

「お、オレ達が勝ってから言い訳すんなよ！？」

「はいはい……」

「や、どうも助かったよ。淳也」

「気にするな。同志よ」

「いや、俺はロリコンじゃないけどな」

俺は淳也に礼を言い、互いに握手している。
デュエルには勝った。

相手は泣きながら全裸で街を駆け抜けた。

今頃お縄に掛かった頃だろう。

「いや、おれは幼女が怯えていたのが気に入らなかっただけさ」

「いや、でも助かった。サンキュー」

「……おう」

「あ……ありがと」
「ありがとうです！淳也さん！」

美佳とリィナがそれぞれお礼を言う。

「幼女に礼を言われたー！これで明日は優勝だヒャッホーゥ！！」

なんか叫びながら淳也氏はどこかへ去ってしまった。

紳士よ、決勝で会おう。

「変わった人ですね」

「それを変人って言うのよ。優しい人だったけど」

「Dブロックだから、決勝で戦うかもな……」

☆

『それでは、デュエルを開始致しますので各ブロック、デュエリストの方は指定のデュエル場についてください』

舞台は再びトーナメントの会場。

すぐに日付は変わり、トーナメントは再開された。

「……さて、行くか」

指定の位置につき、相手を見る。同い年位にしては少し短身、垂れた前髪は額迄で、細い瞳の奥は何を考えているか察する事が出来ない。

彼が律稀って人か。

「それでは、宮本律稀（みやもとリツキ）様と榊洸司郎様のデュエルを開始致します」

「よっしゃ。今回も遊ぶかな」

あ、遊ぶ！？……それほど余裕があるのか、面白いコンボか……と、取り敢えず怖いな。アド損な行為をしてくれるならいいが……

「デュエル！」

ターンランプは律稀の方が光る。

「ドロー。モンスターをセット。魔法、罠を2枚セットでターンエンド」

「ドロー。《信者・ベッカ》召喚」

ベッカは金髪の外人さん。どちらかと言えばレベッカな気がする。名前的に。

「ベッカの効果！自分フィールド上にこのカードしか存在しない場合、デッキからレベル３の信者を特殊召喚する。《信者・ダリツー》を特殊、そして、レベル３ダリツーにレベル３ベッカをチューニング。その一瞬に駆けろ！お前に運べぬ物は無い！シンクロ召喚！我が望みを叶えよ。《囁く者・セーレ》！」

現れたのは美男子。俺の前で跪き、すぐ羽の生えた馬──ペガサスと言うには神々しさに欠けるが──に跨った。

「バトルフェイズ！セーレでモンスターにアタックだ！」

「モンスターは《共鳴虫》」

セーレＡＴＫ２６００
共鳴虫ＤＥＦ１３００

「戦闘破壊され効果でデッキから《アルティメット・インセクトＬＶ３》特殊」

「セーレの効果！相手モンスターを戦闘破壊したらデッキから魔法罠を２枚落とし１枚ドロー出来る！サバトの儀式とソロモンの剣を墓地に送り、ドロー。更に、墓地の信者（ベッカ）を除外し、２回目攻撃が出

来る。ＬＶ３にアタック！」

セーレＡＴＫ２６００
ＬＶ３ＤＥＦ９００

「くそっ、２回攻撃なんてテンタクルスだけで十分だ！」

て、テンタクルス？？ワームの事か？

とりあえずレベルアップは防いだ。ＬＶ５になると困るからな。

「メイン２、２枚伏せてエンド」

「エンド時、リビデ発動。対象はＬＶ３」

《リビングデッドの呼び声》
墓地のモンスターを蘇生する制限カード。
イモムシとダンゴムシが混ざった様な幼虫が再び現れる。
因みに、ユグルでの禁止制限は俺が地球に居た頃のものとまったく変わらなかった。
しかし、ユグルにしか無いカードも禁止制限に混ざっていたが。

「じゃ、ドロー、スタンバイ時、効果でＬＶ３進化。デッキからＬＶ５を特殊」

セーレＡＴＫ２６００→２１００

「《大樹海》発動。《アーマード・ビー》召喚。ビーの効果で……えっと……セーレの攻撃力を半分！」

あぁ、名前がわからなくて迷ったのか。

セーレＡＴＫ２１００→１０５０

「バトルフェイズ。ビーでセーレにアタック」

武装化した鉄の蜂が、鋭い針でセーレへ突進してくる。

「そうは行くか。攻撃宣言時（オーバーブラックバリア）！囁く者がいる時に相手が攻撃してきた場合、相手のモンスターをすべて破壊する！」

「なにっ！？くそぅ！」

「いいな？更にチェーン発動！《デストラクト・ブラッディ》！囁

く者を除外し、相手の魔法罠を全て破壊し、このターン相手はカードをセット出来ない！」

「ち、チートめ！」

これで相手のフィールドは丸裸。

「セーレの効果、除外された場合、デッキから信者を除外する！《信者・ジュンター》を除外し、《信者・強力のレイジ》を特殊召喚」

「くっ……エンド」

「じゃ、ドロー。サバトの儀式の効果で手札の信者を墓地へ送り回収。そのまま発動！ジュンターとセーレを墓地に戻し、《囁く者・デザイア┣バフォメット┫》を儀式召喚！バトルフェイズ！バフォメットでアタック！」

バフォメットＡＴＫ３０００
律稀ＬＰ８０００→５０００

「手札から《グリード・ターミネート》発動！このターン一度しかアタックしていない場合発動可能！囁く者一体の守備力を攻撃力に加算し、続けてアタックする！」

「ゑ」

バフォメットＡＴＫ３０００→５７００

律稀ＬＰ５０００→０．

「よっしゃあ！」

第一章～第十二話　強者の余裕。無傷の勝利？（後書き）

律稀君はリア友のデッキですが、パフェとる為に犠牲になっていただきました。

またいつか出したいです。
目立てなかったので。

番外編（前書き）

今回は番外編です。

ゲストは主人公、榊洸司郎！

番外編

作者「作者、紫苑の槍です」

洸司郎「主人公、榊洸司郎です」

作者「いやー前の話ではまたもチートカードが炸裂しましたね」

洸司郎「おい作者、ちょっといいか」

作者「なんでしょ」

洸司郎「時間稼ぎに『廃棄人形』様の真似してんなよ。バレバレだ」

作者「あ。はい。まぁでも、いいではないですか」

洸司郎「仕方ねぇな」

作者「では進めましょう」

洸司郎「今回は伝えておきたい事があるんだ」

作者「美佳は洸司郎の嫁。異論は認めない」

洸司郎「オイ」

作者「さーせん」

洸司郎「まず一つだが、更新速度の事だな」

作者「私は携帯で執筆、投稿をしています。メールで投稿するので私は空白や改行を入れて５０００文字しか一度に投稿出来ません」

洸司郎「作者は面倒くさがりだからメール2件作って投稿したりしないんだな」

作者「はい。更に、考えるのも文字を打つ入力画面で考えるので進まない時や浮かばない時は詰みです」

洸司郎「だから考えるのに時間がかかる事が多くて、尚且つ入力文字数が少ないからな」

作者「亀更新で短めなのは多いかもしれません」

洸司郎「ま、両方ダメとか恥ずかしいから片方だけでも頑張ってっから許してやってくれ」

作者「申し訳ない」

洸司郎「それと次は……オリカだな」

作者「オリカはね、私が『こんなカードがあると便利だな』って思ったカードを作ってます」

洸司郎「オイ、グリード・ターミネート自重しろよ作者」

作者「だが断る。洸司郎は1キル出来るデッキですから。既存のカードはデッキにいれたくないので頑張って考えます。ただ……」

洸司郎「まぁ、そうだな。チートカードだと思えるカードも、ちゃんと作者はデメリットを考えてあるんだ。チート乙とか言わないでくれよ？」

作者「まぁ、デメリットは、描写が必要な時じゃないと書かないからチートカードに見えるのは仕方ないですね」

洸司郎「そんで……あぁそうだ。誤字脱字、改行や空白のミスの報告。それから感想……レビューだな。ここら辺はしてくれると助かるな。偶にわざと改行しない時とか、別の意味の漢字とか、意識してる場合もあるから。でも、気になったら教えてくれ。頼む」

作者「そうですね。感想とか、報告とか送ってくれたらお色気シーンが増えますよ。きっと皆様は期待してるでしょうし」

洸司郎「……因みに、誰の」

作者「ゆう……」

洸司郎「ちょっと面貸せよ」

作者「痛いですね。本気で殴らなくても」

洸司郎「お前が悪い」

作者「さて、次の話は……」

洸司郎「そうだな……『廃棄人形』様の方、《遊戯王　僕らの進んで行く道》を見てる人はわかると思うが」

作者「全体的に描写が少ないのは仕様ですよ？」

洸司郎「……いや、まぁそうだが。進行速度の差がな」

作者「まぁ、さっき説明した通りですよ」

洸司郎「あぁ、後さ、俺の話題がちょくちょく挟まってんだよな」

作者「あ、結構嬉しいですねアレ。宣伝にもなるし、偶に新しいアイデアにもなるし、単純に自分のキャラが使われるのが嬉しいですね」

洸司郎「そうだな。こっちでは晃の話はあまりしてないけどな。あぁ～……晃は今頃何してんだろーなぁ……」

作者「ハーレム中」

洸司郎「オイ晃ちょっと尻貸せよ」

作者「やめｗｗｗ」

洸司郎「冗談はおいといてだな」

作者「他に伝える事は……？」

洸司郎「オイノート寄越せ」

作者「あぁん」

洸司郎「（パラパラ……と捲り）なぁ？」

作者「はい？てか嫌な予感が、君ネタバレする気ですよね？『廃棄人形』様と同じ事に……っ！」

洸司郎「ヒロイン４人ってさ……」

作者「あ……（やられた……的な顔する）」

洸司郎「俺恋人いるんだよな」

作者「はい」

洸司郎「恋人いるって確か後付けだよな。だからハーレムなんだよな？不自然だよなぁ？」

作者「……はい」

洸司郎「過ぎた事は仕方ねぇけどよ……まぁ、いいか。あ、そういや……よ」

作者「なんでしょ？」

洸司郎「ディモってさ……名前、ニモに似てるよな」

作者「……ぷっ」

ディモ「お前か？俺を笑ったのは……」

洸司郎「あ」

作者「あ」

番外編（後書き）

作者はログアウトしました。（全治２ヶ月）

第一章～第十三話　躍動

「デュエル！」

相手は、内山翔太（うちやまショウタ）と言ったな。

少しぽっちゃり系で、なんだかのほほんとした感じで、何を考えているかはわからない。

「翔太～手札事故れ～」

「えっ……」

律稀が野次を飛ばす。
是非事故って欲しい物だ。

翔太は、けっ、と受け流し、最初の５枚の手札を引いた。

美佳が言った通り仲が良いのか気軽に話し掛けている。

うん。翔太が律稀を指さし、ぷぎゃあとか言ってる。

事故ったみたいだ。
律稀はガッツポーズを取った。

なにこの二人面白い。

ターンランプは俺の方が光った。
よし、行けっか？

「ドロー……モンスターをセット、カードを2枚セットしエンド」

「ドロー、《カード・ガンナー》召喚。効果でデッキから3枚落とす」

少しの間が空いた。多分落ちたカードはよくなかったのだろう。
カーガンか……まだどんなデッキだか。

「バトルフェイズ入りたい。カーガンでモンスターにアタックは？」

魔法罠の発動を訊いたのか。俺は首を横に振り、攻撃を受けた。

カード・ガンナーＡＴＫ１９００
信者・レイズＤＥＦ１２００

カーガンの腕からビームが出て、レイズを貫いた。

「レイズの効果！戦闘破壊された場合、デッキから信者を除外して同名カードを特殊召喚する！デッキから《信者・黒の使い》を除外

し、同じく黒の使いを守備で特殊召喚！」

現れたマントの様な黒装束の悪魔。上級モンスターである。

「そのままエンド」

伏せが無い！ラッキーだ！

伏せ除去をしなくていいなら、俺の1キルが火を噴くぜ！

「ドロー！ジュンターをコストに《黒兎鳥》を発動！デッキから信者チューナー、《信者・ベッカ》を特殊、ジュンターの効果でアスレイを特殊！そして《信者・カルベラ》を召喚、効果！手札の信者を除外し、その信者のレベル分までレベルを上げられる。手札の《信者・ローワン》を除外し1レベル上げる！ローワンの効果で黒の復活を手札に加える」

俺のフィールドには4体のモンスター、俺の手札は1だが、セットは2枚。

一気に決める！

「レベル4アスレイにレベル2カルベラをチューニング！シンクロ

召喚！《囁く者・セーレ》！そしてレベル５黒の使いにレベル３ベッカをチューニング！シンクロ召喚！《囁く者・アガレス》！」

俺の前に美男子と、クロコダイルに乗った老人のが２人が現れた。

「バトルフェイズ！セーレでカーガンにアタック！」

カード・ガンナーＡＴＫ４００
セーレＡＴＫ２６００

翔太ＬＰ８０００→５８００

「っ！カーガンが破壊されたから効果で１ドロー」

「セーレの効果！このカードが相手のモンスターを戦闘破壊したら魔法罠を２枚落とし１ドロー！更に、墓地のベッカを除外！続けてアタックだ！」

俺は効果処理しドローをしながら流れる様に攻める！

……前にもこんな感じで晃を、それから桜に教える時も、１ターンキルした事があるな。その時はもう少し展開したが。

「2回目の攻撃がダイレクトの場合、墓地のモンスターを除外しないとダメージが半分になる。だからカルベラを除外し攻撃力を維持する！」

セーレＡＴＫ２６００

翔太ＬＰ５８００→３２００

「そしてアガレスでダイレクトアタック！ナイトメアフラッシュ！」

闇がプレイヤーを包み込む。

アガレスＡＴＫ２９５０

翔太ＬＰ３２００→２５０

「ラストだ！罠発動！《現実と幻想の反転（リバース・オブ・リアルアンドイメージ）》自分フィールド上に囁く者を含め2体以上モンスターが存在する場合、自分のフィールド上のモンスター全てを墓地へ送り、除外された自分のモンスターを可能な限り特殊召喚する！この効果では囁く者は1体まで特殊召喚出来る。まぁ今は関係無いか。行くぜ！信者・黒の使い、ジュンター、ローワン、ベッカ、カルベラを攻撃表示で特殊召喚！オーバーキルだが……ダイレクトだ！」

黒の使いＡＴＫ２０００
ジュンターＡＴＫ１２００
　ローワンＡＴＫ３００
ベッカＡＴＫ９００
カルベラＡＴＫ３００

合計４７００

翔太ＬＰ２５０→－ＬＰ４４５０.

「やりぃ！」

翔太はガッカリしていた。
当然だろう。
今のは俺も嫌だ。

☆

俺は選手控え室でベンチに腰掛けている。Ａブロック用の控え室だから今、律稀や翔太が出ていった所だ。

少し話をしたが、淳也とも知り合いらしく、２人共面白くて気の良い人だった。

律稀は昆虫デッキ。
アルティメットインセクトや大樹海からのアーマードビー、クロスソードハンター、ジャイアントワーム、デビルドーザーで波状攻撃をしかける、しぶといデッキらしい。

魔法、罠、モンスターのシナジーがバッチリのいいデッキだった。
地縛神ｕｒｕや地底のアラクネーも出てくるらしい。

早めに終わってよかった。

アルティメットインセクトに無傷で勝利は伏せが良くなきゃ辛いだろう。

翔太は巨大ネズミからのスクラップ・リサイクラー、カーガンでの墓地肥やしでボルト・ヘッジ・ホッグを落とし、ジャンク・シンクロンで釣り上げ、レベル８スクラップドラゴンを出し、歯車街を壊したりフィールド魔法の張り替えで古代機械巨竜を並べるらしい。

こちらも早く終わってよかった。

俺は控え室のベンチに独り、ジュースを飲んで寛ぎ、集計を待つ。

『準決勝のデュエルの準備が整いました。各ブロックの代表者は指定のデュエル場でデュエルを開始しますので、デュエル場で待機してください』

よし、後2戦……行きますか！

☆

『それでは、森岡康介様と榊洸司郎様のデュエルを開始いたします』

「よーし、今回も豪快に行くぜー」

タンクトップ。短髪。サングラス。如何にもな感じの短パン小僧。

夏だね。

「チート対チートか……」

誰かが呟いた。

誰がチートだ。

「「デュエル！」」

ターンランプは相手が光る。

バーンじゃありませんように。
伏せがありませんように。
フェーダーありませんように。
鳥剣闘じゃありませんように！

「ドロー、ソラエク発動。コストはジェイン。２枚ドロー、２枚落とす。もう１回ソラエク発動、ウォルフ捨てる２枚ドロー。２枚落とす。ルミナス召喚。効果でバルブ捨てて、墓地のガロス特殊。エンドでルミナス効果３枚落とす。ガロス効果で２枚落とす。ライラとライコウ落ちたから２枚ドロー」

ライトロードォォオオオ！！

てか、全部略称でプレイすんなぁぁああ！

……ライトロードめ……地球の時の大会での借りを返してやる……

「ドロー、手札を1枚、デッキの一番上に戻す事で手札から《信者・マスリー》を特殊召喚。そして手札から《信者・ズィロ》を召喚。ズィロの効果でデッキトップを除外し、手札から《信者・チトゼ》を特殊召喚！」

今日は手札が絶好調だ！このまま押しきる！

「そしてデッキトップから除外された《信者・ジュンター》の効果でデッキから《信者・知能のアスレイ》を特殊召喚！さぁ、魔法カード。《黒の復活》を発動！自分の手札、フィールドから囁く者と名のついた融合モンスターによって決められた融合素材を除外し、融合召喚を行う！手札の《信者・レイズ》と《信者・アスレイ》を融合！」

どくん。と、鼓動が脈打ち、俺の体は熱くなる。

まただ。ユグルに来てから、デュエルする度にいつもだ。

そして俺の口は無意識のままに、勝手に前口上を紡ぎだす。

「……大いなる知恵と知識に誰もが口を閉ざす。絶対的なその知に抗う術は無し。融合召喚！その力を我に示せ！《囁く者・ストラス》！」

現れたのは険しい顔した男性。
だが、それは敵を冷たく見据える、静かな闘志。

「フィールドから除外されたアスレイの効果！除外されている、このカードを除く、チューナー以外の信者を1体特殊召喚する！《信者・レイズ》！」

どくん。

また、俺の体が煩く。

熱く……あつく……アツク……ア……

痒くて、疼く。

「ストラスがいる限り、シンクロ召喚に使用されたモンスターは除外される！レベル３レイズに、レベル１のズィロをチューニング！繋げ。環を結び、愛情を。溶け合う和は更に大きな輪を作る！シンクロ召喚！《囁く者・サレオス》！」

そこには、宝冠をかぶり、ワニに乗った雄々しい兵士。
だが、それは敵の前だけ。
穏和な彼は愛情を芽生えさせる事が出来る。

「サレオスの効果！このカードの特殊召喚に成功した場合、除外された信者を１体特殊召喚出来る！レイズを特殊召喚し、そのまま、レベル３レイズにシンクロチューナーであるレベル４サレオスをチューニング！」

駄目だ。
止まりそうにない。
展開すればする程……いや、んな事は流石に気の所為の筈だ。

「過ぎたる力は望まれる者に味方する。光も闇も飲み込み、凌駕する！力はただ一つの条件に！シンクロ召喚！《囁く者・フォラス》！」

次は、ムキムキの屈強な男性。
だが、実は腕っ節より知性派だったりするのは内緒の話だったりする。

「フォラスの効果！自分の手札、及び魔法罠に何もない場合、相手の手札の枚数分、７００ダメージを与えられる！」

「なにぃいいいいい！？」

康介ＬＰ８０００→３８００

「おのれぇえええええ！！」

「まだまだ！チトゼの効果で、デッキトップ3枚を捲り、その中の信者の合計レベルと同じレベルの除外されたモンスター1体を特殊召喚する！1枚目《信者・ズィロ》2枚目《信者・スレイ》3枚目《信者・レイズ》……合計レベルは7で失敗だ。だが、手札が0枚の時この効果で特殊召喚出来なかった場合、捲った中の一枚、手札に加えられる！スレイを手札に、残りは戻し、シャッフル。そして、マスリーはシンクロする時、レベルを1つ上げるか、下げる事が出来る。4として扱い、マスリーにレベル2チトゼをチューニング！シンクロ召喚！《囁く者・セーレ》！」

そして美男子が現れた。

「バトル！セーレでルミナスにアタック！」

「あ、オネストで」

「やっぱりな。させるか！手札のスレイの効果！フィールドに囁く者が存在する場合、バトルフェイズに発動したカードの効果を、このカードを手札から墓地に送る事によって、無効にし、除外する！」

「何だとぉおおおお！？」

セーレＡＴＫ２６００
ルミナスＡＴＫ１０００

康介ＬＰ３８００→２２００

「セーレの効果。デッキから魔法罠を2枚落とし、1枚ドロー。続けて、スレイを除外して、セーレでガロスに追加攻撃だ！」

「くっ……あ。ネクガで」

あったのかよ！
だが、俺も今引いたのは……

「あ、今引いたスレイで」

「また無効かよ！」

セーレＡＴＫ２６００
ガロスＡＴＫ１８５０

康介ＬＰ２２００→１４５０

「じゃ、ストラスでダイレクトアタック！」

ストラスの指から光が放たれ、康介を襲った。

康介ＬＰ１４５０→０．

「超オッケー！」

そして俺はガッツポーズを取りどこからか、「やっぱりチートか……」と聞こえたが、気にはしなかった。

第一章～第十三話　躍動（後書き）

どうも、紫苑の槍です。

まずは、申し訳ございません。

番外編を書いた直後なのに二週間以上更新が空いてしまいました。

ですがこれからは一週間に一度は更新をします。

余裕があれば2回。

頑張りますので応援や感想をお願いいたします！

第一章～第十四話　完璧決闘（パーフェクトデュエル）（前書き）

お待たせしました。

遂にリィナ救出編、終わりました。

第一章〜第十四話　完璧決闘（パーフェクトデュエル）

俺は過去にどれほどの物を失って来ただろう。

その所為で、いや、その前からか、解らない。

俺はどれほど欲深くなっただろうか。

だけど、俺が望めば望むだけ、それが手に入った覚えはない。

有魅も……その中の一つだ。

「洸司郎……私、あなたが好き、です。愛して止まないどころか、愛し過ぎて病みそうです」

「……俺も、お前の事を考え過ぎて病みそうだったぜ？」

だけど俺は、有魅を……失ってしまった――

☆

「バトルフェイズ。《宝玉獣　トパーズ・タイガー》で裏守備モンスターにアタック！」

純也の声で意識を取り戻した。

……いけないな。
何を感傷に浸っているんだ。

レイズＤＥＦ１２００
トパーズＡＴＫ１６００↓２０００

「モンスターは《信者・レイズ》。戦闘破壊されたから効果発動！
デッキから《信者・ジャメラ》を除外しジャメラを守備で特殊！」

「続けて《宝玉獣　サファイア・ペガサス》でジャメラにアタック」

ジャメラＤＥＦ１５００
サファイアＡＴＫ１８００

「ジャメラが戦闘破壊された時、罠カード《黒の教え》を発動。破

壊されたジャメラと手札の《信者・ローワン》を除外し、2枚ドロー！ローワンの効果！このカードが除外された場合、《黒の復活》を1枚、デッキ又は墓地から手札に加える」

「じゃ、1枚セットしてエンド」

「俺のターン。ドロー」

周りからの歓声が俺と相手の純也に降り注ぐ。

そう、これは決勝戦。

俺も純也も決勝まで勝ち進んだのだ。

……フィールドを確認しよう。

俺のフィールドは0枚。純也のフィールドには《宝玉獣　サファイア・ペガサス》と《宝玉獣　トパーズ・タイガー》と伏せが2枚と、宝玉化したサファイア。

相手は宝玉獣。そこまで詳しくはないが、多分氾濫型だろう。

ってなると発動に条件のある伏せは激流葬くらいだな。

神の警告くらいは入ってるか？

いやマシュマロンとかを除去出来るフリーチェーンか？

仕方ない。

バーンと当たったと思え！

「手札から、《黒の復活》を発動。自分の手札、フィールドから囁く者と名のついた融合モンスターによって決められた融合素材を除外し、融合召喚を行う。ジュンター（戦士）とカルベラを融合！《囁く者・エリゴス》！効果発動。融合召喚成功時、相手のカードを一枚墓地へ送る！俺から見て右側だ」

「ちっ……仕方ないな。対象になったカードをチェーン発動。《収縮》。エリゴスの攻撃力を半分」

「収縮か……よし、やるか！手札から《サバトの儀式》発動！除外された囁く者または信者を任意の枚数墓地に戻し、その合計レベルと同じレベルの囁く者を手札から特殊召喚する。ローワン（1）、カルベラ（1）、ジュンター（2）、ジャメラ（4）を墓地に戻しレベル8……欲に塗れた悪を堕とせ！儀式召喚！《囁く者・デザイア┣バフォメット┫》降臨！」

『我が、欲望が、勝利へと導く。貴様の欲望を……見せてみろ』

見せてやるよ……欲張りで、傲慢な、醜い……だけどそれが、一

番美しく輝く。

――人間の力を――

「バフォメットの効果！墓地のカルベラを除外し、トパーズを吸収！」

「っ……こいつは……」

「手札から《信者・チトゼ》を召喚し、効果！デッキトップ３枚を捲り、その中の信者の合計レベルと同じレベルのモンスターを除外から特殊召喚出来る。１枚目《信者・ズィロ》２枚目《信者・ズィロ》３枚目《罰黒》……レベル２！失敗したが、手札０枚だから失敗した場合１枚ドロー。行くぜ……レベル８エリゴスにレベル２チトゼをチューニング！シンクロ召喚！」

一陣の風が吹く。

「世界を怒りと憎しみで包み、混沌で支配しろ！」

美佳と戦ったあの時みたいに。

「愚者に裁きを、信じる者に力と栄光を！」

俺に勝利を運んでくれ。

「《囁く者・怒りのルキフェル》！効果発動！相手がこのターン発動したカードの種類によって効果を変える！魔法カードだから、相手の魔法、罠を3枚まで破壊出来る！宝玉状態のサファイアと伏せを狙う！」

「破壊される……《トラップ・スタン》だ……」

「悪いな純也。リィナの為だ。バトルフェイズ！」

「……幼女の為ならお前に倒されるのも本望だ……来いよ」

「バフォメットでサファイアにアタック！」

バフォメットＡＴＫ３０００
サファイアＡＴＫ１８００

純也ＬＰ８０００→６８００

「追加攻撃！皇紅連拳！」

純也ＬＰ６８００→３８００

「ルキフェルの攻撃！Ｗｏｒｌｄ　Ｅｎｄ！」

ルキフェルＡＴＫ４０００

純也ＬＰ３８００→０．

今、ここに……

大会の優勝者が決定した――

☆

「……確かに、優勝賞品は受け取った。見事なパーフェクトデュエルだったぞ」

「これでいいんだろ？早く鍵をくれよ」

「そう急くな」

そう言ってディモは大小２つの鍵を投げ渡してきた。

「今更だが、こんなオカルトな鍵の事を信じて戦ってたのか？俺……」

「別の世界から来た貴様が言うな。それは精霊界の伝説の鍵だ。鍵穴の大きさ以外、すべてを無視して開錠する事が出来る。早く戻って試してみろ」

「お、おぉ……」

「それからこれが１００万だ……む？」

ディモから袋を受け取った時、優勝賞品の蒼い水晶玉と、俺のバ

ッグの中から飛び出した、碧、紅の水晶玉が光を放ち、宙へと浮かんだ。

「なんだ?とことんファンタジーなぁ……!?」

そう言ってる間に、コインの時同様、俺の体の中に入り、消えた。

また、痛みはない。

「体ん中にどんだけ異物入ってんだよ……俺……」

「……成程な……ふむ、洸司郎。安心しろ。それらはやがて、貴様の力へと変わる。その宝玉も、貴様にくれてやる……」

と言って、ディモはまたしてもすぐさま居なくなってしまった。

「っと……またかよ。……仕方ねぇな……戻るか」

☆

カチャッ

カタンッと、音を立てて、首輪は重力に従って床に落ちた。

「あ……あ……私、自由になったですか……？」

「良かったわね。リィナちゃん」

「そういう事だ。リィナ。これでお前は自由。お別れだ。お前の好きな様に生きろ」

「……え……？」

リィナの表情が曇る。

「お別れ……ですか？連れて行ってくれないんですか！？」

「……リィナ。お前はもう俺の所有物じゃない。お前は人権を取り戻した。だからこれからはお前が生きたい様に生きろ」

「コーシロー……」

「だ……だったら！私、洸司郎さんに着いて行くです！恩返しさせてください！それに、私、姉を探さないといけないんです！……独りじゃ……心細いですよ……」

「リィナ……」

涙目になりながらもリィナは必死に訴える。
ただ、その一心で。

「洸司郎さんと……一緒に居たいです！」

俺はリィナの頭を撫でた。

「ふぇ？」

「仕方ねぇな……そこまで言われちゃ、断れねぇだろ？」

「え？って事は……」

「途中で挫けるなよ？」

「こ、こ、こ……洸司郎さぁん！」

「わ！？ちょ……抱き付くな！」

☆

「お姉さんってのは何処にいるか解るのか？」

「はいです。姉も……その、奴隷として買われたので……確か、サーヴァイルって言う国です」

「サーヴァイル……？」

美佳は表情を曇らせた。

「美佳？どーした？」

「サーヴァイルって言ったら政府にすら容認……いえ、黙認されている、闇市場の奴隷商人が居る……通称“奴隷国”」

「……そーいや、サーヴァイルって貿易が盛んな国の一つだっけな。じゃあ、昨日、一昨日に見た取引が、実は結構多い訳か……」

「そうね……」

……この世界には、まだ沢山……地球と同じように……いや、比べるのは良くないな。

それぐらい、不幸な人がいるんだな……

「美佳。俺がやる事、わかったぜ……」

「……何？」

「……俺な……実は夢があんだ。一人前の料理人になって、デカい店構えるつもりなんだ。今はまだ、修行中の身だけどな。……だけどその前に……この世界から、奴隷制度を、撤廃する！少なくとも、奴隷として生きている人を一人でも多く救う……捜しながらになるけど、まず、リィナのお姉さんを。そして、助けた人皆で、店、やろうと思う」

「……でっかい。いい夢ね……私も手伝うわよ。コーシローに付いて行くわ」

「洸司郎さん……美佳さん……うっ……あ、ありがとう……ございますっ」

「あ、コーシローが泣かせた」

「俺の所為かっ!?」

☆

そうして、俺達はこの国を出る事にした。

やっと見つけた目標に向かって。

まだ、ディモの事や、遺跡の壁画に書かれた伝承の事。

俺は、まだまだやる事があるけど、これは、一つの大きな一歩を踏み出した。

☆

「え、コーシロー……本気で歩いて港まで行くの？」

「ここからサーヴァイルに向かうには電車より、船のが安くて速ぇんだろ？だったら、観光も兼ねて、丁度良いじゃねぇか」

「そうなのですよ！美佳さん、頑張って歩くですよ！」

「リィナちゃんは元気ね……」

「おいおい……んな年寄りみてぇな事言うなよ」

「誰が年寄りよ！」

「あ痛っ」

第一章～第十五話　天使と港の貧乏少女（前書き）

４人目のヒロインです。
メインヒロインは多分これで打ち止め。

ヒロイン達のデッキは魅せ（？）方を考えてます。

正直、小説書く腕落ちたなぁ……と思います。
昔のがよかった↑オイ

至らない点があるのは承知の上ですが、これからも読み続けていただければ、と思います。

感想、レビュー、お願いします（＞＿＜；）

第一章～第十五話　天使と港の貧乏少女

はーいヤッホー。
ボクはナルミ。

読者の皆ー元気ーっ？

ん？ボク？ボクはナルミって言うの。
ボクはと言うとね……

「オイこらナルミ！てめぇ何ボサッとしてんだ！手を動かせ馬鹿！
ユンボで押し潰すぞ！」

ピンチです。てへ☆

「ハイ！すいませんッス！親方！」

「誰が親方だ馬鹿野郎！」

怒られちゃったや～……がっくし……

☆

結局その日で仕事はクビになった。

大体、か弱ーい女の子に土方やらせる方が可笑しい話なんだいぷんぷん。

お金無いから仕方ないんだけど。

「あちゃー……またバイト探さないといけないねぇー……」

ボクはこんな事より、もっと青春を謳歌したい年頃なんだよ！

「あーあ。どっかに王子様かお金、落ちてないかな～」

……落ちてた。

思いっきり怪しい袋が、路上の隅にポツンと。

……ボクは誰にも見られない様にその袋に近付いた。

「……誰も見てない……ゴクリ……か、開封～」

！？

夢じゃないよね？

ざっと十万は軽い。

百万越えてるかな？

……ちょっと気が引けるけど、ありがとう神様！

☆

俺達は一泊してから、港の近くまで来ていた。

「フィジー……フィジー＝オールド・ランナ。愛称はフィー。髪や瞳の色はリィナと同じ」

俺はリィナを見た。

藍色の髪に翡翠のような綺麗な碧眼。

「サーヴァイルね……奴隷国って事以外表面上の評判とかも悪くもないけど、確か、お金や身寄りの無い女の子は商人に片っ端から拐われるとか聞いた事あるわ」

「お金が無い人は自分の娘を売りに出すんですよ……」

「マジかよ。なんだそりゃ……」

「だから奴隷となっている人は思った以上に多……あ、ちょっ、コーシロー！あれ！」

「ん？……！」

美佳に言われて俺が見たのは飲食店の前の大きな看板……

【今だけ！激辛デス・デーモンラーメン特盛を食べ切ったらタダ＋1万リュール！】

「お前は俺に何を望んでんだっ！……ん？」

「どうしたの？」

俺が美佳の方に向き直った時、狭い路地で女の子が絡まれているのを見た。

「……助けるか」

「あ！？ちょっと！……もう。仕方ないわね！」

「あ、置いて行かないでくださいよぉ！」

☆

ボクはついてないみたい。

「さぁ、早くその袋を渡しなさい。……まったく。榊洸司郎とやらを探さないといけないのに……」

なんかぶつくさ言ってるよぉ～……

なんかこの人、変。

気持ち悪いぐらい肌は真っ白で、服やデュエルディスクも。

ボクが困惑している間に、救世主……もとい、王子様が現れた。

「おい、何やってんだ？アンタ？」

☆

「おや、これはこれは。袋どころか、探す手間が省けましたね。金に飢えた奴に渡して探させようと思いましたが」

「あ？何言ってんだ？」

「あなたを探していたんですよ。榊……洸司郎くん？」

こいつ……なんで俺の名前を……

「私は……そう、エンジェルと名乗りましょうか」

「エンジェルだぁ？……何の用だ？」

「率直に。あなたを殺しに」

「洸司郎さん！」

「コーシロー……こいつ、おかしいんじゃない？」

「よくわからねぇけど、わざわざ死んでやれねぇな。こいよ」

俺が構えるとエンジェルとか言う真っ白変人はチッチッチと鳴らし、指を振った。

「私があなたを殺すのは簡単。だけど、直接手を下すのは制約に反するのでね。デュエルしましょうか。敗者に死をもたらす、闇……いいえ、混沌（カオス）デュエルを！」

女の子は不安そうに、少しの期待と何かを込めてこっちを見ている。

美佳とリィナは、俺の服を掴み、しがみついていた。

……成程な。ディモの時と同じか。

ってなると、こいつはディモとは違う、敵対勢力。

ディモと違って、肌も白いし、ディモやその仲間とかは、俺の命を狙う必要は無いからな。

ディモやエンジェルとかはミランの遺跡、ジェリラル鉱山の壁画にあった伝承みたいに、駒を争わせている訳だな。

……ミランの遺跡にあった文字は要約するとこうだ。

ユグルには伝説、伝承がありその一つが、ユグルは一度世界が滅びた。

だがその高度な文化によって、立て直しは数千年弱で済んだと言う。

その数千年前にあった、一部の人間が持っていたと言う力が、アニメとかで言う所の闇のデュエル。

――……て事はユグルはアニメの遊戯王の世界の未来か？――

そしてその力を使用して、幾つかの争いがあった。

２つの勢力が、違う世界から互いに１人ずつ、合計２人の人間を駒として選び、その２人を的にし、その２人とデュエルにて争い、またその２人同士も争わせた。

つまり、俺の他にこの世界に呼び出された人間がもう１人はいるって事になる。

要するにこのエンジェルとか名乗る奴が、俺やディモの敵。

エンジェルとか名乗る辺り、光側か？

俺はダークサイドって訳だ。

だけど別に、世界を壊したり、侵略する訳じゃないよな？

嫌いじゃないぜ。こう言うのは。

俺はエンジェルに向き直った。

「断れば、どうせ人質でも取るんだろ」

「なかなか道理を解ってるじゃないですか。勿論そこの二人もこの女の子も、断れば殺します」

「吐かせ。俺はそう言うのは好きじゃないんでな、デュエル、受けてやるよ」

「話が早くて助かりますよ。さぁ人通りの少ない所へ行きましょうか」

「あの……」

女の子がこっちを見て不安そうにしているが。

「安心しろ。すぐ助ける」

「コーシロー……」
「洸司郎さん……」

同様に二人も、不安そうにしている。
少女は二人がすぐエンジェルから引き離した。

「大丈夫だって。また1キルしてやるよ」

☆

――漁港、繁華街路地裏――

「「デュエル！」」

ターンランプはエンジェルの方が光った。

「ふふ……ドロー、では、手札から《ヴァイロン・キューブ》を召喚し、ＬＰ１０００を払い、魔法カード《簡易融合》を発動。《音楽家の帝王》をエクストラデッキから融合召喚として特殊召喚」

エンジェルＬＰ８０００→７０００

ヴァイロン？あまり詳しくはない。

だが、嫌な予感がする……

「キューブに装備魔法（ヴァイロン・マテリアル）を装備。そのまま、音楽家の帝王にキューブをチューニング。《ヴァイロン・エプシロン》をシンクロ召喚し、光属性のシンクロに成功した為、キューブの効果でデッキから装備魔法を手札に、《静寂のロッド・ケースト》を加え、同じくルールにより破壊されたマテリアルの効果で《ヴァイロン・エレメント》を手札に加えそのまま発動」

ケースト？ありゃ確か最初の方からあった奴だな……

「では、エプシロンにロッドケーストを装備し、手札から二枚目のマテリアルをエプシロンに装備。ケーストの効果で、ケースト以外のエプシロンを対象にする魔法カードの効果を無効にし、破壊。エレメントの効果でヴァイロンの装備カードが破壊されたらデッキからヴァイロンのチューナーを特殊召喚出来る。とマテリアルの効果でヴァイロンの魔法をサーチする。《ヴァイロン・フィラメント》を手札に加え、デッキから《ヴァイロン・スフィア》を特殊召喚し、フィラメントをエプシロンに装備し、破壊され、再びフィラメントをサーチし、スフィアをもう一体特殊召喚。さぁて、行きますよ？《ヴァイロン・スフィア》2体と《ヴァイロン・エプシロン》をチューニング。……ふふ、あなたに越えられますか？シンクロ召喚！《ヴァイロン・オメガ》！」

「……なっ！？」

積層された装甲。
他者を寄せ付けない巨躯。
追随を許さない無敵の力。

「さて、墓地のスフィア2体の効果でそれぞれＬＰ５００を払いオメガにスフィアを2体装備」

エンジェルＬＰ７０００→６０００

「装備されたスフィアの効果。このカードを墓地へ送り、自分の墓地の装備魔法をこのカードを装備していたモンスターに装備する。スフィア2体を墓地のマテリアルとフィラメントに入れ替える！更に、オメガの効果で墓地のヴァイロンを1体、このモンスターに装備する。スフィアを装備……ここまでにしてあげましょう。ターンエンドです」

オメガは自身に装備されたカードを1枚、墓地に送る事で効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する。

……つまり、モンスター主体の俺の天敵……

一瞬で凍り付いた。

その力に俺は戦慄きが止まらなくなった。

……今までの自信と、誇りを一気に打ち崩された気がした。

俺の力（デッキ）じゃ……

「……勝て、ない……？」

「クク……わかりましたか？これであなたの運『命』は決まりましたね……」

「……こ、洸司郎さん……そんな……」

「嘘でしょ？……コーシローが……」

「……ボクの所為だ」

少女の声が聞こえた。

「ボクの所為で、こんなデュエル……」

「……そんな事……」

「そうよ！あなたも被害者だし……それに……コーシローなら……勝ってくれるわ」

「っ！」

美佳……

「そ、そうです！洸司郎さんなら、勝ちますですよ！」

リィナ……

「だから、信じるですよ！」

「そうよ！あなたも信じて！コーシローを！」

「こ、洸司郎……さん……」

少女が、俺を見た。

不安と期待が入り混ざっている。

そんな目で。

「ははっ……サンキューな。美佳。リィナ。……お陰で、目が覚めたぜ。……なぁ、お前名前は？」

「……へ？ボ、ボク……高坂（たかさか）……成実（ナルミ）」

「……オッケー。見てろよナルミ、美佳、リィナ……」

今すぐ、天使気取りのこのムカつくクソ野郎を……

「ふ……無駄ですよ。あなたのデッキはすぐに調べましたからね。あなたに攻略の手段はほぼ、ありませんよ」

「ぶっ潰すから……」

テメェは黙ってやがれ！

「俺のターン！」

第一章～第十五話　天使と港の貧乏少女（後書き）

オメガ戦です。

オメガ出し難いけど、私は好きですよ（＾＾）

洸司郎がピンチ→ヒロインが……

……あ、いや、やっぱオメガは無理。

第一章～第十六話　勝利の秘訣

「ドロー！俺はモンスターとリバースカードを1枚ずつセット。ターンエンド」

「おや、さっきの威勢はどうしたんですか？」

「そんな挑発にゃ乗らねえよ。かかって来い」

「ふぅむ……では、私のターン。ドロー。……おや、引きが少々ツイてないですね……通常召喚（ヴァイロン・プリズム）。では先刻オメガに装備していたスフィアを墓地へ送り、《ヴァイロン・マテリアル》をオメガに装備、オメガの効果でもう一度スフィアを装備し、スフィアの効果で墓地の《ヴァイロン・フィラメント》をオメガに装備し……バトルフェイズ、プリズムでアタックします！」

「モンスターは《信者・レイズ》」

プリズムが光を集め増幅し、悪を祓う光線となり、拡散され照射し、レイズは貫かれる。

レイズＤＥＦ１２００
プリズムＡＴＫ１５００

「破壊されたレイズの効果！デッキの信者を除外し同名カードをデッキから特殊召喚する！」

「オメガの効果で無効にしましょうか。フィラメントを墓地へ送り無効にします」

「チェーン発動！《黒の教え》。レイズと手札のカルベラを除外し2枚ドロー！」

「……ではフィラメントの効果でコンポーネントを手札に加え……」

息を飲む。

「それでは、《ヴァイロン・オメガ》でダイレクトアタックです！」

終わりを告げる機関の天使が――

「オプティックスターゲイザー！」

――……迫る。

オメガの巨躯から、光が溢れだし……全てを包み、視界は白で支配された。

オメガＡＴＫ３２００＋（６００×２）→ＡＴＫ４４００

「ぅ……ぐ……グガあぁアあアアあああァあァアアあああぁアああァあア！！」

「コーシロぉー！！」
「洸司郎さぁぁぁん！」
「う……嘘だよ……ね？」

痛い、痛い痛い痛い

洸司郎ＬＰ８０００→３６００

「おやぁ？おかしいですねぇ？強化されたオメガの力なら皮膚は灼け落ち、爛れ、身体の一部は灰塵になってもおかしくはない筈ですが……どうやらデュエルの続行は不可能の様ですね。少しだけ待ちましょう。ターンランプがターン移行を示すまでね……ターンエンド」

「……」

俺にドローする力は……残って、無い。

体中が悲鳴を上げている。
まさかこんな簡単に、こんな早くにゲームオーバーが来るなんて、思っていなかった。

三人が俺の名前を呼んでいる。
その目には涙。
泣いて……る……

ダメ、だろ。
女の子を泣かせちゃよ。

……俺はヤらなきゃならネェ事が、山ほどあんだから……

「……くっ」

「……見上げた根性ですね。まだ意識があるんですか」

残念な事に意識が『ある』だけだ。

……立ち上がれよ。

ナにしてんだ俺。

早く立ち上がって……あの野郎をぶっ潰すんだろ？

「……に、奴を……オス……からガ欲しィ……」

「ん？」

「テメェを……倒す、力が欲しい……っ！」

どくん。

と、大きく俺の中で鼓動が響く。

体に暖かい何かが、沸き上がる感覚。

……力が欲しい。

それが俺の欲望だ。

……俺に、大切なモノを守る力を……っ！──

「コーシロー！」

「ほぅ……」

俺はゆっくりと、ゆっくりと立ち上がり、エンジェルを見据えた。

「待たせたな……今すぐ叩き潰すから覚悟しろよ……」

「ふん。あなたの力の程度では、逆転は期待出来ませんが？」

「言ってろよ。俺は……勝つ」

俺は大きく息を吸って、しっかり地面を踏む。

「俺のターン！ドロー！……俺は手札から、信者チューナー、ジュンターをコストとして除外し、魔法カード《黒兎鳥》を発動！デッキから信者のチューナーを特殊召喚する！《信者・ジャメラ》を特殊召喚し、ジュンターの効果でデッキか手札から《信者・強力のレイジ》又は、《信者・知能のアスレイ》のどちらか一体を特殊召喚出来る！」

「……無効にしておきます。フィラメントを墓地に送り無効。フィラメントの効果で《ヴァイロン・マター》を手札に加えます」

「そうかよ。俺は手札から《信者・強力のレイジ》を通常召喚！行くぜ？レベル４レイジにレベル４ジャメラをチューニング！地を砕き、敵を逃がすな。同等の力を持って驕り高ぶる物を平伏させん！シンクロ召喚！制圧せよ！《囁く者・アガレス》！」

老いて尚、力は健在。

具合の悪そうな顔をして、まだ若人には遅れを取らない。

「シンクロ召喚成功時の相手の除外カードをデッキに戻す効果は相手に除外されたカードが無いと発動しない。さて、オメガ攻略のカードはこれだ！」

俺は一枚の魔法カードをデュエルディスクに挿入した。

「装備魔法、《霊剣ノートゥング》をアガレスに装備！」

「装備魔法……ですか？データにはありませんが……」

「ノートゥングは装備しているモンスターが戦闘を行う場合自分へのダメージを０にする効果。それと除外されているモンスター１体を選択し、そのモンスターのレベル分装備モンスターのレベルを上げる、又は下げる事が出来る。……それから、相手の永続魔法、永続罠の効果を無効化する！」

「な、なんですと！？」

「他は墓地に行った時の効果だ。さ、俺は除外されたジュンターを指定する！」

ジュンターＬｖ２

アガレスＬｖ８↓Ｌｖ１０

アガレスが紫に妖しく光る両刃の剣を握る。

「バトルフェイズだ！アガレスで、オメガにアタック！」

「ア、アガレスではオメガに勝てませんよ？」

アガレスＡＴＫ２９５０
オメガＡＴＫ４４００

「アガレスの効果は、同じレベルのモンスターとの戦闘では破壊されず、同じレベルのモンスターの効果も受けない。それと……」

アガレスがノートゥングでオメガを斬り、オメガはそれを弾く。
ノートゥングの効果で俺にダメージは無い。
そしてアガレスは、ニヤリと笑った。

「このカードと同じレベルの相手モンスターを全て、ダメージステップ終了後に破壊する」

「な！？」

オメガの力で無効化しても、同等の力を得たアガレスは更にそれを無効化し――

機械仕掛けの天使は地に墜ち、崩れて行く――

オメガは……壊れた。

「メイン2、カードを2枚伏せてエンド」

「わわ、私の……ターン……」

冷静さを失ったな。ヴァイロン・マテリアルのサーチ効果を使っていない。

……行けるか？

「……《ヴァイロン・マター》発動します……墓地のマテリアル2枚とロッドケーストをデッキに戻し、アガレスを破壊します！」

「チェーン発動、通常罠《ニーベルングの指輪》。囁く者が魔法、罠の対象になった時、対象になった囁く者を選択し発動可能。このターン、選択された囁く者は相手の魔法、罠の効果を受けない。このターンのエンド時、相手がこのターン発動した魔法罠の枚数分ドローする」

「バカ……な……私が……」

「……戦意喪失……か。悪いが、終わらせる。エンド時1枚ドローし、俺のターン！ドロー！」

手札は2枚。伏せが1枚。

相手は攻撃表示のままのプリズムと無力化されたエレメント。
戦意喪失によるプレイミス……か。
手札は5枚……余裕だ。

《ダーク・ダイブ・ボンバー》より遥かに鬼畜な火力が囁く者と信者の力だ。それを見せてやる！

「通常召喚！《信者・ベッカ》……と、リバースカードオープン！永続罠《暗黒のイニシアチブ》。除外から囁く者又は信者を1体特殊召喚する。そのモンスターはお互いの魔法の効果を受けない。特殊召喚！《信者・レイズ》」

勿論、イニシアチブがフィールドから離れたら帰還したモンスターは除外され、帰還したモンスターが破壊されたらイニシアチブも破壊される。

「レベル3レイズにレベル3ベッカをチューニング！レベルは6！シンクロ召喚！《囁く者・セーレ》」

美男子が跨る天馬が猛る。

「……終わりか？バトルフェイズ！セーレでプリズムにアタック！」

「！……くっ」

セーレＡＴＫ２６００
プリズムＡＴＫ１５００

天馬の蹄がプリズムを粉砕し、その破片が飛び散り、エンジェルに当たる。

エンジェルＬＰ６０００→４９００

「墓地のベッカを除外して追撃だ！」

「ぐぅあっ……！」

エンジェルＬＰ４９００→２３００

「っ！？しまった私とした事が……」

「へっ……もう遅ぇ！アガレスでダイレクトアタックだ！ナイトメアセイバー！」

ノートゥングに光が集まり、閃光が鎌鼬となってエンジェルを切り裂いた。

「がっ……」

エンジェルＬＰ２３００→０．

「やったわ！」
「やりましたです！」

「ほわぁ……」

成実が歓喜と、尊敬、そしてある熱意の籠った視線を洸司郎に向けながら、笑った。

「……？」

俺は皆の方を見て、それぞれ自分の事の様に騒ぎ、喜んでいるのを見た。

「……へへっ」

サムズアップ。

美佳も満面の笑みを浮かべつつ、同じ様に返してくれた。

「……くっ……刺客は、まだ……すぐにあなたを襲いますよ」

はっとしてエンジェルを見た。

アガレスの攻撃のダメージで藻掻き苦しんでいる。

そしてすぐ体中にひび割れの様な線が走り……

「！」

「……あ、なたもすぐ死……に……がぁあああああっ！！」

黒く塗り潰されて行き、割れて粉の様に消えてしまった。

「……これが、混沌デュエル……か……うっ」

「あ、ちょっと！コーシロー！しっかり！」

俺の体にもダメージは残っていた。俺も耐えられず膝を着いてしまう。

それを美佳が駆け寄り、支えてくれた。

リィナと成実も心配して駆け寄ってくれた。

「はは……悪ぃな。情けねぇ……」

「えと、その……ボクの所為で……」

成実が暗い顔して俯き、声も小さくなって行き、自分を責めている。

俺は空いている手で、成実の頭を撫でた。

「ふぇっ!?」

（「「ちょっと羨ましい……（です）」」）

「違うだろ？こう言う時はだな……」

「っふふ。そうね」

「ズバリですよ！」

「「「ありがとう！だろ！（でしょ！）（です！）」」」

見事に意心伝心し、同じタイミングで口にした俺と美佳とリィナ

だが、語尾がそれぞれまばらで、それがおかしくて3人とも笑った。

成実は少しきょとんと驚いた顔をしていたが、ニコッと笑い……

「ありがと！洸司郎！」

抱き着いた。

「ぐっ！？ま、ちょっ、まだ痛ぇ！」

「ああ！ちょっと！」

「ずるいのですよ！」

☆

――宿屋――

「え？旅に？」

「連れて行って欲しい……ですか」

「駄目……なのかなって……ボクも、着いて行きたくてさ……どう、かな？」

私とリィナちゃんは顔を合わせて意思疎通してみた。

「……私達は構わないわ」

「歓迎するですよ！でも……」

「コーシローがＯＫをだしたらだけど、ね」

「……」

私達は一同にベッドで眠るコーシローを見る。

……寝てる時でも格好いいなぁ……とか思ったり。

「多分良いって言うと思うけどね」

「……うん。わかった……今日は、ありがと」

「気にする事は無いのですよ！無事でよかったです」

「そうね。じゃ私達も寝ましょ？」

コーシローをゆっくり休ませてあげなきゃ、ね。

私達は……眠りについた。

第一章～第十六話　勝利の秘訣（後書き）

お陰様でＰＶが増えてきましたので、その内おまけか番外編みたいな何かをやろうと思います。

第一章～第十七話　喧騒。好敵手（前書き）

パソコンで見ている方はルビ振りの関係上非常に見辛いかと思われますが、ご了解の方をよろしくお願い致します。

第一章～第十七話　喧騒。好敵手

「旅に連れて行って欲しい……？」

「う、うん……」

何故か、成実が俺達の旅に着いて行くと言う。

此処は宿屋の一室。今は美佳とリィナはいない。

「……理由は？」

「その……ボク……親に捨てられて……身寄りがいないんだ……」

「っ！？」

親に……捨てられた？

それじゃあ……――

『……なぁ？何やってんだ？そんな所で……』

『……お母さんとお父さんがね、いらないって。置いて行かれたんだ……』

『……は？』

――……あの時と、同じ？

「……好きにしろ」

「！ありがとう洸司郎！流石僕の王子様！」

「抱きつくなって……王子様ぁ？」

俺に抱きついたまま、成実はうんと頷いた。

「洸司郎はボクを救ってくれた王子様だよ……もう、一目見た時から惚れちゃったんだ……」

買い被り過ぎだ。

と言おうとも思ったが、疲れていた俺は考える事を放棄したかったから成実の頭を無言で撫でてやり、美佳とリィナを探す様に言付けると成実は部屋を出て行った。

……デッキでも調整するか。

これからはきっと命や、何かを賭けるデュエルをする事が多くなる。

その戦いに勝つ為に……

☆

「ダメよコーシロー！まだ安静にしてないと」

「そうですよ！また倒れたら元も子もないですよ！」

「そうは言っても、あまりゆっくりしてても意味ねぇだろ？この一分一秒にどれだけの人が……」

「それは仕方ない事じゃない。救える分だけ救えれば……」

「だったら他は諦めろって言うのか！？」

「そ、そんな事っ！」

「確かに、限界があるのは解ってるさ……でもな！俺はそれでもこの手で、この体で、助ける事が出来る人を……助けを待っている人を、助けるチャンスを逃したくない」

あの日、お前に救ってもらった様に――

今回、リィナやナルミを助けた様に――

「偽善でもいい。苦しむ人を……悲しみの涙を見たくない。俺はこ

の命一つを失っても、その分一つの命を助けたいんだよ！」
「洸司郎さん！！」

っ！？

リィナの声ではっとなり少し驚いたが、熱くなっていた所が、落ち着いた。

「いゃ……怒らないで……こぉしろぉ……」

「あ……」

震えている。
美佳が、小さく怯えている。

俺は何やってんだ……？
この手で守る人を……どうして傷付けているんだ……？

「私達は……例え、親や友達を含めた百万人の命と洸司郎さんの命を天秤にかけられても……迷わず洸司郎の命を取るです！」

「な……」

「だから……そんな事、言わないでください……」

目に涙を残しながら横目で俺を見る美佳と、悲しい表情のまま、俺を見つめるリィナと成実。

「……ごめん。美佳……リィナ、成実……ごめん……」

俺が……間違っていたんだろうか……？

ベッドに腰掛け、頭を抱える。

正直、わからない。

☆

その後、俺は三人にごめんなさいをして、許してもらえた。

時刻は夕日が港の街を染める頃。

それは俺が宿の部屋の窓を閉めようとした時の事だった。

借りた部屋は二階だったのだが窓の外、すぐ下でなにやら言い争いをしている男女がいた。

立ち入った話を聞いてしまうのも悪いので窓を閉めようとしたが……

「はっ……ギルドがなんだ!?ヤっちまえばこっちのもんだろ?」

「やれるもんならやってみなさいよ」

……不穏な感じしかしなかった。

☆

三人も付いて来て、俺達は言い争いをしている二人の所に来た。

女性の方は俺達に気付き、声をあげた。

「あ……コウ！」

「あ！？な、棗！」

ミランの時に出会った女性。
金髪の似合う、強気な赤の瞳。
叶棗（かのうナツメ）。

「コーシロー？知り合いなの？」

「ああ。ミランでな……」

「また女の人……」

美佳が小声で呟いたが、聞こえなかった。

「あぁん？んだ？このガキ……こんなガキが連れなのか？」

「ちょっと、あんた。コーシローの事知らない癖に『こんな』ってなによ！？」

「んだぁ？煩くなってきたな……所詮ガキはガキだろ。デュエルするか？格の違いを教えてやるぜ？」

「そんな事言っていいですか？洸司郎さんは先日の大会で優勝してるですよ！」

美佳とリィナが自分の事の様に自慢する。

「……は？ど、どうせ嘘だろ？」

対する男はたじろいでいた。
バカでよかった。

「まぁ……本当なんだ。そんで？デュエルすんのか？」

さりげなく、挑発。

「……へっ……こ、後悔させてやるぞてめぇら！俺が勝ったら纏めて俺のペットにしてやるよ！」

「……お前こそ後悔すんなよ……」

……因みに……多人数の人間がいる時によくそんなセリフが言え

ると、四人はドン引きしていた。

☆

「畜生がー！覚えてろーっ！」

逃げた。男は呆気なく負けて、逃げた。

「流石コウ！また助けて貰ったわね。あ・り・が・と」

語尾にハートマークを付けながら、横から棗が俺を抱き締めた。
当たってますよ。胸が。

「ぁ……ちょ、ちょっと！コーシローから離れなさいよ！」

「そうです！抱き付いていいのは私だけなのですよ！」

「違うよ！ボクだけだよ！」

あーあーあー……

なんと言うか……

……嫌な予感がするんだが。

「……あなた達にとって、コウは何？」

唐突な質問。美佳は少し挙動不審に、リィナと成実は自慢気に。

「え、えと、その……大事な（好きな）……人……かな……」

「「未来の夫だよ！（です！）」」

「「え？」」

そこまで言われると思ってなかった俺と美佳が同時に驚きの疑問符を浮かべた。

そして、ふっと棗が笑い。

「じゃあわたし達はライバルって事かしら」

「そうだねぇ……」

熱い熱い。火花が飛んでるぞバチバチと。

だが、次に優しく笑い、握手を求めて手を出した。

「でも、今は、これからも、友達かもしれないわね」

「……そうね。そうだといいわ」

美佳が握手に応じて手を出し、固く握手が交わされた。

一件落着って事でいいのだろうか。

……俺も、彼女達の想いに向き合わなくちゃいけない日が来るから……その前に。

その光景を影から覗く、一人の人物がいた。

「榊洸司郎か……」

第一章～第十七話　喧騒。好敵手（後書き）

今回は短めです。

と言っても、当初の文字数はこれくらいのつもりでしたが。

更新速度維持＋上昇の為頑張りますのでご容赦くださいませ。

第一章～第十八話　死中に活！

チュンチュン。

宿の一室に心地よい日差しが差し込む。

そんな中一人の少年……榊洸司郎は呟いた。

彼はベッドの上で寝ていただけであり、何も変わった事はしていなかったのだが……。

「……なんでこーなってんだ……？」

棗が、リィナが、成実が、美佳を除いた三人が、狭いベッドの中洸司郎に引っ付いて離れないまま、寝ているのだ。

☆

起きたら部屋にはリィナちゃんや成実や棗は居なかった。

私は置いてけぼりをくらったみたいで少し淋しい想いをしたけど、すぐ身形を整えて私はコーシローの部屋へと向かった。

コーシローを起こす為。

……もしかしたら嬉しいハプニングとか起きたりして!?とか考えながらもコーシローの部屋の前で深呼吸。

「コーシロー?起きてる?入るわよ?」

ノックして、声を掛ける。

「み、美佳!?ちょ、ま、待ってくれ!あー……き、着替え中だ!」

吃ったからだろうか。怪しいと感じた私は部屋に突入した。

☆

誤魔化した俺が悪いのだが、着替え中と言ったのに迷わず美佳が

突入してきた。
なんでやねん。

「ちょっ……フツー入るかよ……」

「……こ、これは……どういう事かしら……？コーシロー？説明してもらおうかしら？」

美佳が恐ろしく怖い。
誰か俺を助けてくれ。

俺はリィナ達三人に捕まって……否、掴まれて動けないでいる。

何故こうなっているのかまったくわからない。

その旨を美佳に伝えたのだが……

「ふ、ふふ……油断も隙もないわね……って」

「え？お、おい、美佳？」

「私だってコーシローと寝るんだからっ！」

俺は美佳による猛突進を直撃しデッキ（夢）の中に戻され……そうになったが、耐えた。

今では美佳を含めた四人が俺の周りで寝ている。

なにやってんだか。俺らしく無いな。
俺は表舞台に立つ様な人間じゃない。
俺が何処で何して、活躍しようが、何事も成功すりゃそれで問題ない。
出しゃばる必要はない。
俺は晃の後ろで、晃の横で、晃を支えてやればいい。

俺は、傍観者。

今までも、告白は有魅以外断って来た。

今まで、告白は結構された。それこそリア充爆発しろってレベル。

……俺も、変わる時が来たんかな。

俺が、この世界に連れて来られた理由。

まだわからないけど、いい加減……見てるだけ……都合良く手を加えるのはやめるとするか。

俺は操る側に居るつもりで、多分、気付かない内に操られている。

デビルやエンジェルが何を考えいるかはわからないが、俺は、お前達の思い通りにはならない。

絶対に。

「ほら、お前ら！いい加減起きろ！」

☆

「……大会優勝者は今まで不参加だった、突如として現れた期待の新星。榊洸司郎……か……」

コロッセウムの会場の中、過去の大会の詳細を調べる一人の人物。
赤いショートヘアにこれまた燃える様な赤い瞳。

好奇心と探究心を擽られた顔をして、一つ、決意した。

「……未知のカードを使い、快進撃……っ！」

赤と黒のローブを直し、フードを被る。
そして、ニヤリと笑い。

「……ちょっと、面白そうだな……」

その場を後にした。

☆

「よし、皆、忘れ物はないな？」

「大丈夫だよ！」
「問題無いわ」

棗と成実が答える。
棗は皆とも溶け込み、俺は……あの後少し言い争いになってしまったが、まぁ、丸く収まった。

今は港の前、皆して色の違うローブを羽織り、船着き場で船を待っている。

今気付いたが、何だか漁師達や、係の人達は少し焦っている気がする。
否、焦っている。
何やら落ち着かない態度で皆が話し合っている。

少し話を訊いてみよう。

「すいません。何か焦ってる様ですけど、何かあったんですか？」

中年越えくらいのおじさん2人が不意に話し掛けられ、少し慌てたが事情を話してくれた。

「あぁ……旅人さんか。残念だが、今日は海に出るのはやめた方がいいぜ」

「おうよ。多分、今日は『海の悪魔』が出るからな」

「「……海の悪魔？」」

リィナと成実が首を傾げる。

「そうだ。一ヶ月に一度……偶に幾度か、月の下旬辺りによく船が行方不明……難破すんだ」

「それが海の悪魔だとか言う、そいつの仕業だと言われてるんだ。実際に姿を見た奴は殆ど溺れ死ぬから、事実かどうかはわからねぇが、灯台の番や監視船が見たって話だ。発見報告の通信途中に沈められた事もあるらしいぜ」

「それでも貿易を止める訳にゃいかねぇからな。でも、この時期はあまり沢山船はださねぇんだ。政府にも認められてる」

「へぇ～……そうだったのか……ありがとう。おじさん！」

「おー！気ぃつけろよ若いの！」

おじさん達は手を振って見送ってくれた。
優しい人達だ。

俺は正直な所、怖い訳では無いが……万が一本当に船を沈没させるような悪魔に遭遇する事を考えると、危険だ。やめた方がいい。
カードの精霊……みたいなものかもしれないからな。

「ふぅん……ちょっと怖いわね」

「あら、この程度の事に怯えて、大丈夫かしら？」

不安がる美佳に、棗が挑発。

「洸司郎さんがいるから大丈夫なのですよ！」

おいおい……俺かよ！？

リィナは完全に俺を頼り、成実はと言うと。

「そうだよ！怖がりだなぁ……それに、洸司郎もいるし心配無いって！」

お前もか！

「……上等よ。ホントに出ても知らないからね！？」

美佳ぁー！挑発に乗るなーっ！

「行くわよコーシロー！」

「おまっ……引っ張るな！俺はまだ意見を……っ」

美佳に引っ張られ、強制連行。

俺の意見なんてなかった。

☆

船でサーヴァイルへと向かう俺達。

道のりは長く、既に夜。

俺は甲板で珈琲を片手に、流れる星空と、波の音をたてる海を見ていた。

「……日本にいた時は、こんな経験はちっともなかったな……」

俺は柄にも無く感傷に浸っていた。

忙しさと、流れでここまで来てしまったが、俺は元の世界には帰れるのだろうか。

この世界で一人前の料理人になるのも悪くはない。

だが地球に残して来てしまった人達がいる。親父やアズキ、学校の友達や、遊戯王で知り合った人達、それに……

「……晃……有魅……」

「……その、『あきら』と『ゆうみ』って人は誰なの？」

「あ……美佳……」

後ろから声が掛かる。美佳だ。リィナ達も後ろに見える。

「……晃は、俺の恩人でもあり、唯一無二の親友で、最大のライバル。全てに於いてあいつは俺なんかより優しいし、頭も良い。

それに強いな。デュエルも、多分あいつのが強ぇんじゃねぇかな…？俺が勝てるのは腕っ節くらいだぜ？」

四人は騒いだ。洸司郎本人の口からでる親友。と言う事への若干の嫉妬。そして洸司郎にこうまで言わせる評価とデュエルの強さについてだ。

「洸司郎の親友かぁ……親友……いいなぁ……」

「コウより強い……っ！？」

「あぁ……それからな……」

ズゴンッ！

「キャアアアアァ！！」

と、俺の言葉は凄まじい衝撃の音と悲鳴に掻き消された。

「きゃっ！？え……え、なに？」

慌てる美佳。全員も慌てているが、とりあえず手摺りにしがみつく。

まさかこれが……っ

「出たぞーっ！海の悪魔だーっ！」

「お、おしまいだぁーっ！」

……海の……悪魔……っ！

再び、衝撃。

「きゃっ！？」

「美佳！？」

その衝撃で美佳が手摺りから離れてしまい、斜めになった甲板を滑り、海へと投げ出されそうになる……のを俺は手を伸ばし、ギリギリで掴んだ。

「こ、こぉしろ……」

「美佳！耐えろ！ぜってぇ離すな！」

「う、うん……ひゃあっ！」

三度、衝撃。

他の皆は何とか無事らしく、三人で器用に手を繋ぎ、手摺りにしがみついている。

俺と美佳は結構限界に近い。

「諦めるなよ。美佳。絶対ぇ……俺が守っから……くっ……なっ！？」

海の悪魔の正体が見えた。

いつしか、船には軟体動物の巨大な触手が絡み付いている。太さの直径は１ｍ強。

白い、吸盤の付いた足。

槍のような三角の頭、つまるところ、イカって奴だ。

その巨大イカは俺と美佳に気付き、その巨大な足を美佳に近付ける。

俺は一気に青冷めた。

「……っ！」

美佳を一気に引き上げ、美佳に覆い被さり、器用に手摺りに足を掛けて落ちないようにした。

「え？……コーシロー！」

そしてその白い足は遠慮無く俺を捕まえ、巨大イカは自分の方に引き寄せた。

……くっそ、どうも終わたくせぇ……

冷や汗。俺は一応落ちないよう触手に掴まりながら巨大イカを睨み付けた。

「嘘っ……こぉしろお！！」

俺が捕まった事に気付いたリィナ達は声を荒げて俺を呼ぶ。

「洸司郎さん！」
「っ！？コウ！」
「洸司郎！」

死んだか……。

何故かそこだけ冷静だった俺は心を落ち着かせようとするが、この状況で落ち着く訳がない。

どうしたらいい……？

やっぱり俺は、あまりにも無力だ。

誰もが諦めた時、奇跡は起きた。

『貴様、デュエルは出来るな？』

声？

その重厚な声の主は、目の前のイカ以外にはいない。
船上は悲鳴だけ。

どうやら美佳達はイカ？の声が聞こえているみたいだ。四人も驚いている。

とりあえず、会話。
チャンスかも知れない。

「……俺か？出来る……」

『よろしい。ならばデュエルだ。貴様が勝てば、全員見逃そう。だが貴様が負ければ沈める。この四人は、人質だ』

「きゃっ……」
「ゃ……！」

早かった。一瞬で美佳達四人は触手に捕まってしまった。

「……解った……まずは船を戻してくれ。この状態じゃ落ち着かないしな」

『よかろう』

持ち上がっていた船は海の上に戻され、俺も甲板に戻される。

チャンスなんだ。落ち着け。

人質には取られたが、あのままじゃ皆死んでた。

……ここは絶対勝たせてもらう。

俺は再び、念じると腕にデュエルディスクが現れ、展開される。

理屈はわからないけど、俺が呼べばディスクが現れる。

もう慣れた。

「なぁあんた……一つ訊くが、イカなのか？」

『イカじゃ。悪いか』

不覚にも少し笑ってしまったが、どうしても俺はデュエルが好きらしい。

こんな時でも俺は震えて……否、奮えていた。

「覚悟しろよ。俺に喧嘩売った事を後悔させてやるよ！」

『強気な小僧だ。よかろう』

「デュエルだ！」

『デュエルじゃ！』

俺は希望を掴んだ。

絶対に離さない。

もう俺は勝ったも同然だ。覚悟しろよイカ野郎！

第一章～第十八話　死中に活！（後書き）

今回は急展開？
もうすぐで一章が終わります。
今までは（勿論これからも）土曜日１４時（午後２時）に更新していましたが

これからは偶に水曜日の１４時にも更新出来たらなと思います。

書き溜めれば楽なのにっ

感想等、よろしくお願いしますね＾＾

第一章～第十九話　想いの奇跡。俺を信じろ……

――貨物旅客船・船上――

俺は四人と乗員、乗客が見守る中ドローした。

イカは足2本が少しだけ乗り上げ、ソリッドビジョンによるフィールドの展開をしている。

「俺はモンスターとリバースカードを1枚ずつ伏せて、エンドだ！」

「ふむ、わしのターン。ドロー」

イカの前にシールドの様に立ち塞がる裏側の手札のソリッドビジョンが、5枚から6枚になった。

「手札から《サイクロン》じゃ。そのリバースカードを破壊する」

「くっ……《黒の教え》が……」

「では、通常召喚……《深海のディーヴァ》、効果で《リチュア・ディバイナー》をデッキから特殊召喚じゃ」

ディーヴァ……奈落の谷より深い海から、彼女の歌声が響き、歌姫の敵を滅ぼす為に、仲間が現れる……

「更に手札の《アトランティスの戦士》の効果で、このカードを墓地に送り、《伝説の都　アトランティス》を手札に加える。そしてディバイナーの効果を発動。そうじゃな……《強欲なウツボ》を宣言する……」

アトランティス？ディーヴァとは相性が良くないし、ディバイナー……自分のデッキトップのカードを言い当てたらそれを手札に加える事の出来るカード……キーカードを加えたいんだろう。きっと別の戦術を持っている……

「確認じゃ。デッキトップは《深海のディーヴァ》じゃ……ディバイナーは効果に失敗しても捲ったカードはそのままデッキトップに戻す」

またディーヴァ……っ！

相手の手札の1枚はアトランティス……含め、4枚。
次もディーヴァが出るとなると……ちょっと辛いか……

くそっ……こんな時ばっかり、手札が悪い……

「では、墓地のアトランティスの戦士を除外し、《水の精霊　アク

エリア》を特殊召喚じゃ。ディバイナーとアクエリアにディーヴァをチューニング……」

ディバイナーが3。アクエリアが4。ディーヴァが2……もしかしなくても……

「シンクロ召喚、《氷結界の龍　トリシューラ》！効果で墓地とフィールドを、手札は一番右を除外じゃ！」

出やがった……っ！最凶にして最強。最悪の災厄が。

トリシューラが、咆哮える。その力を示すべく、俺のカードを除外した。

だがまだ……

「フィールドから除外された《信者・ローワン》の効果！このカードが除外された場合、墓地又はデッキから《黒の復活》を手札に加える！」

「む……除外されて効果が使えるカードとは……厄介なデッキじゃの……」

「後攻でいきなりトリシューラを出すデッキで、言われたくねぇな……」

「じゃが……《伝説の都　アトランティス》を発動。バトルフェイ

ズ、トリシューラでアタックじゃ」

三つ首の神槍が効果だけに飽き足らず、プレイヤーの俺さえも侵略し蹂躙する。

トリシューラＡＴＫ２７００→２９００

洸司郎ＬＰ８０００→５１００

「っぐぁあぁぁあ！！」

３つの口から放たれる青い業火が俺を燃やし尽くす。

「洸司郎！」
「またこんなっ……！」

やっぱ、り……混沌デュエルか……
くそ、が……たった一撃で……目眩が、意識が朦朧とする。熱い……オメガの時と同等の威力だ。
俺は両膝と片手を付き、荒く、口で息をする。

乗員や乗客の皆も、俺の様子を見て察したのか悲鳴と、声援による喧騒に包まれた。

イカは静かにターンエンドを宣言し、続けた。

「ふむ、気絶もせんとは、大ダメージに慣れておるだけで無いな…
…非常に強い忍耐力……それに」

「はっ……それ程でも……ただ此処で、倒れてやれねぇ。それだけだ」

「コーシロー……」

「まだだ。まだ終っちゃいねぇ……俺のターン。ドロー！」

手札を見て、考える。

考えるまでもなく、手札が悪すぎる。
しかもデッキ回転の助けになる黒の教えも使えなかった。
罠故に遅く、条件も厳しいが、残念な事に信者と囁く者はこれより優秀なカードも少なく、ユグルではカード自体が無い。

何故かわからないけど、このカード達を集めなくてはならない気がして……このカード達には思い入れがある。

だから、カードを信じる。
俺の命を、運命を握るのは、このカード達だから……

『欲望……お前にピッタリだろう？』

声がした。ような気がした。

『お前が遊戯王を手にした過去を思い出せ。今までのお前を……』

粘着質な、ねっとりとした嫌な声。

そこにズッポリと浸かってしまったら底無し沼の様に、抜け出す事がかなわなくなりそうな。

まるで誘惑する様な。

「うるせぇ……」

「む？」

「コウ？」

「……うるせぇんだよっ！……俺に……」

モンスターとリバースカードを1枚ずつ伏せて、エンド。

指図するな。

「エンド」

イカの外見をした異形のソレは、やはり人間では無い。と、呟いた。

「わしのターン。ドロー……悪く思うな、小僧。わしの手札が……」

良すぎた。

「トリシューラを生け贄に、《海竜(リバイアドラゴン)―ダイダロス》をアドバンス召喚」

悲鳴。
俺以外の全員による物だ。

青い巨大な竜が、大きく咆哮する。
船が、揺れる。

「ダイダロスをリリース。《海竜神―ネオダイダロス》特殊召喚じゃ」

ダイダロスの体が大きく成長し、頭部の口が分かれ、更に大きく咆哮した。

「ネオダイダロス……っ!?」

「効果発動じゃ。海を……海として扱うアトランティスを墓地へ送り、このカード以外のフィールド上のカードと、お互いの手札を墓地へ送る」

「あっ」

俺の手札とフィールドは、ソリッドビジョンによる海の氾濫に浸食され、墓地に送られた。

つまり、手札もフィールドも無い。がら空き。

「覚悟はいいな……バトルフェイズ、ネオダイダロスでダイレクトアタックじゃ」

揺れた。そう思った時には俺は意識は無かった。船の一部に頭をぶつけた所までは、覚えている。

☆

洸司郎は倒れ、起き上がらない。

船のどこかに頭をぶつけて、流血している。

美佳達四人も乗客達も、青冷めてただ呆けていた。

「ふむ。終わったか……」

その言葉に美佳は喰らい付いた。

「ま、まだよ！コーシローはまだ負けてないわっ！」

「美佳……」

「美佳さん……」

「コーシローは！あんたなんかにっ、負けないわ！そ、そうよ……人質……人質さえいなければ……コーシローは、もっと……」

彼女は、涙が溢れても気にせず、続けた。

「コーシローは、あんたなんか目じゃないんだからっ！今に起き上がって、逆転するんだからぁっ！」

「煩い小娘じゃ！今すぐ食うてやろうか！」

「きゃっ！」

「ミカ！……くっ……このエロイカ！女の子を四人も人質に取って、恥ずかしくないのかしらっ！？それとも、そう言う趣味！？」

次に、棗が。ミカを庇い、自分に注意を引き付ける様に罵る。

「そうです！正々堂々出来ない、チキン野郎なのですよ！イカの癖にです！」

「ずるい。まさに食えない奴だね！チキンは鶏だよ！むしろチキンにも謝れぇ！」

続けてリィナと成実が、同じく罵声を吐く。

「ぬしら……早死にしたいかっ！」

その時、紙コップがイカに投げ付けられた。

投げたのは一人の乗客。

「汚ぇぞーっ！女の子達を人質に取りやがって！」

「そ、そうよそうよ！人質もいないとデュエル出来ないの！？」

「デカイ図体して、情けねぇぞぉ！」

次々と触発され乗組員や乗客がイカに暴言を吐き、ゴミを投げ付けた。

「人間共め……」

「皆……」

「……信じようよ。洸司郎を」

「そうね。皆さーん！」

棗が呼び掛ける。

「コウの、洸司郎の名前を呼んで！私達の声でっ……私達は、何も出来ないわ……だけど、せめて……彼を応援して、癒して、励まして、助ける事が出来るわ！」

「棗……そうね。皆さん！ご一緒にーっ」

「無駄な事を……」

「「コウシローっ」」

「洸司郎さんっ！」

「コウ！」

始めは四人、やがて、皆一同に、その名前を呼ぶ。

「頑張れ！洸司郎っ！」

「小僧！ガッツを見せろ！」

「お兄ちゃん！頑張って！」

「洸司郎君！頑張ってくれ！」

「お願い！立って！」

「洸司郎！」

その声はやがて束なり、少年に力を与える。

「「「洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！」」」

皆の意思が、想いが、声援が一つになり息が合った頃、彼はピクリと動いた。

「「あっ……」」

そして、もう一度コールが起きた。

四人も。勝利を確信したように笑みを浮かべ、心を一つに、声を合わせた。

「「洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！」」

☆

皆の声がする。

っ！

額から血が出ている。

体中、かなり痛い。

だけど、なんだか力が湧いて来る。

暖かい何かに包まれる様な。

「「洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！」」

乗客の皆の声だ。
美佳達の声も聞こえる。

それに、晃や有魅……桜や真名さえも居る。
そんな錯覚も、俺は感じた。

俺が、此処で立ち上がらないと、すべて無駄になる。

そうだろ……皆。晃。

試しに指に力を入れる。

よし、動く。

後は、流血してるから、どこまで持つか。だな。

待ってろよ……すぐ、終らせるから……

俺は、次のドローを信じている。

俺には解る。
ドローしたら、もう勝てる事を。

また体が熱くなる。
今までの様に、煩い。
鼓動が、俺に起きろと、胸を叩く。
自分の中の何かが、覚醒していく。
今回は、黙ってろ。
鬱陶しい。
「「洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！洸司郎っ！」」
大丈夫。今起き上がる。
俺が、守るから。
☆
「「わぁあああああ！！」」
一際大きな歓声。

「コーシロー！」
「コウ！」
「洸司郎さん！」
「洸司郎！」

「待たせた、な……」

フラフラする……血は、思ったより酷いな。

なぁに、これくらい、地球じゃまだ軽い方だったろ。

「待たせたなぁ……ゲソ野郎。俺が勝ったら、料理人デビューの時に磔にして飾ってやるよ」

ガクガクと、歯が、足が震えるのを抑え、仁王立ちをする。

「はぁー……ふぅー……」

一つ、呼吸をする。

四人を見ると、心配そうにしてはいるが、俺を信じている。
満足そうに笑みを浮かべ、ＧＯと。

わかったよ。任せろ。

俺は、必ず、勝つから。

周りを見渡すと、乗客の皆が口笛を吹いて手を叩き、歓声を上げる。

「いいぞー洸司郎ー！」
「頑張れよ少年！」
「そんなイカ、倒して！」
「頑張って！洸司郎くん！」
「もう一踏ん張りよ！」
「怪我とか、後の事はお兄さんやおじさん達に任せろ！だから勝て！」

ありがとう。

俺は後ろを向く。

「「わぁあああ！！」」

また、歓声。
俺はイカの方に向き直り、後ろに向けてサムズアップ。

もう一度わっとなると、皆は静かになり、見守ってくれる。

人の絆。人の優しさ。温もりは、凄く暖かくて、力になる。

理屈じゃない。想いの奇跡。

さぁ、早く終わらせないと、俺も辛いからな。

覚悟しろよ。

「コーシロー！」

「あぁ！行くぜイカ野郎！俺のターン！」

第一章～最終話　ある場所、ある想い

そこにあるのは、漆黒の城だった。
空には暗雲が立ち込めて雷が時折、雲の中を駆ける。
城内の、ある一室。
そこは黒い蝋燭が並んだ、大きな広間。
『随分と甘やかすな。黒山羊殿？』
『……否。我らは【奴】に灸を据える為にかの少年に使役されているのだ』
そこには１０の悪魔達が、静かに座っていた。
今の会話は、ルキフェルがバフォメットに声を掛けたのだ。
『でもあのボウヤ、【あのお方】の可能性があるのよね』
『その通りです。だからこそ、私達はユグルだろうと何処へでも、参るのです』
妖しくウヴァルが笑い、サレオスが瞳を閉じながらそう言う。
『儂らは従うだけじゃのうて、儂らの意志でお守りするのが勤めじゃの』

『かっはっは！爺さんは良い事言うじゃねぇか！』

『これ！老いぼれ扱いするな！』

アガレスとフォラスが談笑する。

『あの【榊洸司郎】が【あのお方】かどうかはまだしも、【奴】はどうするのです。もう随分とほったらかしにしているのですよ？』

セーレが、一同に問う。

『……輪廻の中、【奴】の魂は消えぬ』

『【榊洸司郎】……【あのお方】に直接手を下して戴くしかないでしょう』

エリゴスとストラスが問いに答える。

『私達は【あのお方】の命に、ただ従うだけです。今は【榊洸司郎】を見守りましょう』

ザガンが言うと、一同は特に反論も無いらしく、口を閉ざした。

――地球・日本国内――

とある警察署の前、掲示板にある張り紙が張られていた。

『行方不明、捜索願い。この顔にピンと来たら御一報！』

『榊洸司郎。特徴……』

『諏訪晃。特徴……』

☆

「洸司郎……お前、どこ行ったんだよぉ……」

そこは、洸司郎の家。

洸司郎の父親……榊玄太郎（さかきゲンタロウ）は一人、晩酌をしていた。

「ニャー……」

「寂しいよなぁ……アズキ……」

「……ニャー……」

榊家の飼い猫のアズキも、ショボンとしているかの様に、元気が無い。

最愛のご主人様が帰って来ないのだ。

「諏訪さん所も、妹ごと居なくなったんだってよぉ……」

ニャー。とまたアズキは鳴く。

そう。ここは地球。
洸司郎達が住んでいる街。

地球では、洸司郎とその友人が行方不明となって、十数日となっていたのだ。

☆

「えー……家出の可能性もあるので、一度でも、少しでも、そういう話を聞いた。そういう素振りを見せたと言う人は教えてください」

学校。

「洸司郎君……晃君、どうしたのかしら……」

「行方不明なんて嘘よぉ……」
「ほら、花ちゃん泣かないで……」

「おかしいよな。いくらあいつら仲が良いって言ってもなぁ……」

「突然、すぎるよな……仲良く家出なんて訳がねぇよな」

友人。

「お、おい……これ見てみろよ。人形の人と、囁く者の人じゃね？」

「はぁ？最近見ないと思ったけど、行方不明ってなんだよ？」

彼らは、地球では行方不明扱いとして、捜索願いが出されている。

そう。彼らがユグルで普通に生活し、デュエルをしている間にも、同じ様に地球でも時間は進んでいるのだ。

「……洸司郎君……君は、ユグルに行ったんだね……くくっ」

笑い声。

その一人の男は、何者なのか……

「きっと驚くだろうな……その日が待ち遠しいよ」

☆

「洸司郎……」

彼を慕う人は誰もが思う以上に多く、彼が居なくなり、慕う人々は悲しんだ。

何故彼が、と。

彼がすべてを終わらせ、ユグルから地球へ帰って来る日は来るのだろうか。

物語は、まだ……

始まったばかり――

第一章～最終話　ある場所、ある想い（後書き）

今日、１０月１日は私、紫苑の槍の誕生日なのです。

ハッピーバースデー自分！

と言う訳で、今日は十九話と最終話の２話連続投稿となります。

おまけや番外編も考えていますので楽しみにしていてくださいませ^ ^

ご感想、お待ちしています！

おまけ　登場人物紹介（前書き）

今回はおまけです。

メインゲストは主人公！

おまけ　登場人物紹介

作者「はい。と言う訳で第一章は無事（無事か？）終了しました」
洸司郎「俺デュエルの途中なんだが」
作者「次からは第二章になります……が、その前に登場人物の紹介をしようと思います」
洸司郎「『廃棄人形』様の様に、２０話で終わらせて、登場人物紹介する。やっぱりパクっ……」
作者「せいやぁっ！」
洸司郎「っ！？」

洸司郎「な、な……何しやがる……」
作者「侵し難い絶対領域に触れるからですよ」
洸司郎「その言い方やめろ！」
作者「じゃあ、まずは『廃棄人形』様の小説、【遊戯王　僕らの歩いていく道】の主人公、諏訪晃の親友、榊洸司郎から」
洸司郎「だからパクりはやめっ」
作者「はぁっ！」
洸司郎「ぐぅっ！」

ｎａｍｅ：ｋｏｓｈｉｒｏ　ｓａｋａｋｉ（榊洸司郎）
ａｇｅ：ｓｉｘｔｅｅｎ（１６）
ｓｅｘ：ｍａｎ（♂）

ｄｅｃｋ：ｗｈｉｓｐｅｒｓ（囁く者）

【遊戯王　俺達が歩いていく道】の主人公。

身長：１７８ｃｍ
体重：５７ｋｇ
髪の色：黒
目の色：黒

父親と二人暮らし。猫のアズキを飼っている。

男前。なかなか整った顔立ちで地球でも結構モテたりしてた。
老若男女問わず好かれる。
実は彼女がいる。

喧嘩も強く、結構頭もキレる。
曲がった事が許せない、伝わりやすい簡単な言い方するならば『正義の味方』、『熱血漢』。

諏訪晃とは幼い頃からの親友で、遊戯王以外でも普段から二人の相性、コンビネーションは抜群。
二人が揃うと向かう所敵無しである。

決して鈍感では無いが、自分に向けられる感情にはあまり関心が無い。

困っている人がいると放っておけない。

因みに雰囲気など、空気は読める。

作者「格好よくないですか？」
洸司郎「次から普通に、な？」
作者「（・ω・、）」

美佳「こーしろ！」
洸司郎「おう、ミカ」
作者「じゃあ次は美佳の紹介ですね」

ｎａｍｅ：縁逢寺美佳（えんおうじミカ）
ａｇｅ：１６
ｓｅｘ：♀
ｄｅｃｋ：霞の谷（３話の時点では純）

ヒロイン１

身長：１５８ｃｍ
体重：４２ｋｇ
髪の色：薄い茶色
目の色：黒

ポニテ。
貧乳（ひんぬー）である。結構コンプレックスで、洸司郎の好みかどうか不安らしい。
デイルードで出会った。
お気に入りの場所、丘のたんぽぽ畑にいた洸司郎を見て声を掛けた。
学校……ユグルで言うアカデミアに通っているが（学校でも通じる）、洸司郎を追い掛ける為、休みの許可を取った。

飾らない性格で、気丈。好かれる人柄で、優しく、アカデミアでは人気だった。
家は高貴な家柄でかなり裕福。一応皇族等に顔がきく。

作者の好きなツンデレ。

作者「美佳は私の一番好きなキャラです」
美佳「私はコーシローに好かれたいけど……」
洸司郎「反応に困るからやめてくれないか？」

美佳「作者はツンデレが好きなのね？」
作者「そりゃあもう」
洸司郎「作者の話はまた今度！次に行くぞ」
作者「蹴ったのを根に持ってますね……」

棗「わたしの番かしら」
美佳「ナツメ！」
洸司郎「……」
作者「胸に視線が行ってますよ」
洸司郎「おっと」
美佳「こぉしろぉ……？」
棗「ふふ。コウはわたしの魅力に釘付けね」
美佳「くっ……」
洸司郎「さ、紹介紹介……」

ｎａｍｅ：叶棗（かのうナツメ）
ａｇｅ：１８
ｓｅｘ：♀
ｄｅｃｋ：？？？

ヒロイン２

身長：１７１ｃｍ
体重：５０ｋｇ
髪の色：金
目の色：赤

巨乳。
キャミソールからはみだしそうな程。
肩甲骨の辺りまでのウェーブの掛かった金髪。

デュエリストハンターズギルドの一つ【Ｌｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｓｕｎｒｉｓｅ】の頭首。
また、ハンターズギルドの総合トップランカー。
身寄りの無い子供を自分のギルドで保護したりしている。

一目で洸司郎の力や潜在する強さを見抜いた。
ジェリラルで洸司郎に助けられた時から洸司郎に好意を持っている。

棗「短くないかしら？」
美佳「十分じゃない……」
洸司郎「胸を見ながら言うなよ」
作者「後々ヒロインの過去とかを書くのであまり沢山書けないんです。棗はお色気担当です」

棗「私の裸はコウにしか見せないわよ？」
洸司郎「ちょ、こっち向いてキャミソ引っ張るな！」
美佳「（見えた……）コーシロー！見ちゃダメよ！」
洸司郎「これは目隠しじゃない！目がぁっ！つ、潰れるって！」
作者「……」

リィナ「私の番なのですよ！」
棗「次はリィナちゃんね」
洸司郎「二人はちゃん付けで呼んでんだよな。成実は呼び捨てだけど」
作者「そりゃあ成実は歳が一つしか差がありませんから」
棗「だって……ねぇ？ミカ」
美佳「可愛いもんね！」
リィナ「えへへ……」
洸司郎「あぁ！もう。可愛いな畜生！」

リィナ「そういえば楽屋に成実さん居なかったですよ？」
美佳「私、探して来るわ」
洸司郎「すまん。頼む」
作者「では、リィナの紹介に行きましょう」
リィナ「お願いするです！」

ｎａｍｅ：リィナ＝オールド・ランナ
ａｇｅ：１４
ｓｅｘ：♀
ｄｅｃｋ：？？？

ヒロイン3

身長：１３８ｃｍ
体重：３５ｋｇ
髪の色：藍色
目の色：翡翠

右サイドポニー。
ロリ担当だが、胸は美佳より大きく、ロリ巨乳と言った所。解せぬ。
しかし、巨と言う程ではない。
性格は陽気で明るく、年齢の割に幼めな思考と話し方をするが、自分の意志は強い。
ウェーリアで奴隷として売買されていた所を洸司郎が見つけ、彼女を買う事で助けた。
姉がいるが、姉妹揃って奴隷として売られてしまう。
洸司郎に助けられ、そのまま好きになる。
姉を探す為、洸司郎と一緒に居たい為、旅に同行する。

作者「すいません、リィナ。君の設定はあまり考えてませんでした」
リィナ「ふぇΣ（；▽；、）！？」
洸司郎「酷っ！」
棗「リィナちゃん。お姉さんが慰めてあげるわ」
リィナ「うぅ……ぐすっ（ぎゅー）」
棗「（純粋で可愛いわ……）」
作者「……お詫びと言ってはなんですが、洸司郎とはイチャラブさせますから」
洸司郎「カプ厨め。お前にリスクが無いだろーが」
リィナ「えへへ。やったです！」

棗「ミカが戻って来たわ」
美佳「連れて来たわよ」
成実「あはは。ごめんごめん」
リィナ「何処に居たんですか？」
美佳「実はトイレに行って……」
成実「あぁ！ミカ！言わないって約束したじゃん！」
棗「気になるわ……」
作者「じゃあ次は、ナルミの番ですね」

美佳「そういえばナルミはあの後、お金の入った袋どうしたの？」
成実「エンジェルが消えたからもらっちゃった」
洸司郎「ちょ、おまっ」
作者「拾得物横領罪じゃ……」
棗「何の話？」
リィナ「成実さんは抜け目無いって話なのですよ」

ｎａｍｅ：高坂成実（たかさかナルミ）
ａｇｅ：１５
ｓｅｘ：♀
ｄｅｃｋ：？？？

ヒロイン４

身長：１５５ｃｍ
体重：４１ｋｇ
髪の色：赤茶

目の色：黒

肩までのふんわりショートボブヘアー。
初登場（改行除き）３行目でいきなりメタ発言したバカ。
成実「うわぁ！酷いよ！」
棗「い、今は我慢しなさい」

胸はリィナとどっこいどっこい。
わかりやすい数値で言うならＣ７０辺り。因みに美佳はＢ６５辺りである。（あくまで目安。作者は全然詳しくない。誰か教えてやれｗｗｗ）

ウェーリアの港街でエンジェルに絡まれていた所を洸司郎に助けられ、好意を持つ。

性格は素直。少し夢見がち。妄想癖……とは言わないがちょっと都合良く考える所がある。

作者「あれ？」
洸司郎「お前ナルミ嫌いか」
成実「酷いよぉ～……洸司郎ぉ……」
洸司郎「おーおー……よしよし泣くな泣くな」
美佳「作者サイテーね」
棗「作者サイテーね」
リィナ「です」
作者「……おかしいですね。こんな筈では」

棗「レディーの体重を公表するなんてますますサイテーね」
作者「いや、あなた達身長だけ見ればやばいんですよ?何人か極限体重下回ってますから」
リィナ「極限体重ってなんですか?」
美佳「それ以上痩せない方がいい体重ね。極限体重は確か男女差が無い筈よ」
洸司郎「皆スマートだよな。綺麗で、理想系だな。他の人が羨むんじゃないか?」
ヒロイン一同「「……／／／」」
作者「(恐るべし。主人公恐るべし)」

洸司郎「美佳以外、皆のデッキはまだ使われてないから秘密なんだな」
棗「そうねぇ……第二章で活躍出来たらいいわね」
美佳「楽しみね」
リィナ「私のデッキはえげつないのですよ!」
成実「え……」
作者「私は成実のデッキ、好きですけどね。美佳の霞の谷は……あまり詳しくない時に作りましたからオリカが……」
洸司郎「あぁ、でも確か強化されて完成したのは……」
美佳「ちょっとこぉしろ!何で改造したの見せてないのに知ってるのよ!」
棗「……悪意を感じるわ……」
リィナ「作者の、ですね」
作者「人聞きが悪いですよ?」

洸司郎「胸の話が……」
作者「洸司郎は胸フェチです」

洸司郎「なんて事を言うんだっ！？」
ヒロイン一同「「ピクッ」」
洸司郎「違うぞ？まぁ違うと言っても別に興味が無い訳じゃなくて……」
作者「晃とのベーコンレタスですねわかります」
洸司郎「ＢＬには変わりねぇ！」
棗「私のは秘密よ」
美佳「メロンめ」
リィナ「美佳さんはＡＡでしたっけ？」
美佳「違うわよ！Ａはあるわよ！……Ａくらい……ぐすっ」
洸司郎「俺や作者がいる前で話すなよ……」
成実「洸司郎はボクの胸のサイズが好きなんだよねっ？いやむしろボクの胸が好きなんだよね！」
洸司郎「情報改竄すんな」
作者「胸の話はそろそろ……」
棗「そうね。下品よ。あなた達」
作者「（下品とか自分の乳見てから言えよ）」
棗以外のヒロイン「「（勝者の余裕か？ムカつく……）」」
洸司郎「お前ら悪意がだだ漏れだぞ」

作者「結構話しましたね」
洸司郎「意外と楽しかったな」
美佳「釈然としないのは何故かしら……」
成実「果てしなく共感するよ……」
リィナ「またこう言うのやりたいです！」
棗「ふふっ。そうね」

作者「えーと……私、紫苑の槍はいつでも感想、リクエスト等をお待ちしております」
洸司郎「誤字報告ついでに、感想を教えてくれよな」
棗「作者が泣いて喜ぶわ」
リィナ「勿論私達もとっても嬉しいのですよ！」
成実「読者様のご意見が無いと、企画も立てる事が出来ないからね」
美佳「もっと話が進んだり、リクエストがあれば、更新頻度上昇やおまけや番外編が増えるわ」
作者「心が折れそうなので是非、コメントくださいね」
洸司郎「切実だな、おい」

棗「読者の皆さんとは一旦お別れね」
リィナ「また本編で会いましょうです！」
成実「ボク達の活躍とラブコメ、楽しみにしててね！」
美佳「じゃあまた次回。【遊戯王　俺達が歩いていく道】をお楽しみに！」
洸司郎「またな！皆！」
作者「それでは、また会う日まで。洸司郎達の活躍をご期待ください！」

全員「「Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｄｕｅｌ！」」
洸司郎「Ｌｅｔ's　ｅｎｊｏｙ　ａｌｌ　ｔｈｅ　ｄｕｅｌｓ！」

おまけ　登場人物紹介（後書き）

ここまでで第一章は終わりです。

次回からは第二章に突撃！

どんな急展開になるかは作者もわからない！？

おまけ的な何か（前書き）

意外な人がゲストです。

おまけ的な何か

作者「作者です」

ディモ「ディモ……」

作者「あぁどうしましょう、どうしましょう」

ディモ「焦っているな」

作者「そりゃ焦りますよ！」

ディモ「まぁ理由は分からんでも無い」

作者「でしょう？……おや、読者の皆様はなんだこいつと言わんばかりの目で見てますが」

ディモ「……当然だな」

作者「説明するとね、リアル友人兼コラボ相手の『廃棄人形』様が、私の方と同時に三章を公開すると大々的に発表して……私はまだ次の話のストックも無いんだよ！？書く暇が無いとは言わないけど、え？何？仮に『廃棄人形』様の様に二章を三十話で終わらせるとして、読者様に三十週間近く待たせろと？そんな馬鹿な話がある！？私に急げと？ただでさえ読者様から感想もコメントもなく挫けそうなのに……これ以上は既に痛めてる胃がキリキリと更に痛みを訴える！ははは！アイデアとかその他浮かぶ時にいつもいつも暇じゃないんだよ！暇な時や書きたい時は浮かばないしなぁ畜生！！」

ディモ「紫苑……敬語。敬語を忘れているぞ」

作者「おっといけませんねこれはとんだ失礼を」

ディモ「……」

作者「さて……」

ディモ「俺はツッコミを入れるべきか？『こんな茶番を書いてないで早く本編を進めろ』と」

作者「くぅっ！言い返せません……」

ディモ「更には、ＰＶが伸びたからおまけや番外編を書くと言って、何も浮かんでいない……」

作者「うぐぅっ！」

ディモ「……ふっ」

作者「あぁ……っ！悔しいです……鼻で笑われました。しかも凄い、馬鹿にした感じで」

ディモ「馬鹿を馬鹿にして何が悪いんだ？おい馬鹿。いやグズ。早く本編を書け。どうした？悔しいのではないのか？ん？何か言ってみろ？」

作者「くっ……自分のキャラに足蹴にされて、馬鹿にされています……」

ディモ「でも？」

作者「それがいｉ（ｒｙ　訳がないでしょう！これこそ何ですか！この茶番は！？」

ディモ「……」

作者「また、やれやれと言わんばかりにため息を……」

ディモ「進まないな。次の話に移るとしよう」

作者「話なんてありました？」

ディモ「貴様……まさか愚痴る為だけに書いたのか？言っていいのか？これを書いている時間……平成２３年１０月じゅｕ」

作者「あぁあああ！聞こえません！聞きません！」

ディモ「午ぜｎ（ｒｙ」

作者「ピー！ピー！ピー！」

ディモ「……やかましい」

作者「あなたの所為ですよ！」

ディモ「人の所為にするな」

作者「くっ……」

ディモ「で、次の話はどうするんだ？洸司郎はデュエルの途中だったが……」

作者「さぁ？イカの辺りからやっつけでしたから何を考えて書いたのやら」

ディモ「貴様……読者主義の癖に、そのだらけ具合は何だ？……仕方ない。俺が何とか……」

作者「してくれるんですか！ディモ君マジ天使！デビルなのにこれ如何に！このツンデレめ！」

ディモ「する。と言うと思ったか馬鹿が。それ以上口を開くなくだらない事を吐かすなグズ。死ね役立たず」

作者「……（いっそのことＭになりたい……）」

ディモ「……案が無い訳では無い。もしくは、超不本意だが俺が出るか……？」

作者「（このツンデレめ☆）」

ディモ「不快な電波を拾った。帰るか」

作者「あなたはエスパーですか！？」

ディモ「感想等、待っているぞ愚民共。とっとと送れ屑野郎」

作者「読者様になんて事をっ！？と言うか性格変わってますよ！？」

ディモ「しーゆーねくすとでゅえる……」

作者「あっ……」

おまけ的な何か（後書き）

次の投稿は土曜日となります。
前回は投稿を忘れていました。
申し訳ございません。

みましたうちのツンデレちゃん？
可愛げがありますよね☆

？「……チッ」

なんか寒気……悪寒がするので早々に退場します。

第二章～第一話　めいどのみあげ（前書き）

新章突入。
しかし、短いです。

第二章～第一話　めいどのみあげ

――それから、〇日後――

『成程。面白くなって来たな』

「はい……種はいい具合に成長しています。これからもまだまだ成長するでしょう」

『収穫するのは、全て終わってからだ。今は成長を促すだけでいい』

「はい。存じております」

『……天使側への刺客はどうなっている』

「爵位持ちを含め、送り込んだ内、デュエルを仕掛けた者の殆どが返り打ちにあいました」

『ふん。所詮は雑魚。これくらいの壁は乗り越えて貰わねば拍子抜けだ』

「その通りでございます」

『では我は眠りに着く。後は貴様に任せるぞ。《リーオ》』

「はっ。おやすみなさいませ。主様」

「榊……洸司郎……」

☆

朝。
彼はいつもの場所で、外を眺めている。
青い、空。

その後ろからその少年に声を掛ける男。
その彼の友達だ。

「よ、おはよう。相変わらず早ぇな！レッド」

「あ、おはようカリス！そんな事はないよ」

少年の名前はレッド＝リム・アリス。
デュエルアカデミア高等部の一年。

そしてレッドに声を掛けた彼、カリス＝ソア・ルーク。
レッドの友人で、同い年。

そう。ここは、デュエルアカデミア。
日々デュエルにおける知識、実力を磨く場所。

彼等はラーイエローと言う、三段階のランクの真ん中の生徒だ。

因みに上から、【オベリスクブルー】次に、【ラーイエロー】そして、【オシリスレッド】。

更には寮制であり、食事や内装とかもランクが上な程良くなる。

それは、向上心を持って挑(のぞ)める為なのかもしれない。

☆

「抜き打ちテストとかマジないわ～」

「そう言うカリスはいつも点数高いじゃん」

「なんだよ、ちゃっかり満点取ってる奴が言うなよ！お前なんでブルーじゃないんだ！？」

「知らないよ！」

レッドとカリスがいつもの様に言い合うと後ろから女性の声がかかる。

「レッド、カリス。テストの出来はどうだった？」

「おう、シンファ！……俺は微妙だ。何かやたら難しい問題なかっ

たか？」

「や。僕も微妙かな？それって最後の奴？」

今声をかけて来た女性はレッドとカリスの幼馴染み、シンファ＝レイフェル・ラーナ。

「確か、通常モンスターのフレイバーテキストを見てそのモンスターの名前を当てる奴ね」

「あぁ、半分もわからなかったぜ」

「ははっ、今まであんな問題出なかったからね」

「そうね……あ、お昼食べに行きましょ？」

3人はテストについて同じ様に苦笑いしながら歩を進めた。

場所はアカデミアの外、敷地内はちょっとした公園の様な庭があり、椅子やテーブル等もある。

3人は椅子に座り、それぞれ自分の昼飯を取り出し、食べ始めた。

談笑し、食事を終わらせた時、そこにまた一人の少女が歩み寄って来た。

「レッド、カリス、シンファ。久しぶりね」

「おお！久しぶりじゃねーかミカ！」

「ミカ、久しぶり。えと……何ヶ月ぶり？」

「久しぶりねミカ……確か、男を追い掛けて行ったとか噂が立っているわよ？本当？」

「あぁ！？マジか？ミカ！」

「ちょっ、ちょっと！ち、違うわよ？だ、だだ、誰よ！そんな噂立てたの！？」

「僕は知らないけど……まぁ、元気そうだね」

「ええ。あ、そうだ……話があるの……」

そう言って少女、『縁逢寺美佳』は次の言葉を口にした。

そこは、誰もいない暗闇の空間。

そこには眼帯を着けた長身の男性。彼は一人静かに佇んでいた。

「……」

否、彼以外にも数人、人がいる。

ガシャンッ！

「……！ひっ……」

「嫌……来ないでっ！」

女性だ。鎖に繋がれ、身動きが出来ない様になっている。

幽閉か。酷い事をする。

そう呟き、彼は彼女達の鎖の鍵を外し、彼女達に手を差し伸べた。

「助けに来た。もう大丈夫だ」

「……ぇ？」

☆

カラン。と来客を告げる鐘が鳴る。

その中で人々は活気に溢れ、賑わいを見せている。

その中の一人の女性が来客に気付き歓迎の挨拶で迎えようとし、客の姿を見て微笑んだ。

「おかえりなさいませ。マスター！」

その言葉に反応し他の従業員も同様に迎えた。

「きゃあああ！マスタぁー！」

「おかえりなさいませ！ご主人様ぁ」

同様に、と言うにはややピンク色が混ざった奇声……喜声だが。

ハートマークを散りばめ、入口に集まる。

女性客男性客もそのご主人様と呼ばれた男性が帰って来た事が、少し嬉しそうだ。

だが、その男性は少し顔が引き吊って……最近気に入ってきた眼帯のズレを直し――

「……お前らなぁ……仕事をしろぉ！！」

☆

「てな訳で今日からこの二人が仲間となる。皆、仲良くしてくれ」

男性の横には、先日鎖に繋がれていた少女達。その時は裸だったが、今はしっかりとした服を着ている。その彼女達を従業員（女性しかいないが）がわいわいと歓迎して囲んでいる。

対してその二人は焦り、どうしたらいいのか分からなくなっている。

「きゃ、可愛い！」
「よろしくね。緊張しなくていいよ！」
「もう大丈夫だからね！」

「え……えと」
「あの……」

その状況に男性は苦笑したが、店の奥の部屋へ入って行く。

一人の従業員が男性の元へと走り、呼び止めた。

「コウシロウ！」

「ん？どした？」

「えと、……その……」

コウシロウと呼ばれた男性はふっと笑うと従業員の頭を撫で、奥の部屋へ入って行った。

「今日も一日、お疲れさん」

「あ……」

頬を染める従業員に、それを見た他の従業員が抜け駆けだぁーと襲いかかる。

主に性的に。

「いやぁあああー！」

第二章～第一話　めいどのみあげ（後書き）

今回は謎だけを書きました。
次話をお楽しみにしていただきましょう。

伏線の回収はいつになるかわかりませんがｗｗｗ

第二章〜第二話　再動（前書き）

大分更新が止まっていました。
申し訳ございません。

恥ずかしながら、頑張って更新を続けようと思います。
次の分もストックがありますので、遅れを取り戻せる様に頑張りたいと思っています。
応援、よろしくお願いします。

前回の後書きで煽りつつ今回はあまりにも内容が薄いです。
すんまそん。

第二章～第二話　再動

喫茶店（くろす）

その店は、環っかに十字架を刺した様なシンボルマークを掲げていた。

《くろす》とは所謂メイド喫茶みたいなもので、接客に重点を置いた喫茶店である。

この店のオーナーは先日の左目に眼帯をした男、『コウシロウ』である。

そもそもこの店はチェーン店でもなく、本店も支店も無い個人経営のものだ。

店の奥の部屋。そこにコウシロウはいた。

「……ふぅ……経営者ってのも楽じゃねぇな……」

高貴な黒の髪、すべてを吸い込む様な暗黒に染まる漆黒の瞳。
この世界では珍しい黒髪、黒目。

整った顔立ちに見合う長身。

椅子に腰掛け、背もたれに身体を預けて体を伸ばす。

「ま、今週の分は終わったし、後はいつもの勤務だけか」

彼は――……確かに、『榊洸司郎』だった。

☆

『叶棗』は、一時的に自分のギルドで活動をしていた。

デュエリストハンターズギルド……ギルド協会からの依頼の他、自身のギルド、『Ｌｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｓｕｎｒｉｓｅ』では身寄りの無い女子供を保護している。

そう……奴隷商人に拾われてしまう前に。

いくら奴隷制度が黙認されているとはいえ、政府役員の中にはそれをよく思わない人達も当然、存在する。

その人達と協力しあう事で、奴隷制度反対派は活動の幅を広げている。

事実この一、二ヶ月足らずの間に奴隷や奴隷商人の数は減っている。

それは、榊洸司郎を中心とし全国各地で棗や成実達が、幾つかのギルドや奴隷制度反対派の政府役員他、有志の人々と協力しあっているからだ。

中央国家（エデラウン）に構える、『くろす』を拠点として、榊洸司郎は全国に人の環と言うネットワークを繋ぎ、奴隷制度の撤廃の一歩を既に踏み出していた。

エデラウンはやたら広い国で、『くろす』があるのはエデラウンの中でも外側。

洸司郎は内側に行った事はまだ無いので、兼ねて、くろすを内側に移転させようとも考えている。

「移転の為の金はいいとして、近くに寮も欲しいしな……ってなると土地がなぁ……う～ん……」

ジリリリリリィン！！

洸司郎が一人唸っている時、デスクの電話が鳴った。洸司郎は考えていた事を中断し、電話を取る。

「毎度ありがとうございます。喫茶店くろす、オーナーの榊でございます」

『もしもし、コウ？私よ、棗』

「……ナツメか。どうした？」

『うふふ……さまになってきたわね、コウ。格好いいわよ』

「そうか、ありがとう。で、用件があるんじゃないのか？」

『ええ』

受話器越しに一拍、呼吸の音が聞こえる。

『救助依頼よ。うちのギルドに直接来たわ』

「……あぁ……っと、それを俺に伝えるって事は……一筋縄じゃ行かないって事だろ？」

『そうよ。しかも、同じ相手の場所から救助って事なら7件来てるわ』

「そいつは何ともまぁ……えらく女好きなのかね……」

そう、洸司郎達は不法、不正な奴隷取引を取り締まっている。

不正でない。とは、本人の了承を得た、メイドの様なもので簡単な話、今の洸司郎がこれにあたる。

つまり、金に物を言わせ奴隷達を文字通りに扱う、人身売買。本来の意味での奴隷だ。

これを取り締まる為、奴隷奪還の相手は女好き等、そう言った成金や貴族が多いのだ。

『資料とか詳細はファックスで送るわ。……今回は一悶着、大きいのがありそうよ』

「……了解。毎度お世話になるな、『Ｌｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｓｕｎｒ

ｉｓｅ』には……」

『気にしない事よ。あ、それと、もう一つ依頼があるわ。寧ろこっちが本命になりかねないわ』

「……マジか……どんな依頼だ？」

『それは――』

☆

俺は、有能だった。

幼い頃……まぁ、いいか。

幼い頃から与えられた職務には、責任を感じていた。事もあった。

失敗した事もあった。

人を、何人も殺した。

同胞が、上司が、死んで行くのも沢山見てきた。

熱い情熱を持っていた頃や、感情的に動き、考えていた時が……

俺にもあった。

大分、昔の話だ。

「……む」

むくりと起き上がる。

いつの間にかビルの屋上、貯水タンクの横で腕を枕にして寝ていた。

「……寝てしまったか」

連日の疲れを理由と言う事にし、自身の怠慢を無かった事として片付ける。

やる気が出ないな。

どうしようか。

鬼の居ぬ間に……と言ったか。

最近の退屈凌ぎは、割と気に入っている。

人間観察は、面白い。

俺は屋上のフェンスを飛び越えて、そのまま静かにアスファルトと煉瓦と、鉄筋コンクリートと木造の世界に、飛び降りた。――謎の男の人間観察（暇潰し）、其の一――

自分はデビルである。

故に、これはデビルとしての力を存分（無駄）に使う暇潰しである。

「まずは……」

一目で判る面白そうな奴、変な奴を探す。

今は街の中の方にいる為人通りが多く、意外とあっさり見付かる。

――……いた。

複数の女性に言い寄られている、優男。

成程。

「爆発すればいいのに……」

リア充爆発しろ。

使い魔のカラスにフンを落とさせた。

ただの逆ナンだった様だ。

女性は逃げた。

少し快感だった。

だが自分は醜かった。

――謎の男の人間観察、其の二――

先程の様な事を他にも一度やってみたが、尚更仲良くなった例がある。

……つまらなかった。

次は不幸な奴を対象にしよう。

そう考えた所で、都合良く不幸な奴を見付けた。

路地裏に、一人の太った青年。

恐喝、カツアゲにあった様だ。

誰が見ても可哀想だ。

試しに１０万程の現金を目の前に置いてみた。

それを見つけると驚く程簡単に飛び付き、挙動不審ながら、着服。

すぐにどこかへ行った。

使い道が気になり、後を追う。

しかし、予想は外れなかった。

パチンコ店に入り、数十分で出てきた。

心なしか、涙目だ。

負けたのか。

残念な奴だ。

――謎の男の人間観察、其の三――

大金を拾ったら、と言うパターンはあまり面白い行動は期待出来ない。

次は……む。

女性二人が男性二人に絡まれている。
明らかに不穏。

しかし自分は気付いた。

絡まれている女性には見覚えがある。

確か榊洸司郎の友人と、更にまたその友人だ。

……助けた方がいいのだろうか？

しかし、助ける価値も無いな。

しかしこう言う時は空気を読めと言われたな。

仕方ない。手助けしよう。

第二章～第二話　再動（後書き）

謎の男「……む、あぁなんだ、ただのロリコンか。……お前はハーレムランドでもつくるのか？」

洸司郎「」

第二章～第三話　親友（前書き）

主……作者は甲虫装機が嫌いです。
店舗代表決定戦で初戦にあたりました。

キガマンティス格好いいですね！格好いいですね！
ガタキリバに似てますね！
格好いいですね！

ガァタガタガタキリッバ！ガタキリバ！

他の甲虫装機はダサキモですが　（主にダンセルとかダンセルとかダンセルとかダンセルとか……あとダンセルとか）。
おかげで作る気は失せました。

……０００で思い出しましたが、メダルが体内ってまんま火野映司やグリード達ですよね。

まったく考えてませんでした。
今となればこの前書きを書くまでは意識してませんでしたね。
これからはパクりみたいにならない様にしたいです。

気付いている方も多いでしょうが、この小説は『欲望』がテーマです。

メズールたんｈｓｈｓ（´д｀＊）

キモイですねごめんなさい。

第二章～第三話　親友

一人の青年が少女に凶器を向ける男に叫ぶ。

「やめろ！その子を離せ！」

「助けて！」

対して少女は助けを求め、それを捕縛する、主導権を握った男は不敵な笑みを浮かべる。

「動くなっ！……ふっ……俺とデュエルしなぁ……お前が負けたらこの女と、お前の切札でも貰って逃げさせてもらうぜ……」

「くっ……外道め……」

青年は苦虫を噛み潰した様な表情で敵対する男を見る。

「……お願い！助けて！」

少女が再度助けを求める事で青年は一つ決意をした。

「仕方ない。俺が勝ったら、その子を解放しろ！」

「よぉし……準備はいいな？行くぞ！」

「「デュエル！！」」

☆

『《――正義の戦士――デュエリスト・ショウ！》は……の提供でお送りしました。……次回もお楽しみに！』

「おおーっ！」

宿屋の食堂に添え付けされているテレビから流れていたアニメ《――正義の戦士――デュエリスト・ショウ！》が放送を終了し、それを見ていたカリスは感嘆の声を上げた。

「やっぱ《デュエリスト・ショウ》の展開は熱いな！」

「私からしたらカリスの方が熱い、いや、暑苦しいわ。子供じゃあるまいし……」

食堂のテーブルでレッド、カリス、シンファ、ミカが朝食をとりながらテレビを見ていた。

「なんだよー。面白いじゃねぇか！」

「アニメはいいわ、別に。普通に面白かったし。私はアニメじゃなくて、それを見てはしゃぐカリスを馬鹿にしてるのよ」

「まぁまぁミカ。《デュエリスト・ショウ》は国民的なデュエルモンスターズアニメの一つだし、いいじゃない」

「それは暗にカリスみたいな子供っぽいのがハマってもいいって事を遠回しに言ってる事に僕は気付いてしまった」

「レッド！てめぇ！」

「僕じゃなくてシンファに文句言ってよ！」

そもそも何故アカデミア生徒の彼等が宿屋にいるかと言うと……

――☆

「奴隷制度撤廃による人権救出？」

レッドはミカが言った言葉を繰り返した。

「そうよ。私は友達や仲間達と一緒に奴隷として扱われている人達の救助をしているの。あの『Ｌｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｓｕｎｒｉｓｅ』や一部の政府役員の協力もついているわ」

カリスが感心した様に声を上げる。

「成程な……ミカがすっげえ良い事してて、色々頑張ってんのも解った。けど、なんで俺達にその話をしたんだ？」

「話は簡単よ」

突然、美佳は友人３人に頭を下げた。すぐ、それをシンファが辞めるように声を上げる。

「ちょっと！ミカ！」

「私達の力になって欲しいの！手伝って……欲しいの……あなた達の力を見込んで、頼みに来たの……」

「ミカ」

「……レッド」

「顔を上げてよミカ。……僕達はミカがどんなに頑張っていて、奴隷の人達を助ける事がどんなに大変かわからない……」

「……うん」

レッドがそのまま続ける。

「だけど……」

「ミカ、私達は友達……いや、親友よ。親友の頼みを断る訳、無いじゃない」

その続きをシンファが、次にカリスが紡いだ。

「その親友が、俺達の力が欲しいっつってんだから断る選択肢なんかねぇな。それに、奴隷制度撤廃だなんて格好良いじゃねーかよ。痺れんぜ」

へへっ、とカリスが鼻を擦り自慢気に胸を張る。

「シンファ……カリス……ありがとう……」

そしてミカ以外の3人が歩きだす。

「そうと決まったら、校長ん所だな」

「許してくれるわよ。人の為に動くなら暫く公欠するくらい」

「許してくれなかったら、学校辞めるよ」

軽く言い切る3人に、言葉も出なかった。
ミカが思った以上に、自分と親友達の絆が深かった事に。

「……ありがとう三人共……私の自慢の宝物よ……」

☆

ミカ達4人は2日程掛けてエデラウンに到着した。
今は喫茶店（くろす）に向かう途中。男子陣はトイレに行っている。

「ねぇミカ。知ってた？」

「何が？」

「カリスが修学旅行に行きたい所アンケートに、『宇宙』って書いてたの」

「あっははは！なにそれ！？」

「それでレッドが対抗して『水平線の向こう』って書いたのよ」

「ははっ……二人共馬鹿みたいねっ！」

「だから私は『レッドとカリスの馬鹿な頭を治せる医者の所』って書いたわ」

「あはは！シンファ酷いわそれは！」

「集計してた山田君、困った顔してたわ。勿論、後で先生に三人で書き直しさせられたわ」

「ま、そうなるわよね」

と、談笑している所で二人の肩を誰かが叩く。

二人は笑顔で振り返るが、すぐその笑顔は消えた。

厳つい体格の男が二人、いやらしい笑みを浮かべながらミカとシ

ンファを見ていた。

「よぉお嬢ちゃん。暇かい？」

「俺らと遊ぼうぜぇ？」

テンプレートとはこう言った奴の事を言うのね。と、ミカとシンファは溜め息を吐いた。

「暇じゃないわ。離してくれない？」

「私達、人を待ってるの」

「んだよツレねぇな。その人っての来てねぇしいいだろ？」

「大人しく一緒に来いよ。俺らの仲間もいるし、楽しくなんぜ？」

「……しつこいわね……」

ミカとシンファは再び溜め息を吐いた。

こう言った輩は何を言っても無駄。相手をしないのが賢明である。

「それとも、今この場で可愛がってやろうか？あぁ？」

今いるのは広い公園の一角で、公衆トイレからは離れたベンチ。
割と隅なので人はあまりいない。公園を縁取る植物の更に外側はコンクリの壁。
つまり、昼間の割に人に見付かる事はあまり無いのだ。

「何か言えよ。あぁん？」
「調子乗ってっと、痛い目に会うぜ？」

男の片方がミカの体に触れようとしたのをミカは手でペシッと払う。

「……」

それに逆上した男がミカの首に手を掛けた。

「っ！？」
「ミカっ！……っ」
「おっと、お前も動くなよ？」
「可愛い顔に、傷が付いちまうぜっ！？」

「ぐぅっ……離し、なさ……」

☆

一方のレッドとカリスは二人の為に公園の露店アイス屋でソフトクリームを買っていた為に遅くなっていた。

「やたら混んでたな」

「早く戻ろう。二人共待ってるよ」

「ああ」

二人が急ぎ足になった所でカリスはすぐ気付いた。
ミカとシンファが見えた時、男が二人群がり、しかも今まさに片方の男がミカに暴力を振るおうとしているのを。

「あ、カリス！あれ！」

「あぁ！レッド、アイス持ってろ！」

カリスはレッドにアイスを渡してすぐに落ちていた石を拾い、振りかぶった。

☆

ミカが目を瞑った時、鈍い音と同時に男を悲鳴が聞こえた。

ミカが見たのは自分を掴んでいた男が頭を押さえている姿。

力から解放され自由になる。

「タクっ！？」

頭を押さえている男はタクと呼ぶらしい。しかしモブキャラに名前なんて必要なかった。

もう片方の、シンファを捕まえている男の眼前には真っ黒なカラスが威嚇して停滞しバサバサと羽撃き、鳴き声を上げている。

「クカァッ！カァッ！」

「うわわっ！？」

腕を掴まれていたシンファもその隙に男の股間を蹴り上げ、逃げる。

「ぐうっ！？」

男は股間を押さえて悶絶し、カラスは何処かへ飛び去った。

「ミカ、シンファ！」

カリスとレッドが走って来た。
それを見たミカとシンファは安堵の息を吐き、二人の元へと向かう。

ミカとシンファはそれぞれレッドとカリスの後ろに隠れる。

「大丈夫!?」

「遅くなって悪かったな……」

「ホントよ……まったく。でも……」

「助かったわ。ありがとう」

二人は少し照れ笑いして、すぐ悶絶する男に向き直った。

「ミカとシンファは、アイス食べて見てな」

「すぐ終わるからね」

「ぐっ……てめぇらぁ！」

「ただじゃ済ませねぇぞ……」

男二人は立ち上がり、レッドとカリスを睨む。

「あ？」

「ただじゃ済ませないのは、こっちの台詞だよ？」

二人の視線は鋭く男達に突き刺さる。

「……二人の珠の肌に傷を付けようとした罪は重いよ？」

「お前らデュエル出来るよな？お前らが負けたら……お前らの財布を募金箱に突っ込んで来てやる。そんで公園を逆立ちで一周な」

「この……舐めやがってっ！」

「やってやらぁ！」

「レッド！カリス！遠慮は無しよ！」

「ボコボコにしていいわよ！」

二人の許可を得て、レッドとカリスは不敵に笑みを浮かべる。

「「デュエル！」」

第二章～第三話　親友（後書き）

次話は久しぶりにデュエルです。

もし使用して欲しいデッキがあれば、リクエスト受け付けます。
感想、ご意見、お待ちしております。

第二章～第四話　鉄壁（前書き）

一応説明。

レッド。カリス。シンファの3人は美佳と同じアカデミアの生徒。

二章からの新しいキャラクターです。

洸司郎よりも主人公にふさわしいでｓ（ｒｙ

洸司郎「俺は城〇内的ポジか……」

第二章～第四話　鉄壁

――レッドｖｓ男Ａ――

「じゃ、僕の先攻だね。ドロー」

レッドは手札を確認し、小さくうんと呟き、手札の1枚に手を掛けた。

「《レスキューラビット》を召喚！効果！この子を除外する事で、デッキからレベル4以下の同名通常モンスターを2体、特殊召喚する！デッキから、《ホーリー・エルフ》を2体、特殊召喚！」

フィールドには2体のホーリーエルフ。フレイバーテキストには『かよわい』と書かれているが聖なる力により、守備力２０００と優秀な壁として活躍出来るちっともかよわくないモンスター。……もっとも、カードとは言え人間や人型の生物を軽々しくモンスターと呼んでいいのだろうか？

「じゃ、レベル4のホーリーエルフ2体をオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！《ガーディアン・エルフ》、守備表示！！」

現れたのは長い耳、鋭い釣り目の青い瞳の女性。
軽装だが、鎧と盾を装備していて、名前負けしない守りを頼れそうだ。

「レッドの手札、良さそうね」

「戦う身としてはあれが先攻1ターン目に出てくるのは勘弁ね……」

美佳とシンファがソフトクリームを舐め、レッドの戦いを見守っている。

「ガーディアンエルフの効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、デッキから『エルフ』と名のついたカードを手札に加える！僕は《アーチャー・エルフ》を手札に加えて、カードを1枚セット、ターン終了」

「へっ……俺のターン！」

こちらもドローして、手札を確認する。
手札が悪いのか舌打ちし、一度ガーディアンエルフを見る。

ガーディアン・エルフＤＥＦ２４００

高ぇな……。そう呟き、モンスターを場に出した。

「《アックス・ドラゴニュート》を召喚！更に装備魔法、《シールドブレード》を装備！バトルフェイズ！」

アックスドラゴニュートの片手にギザギザの刃物が付いた、円盤の様な盾が装備された。

「アックスドラゴニュートでガーディアンエルフに攻撃だ！シールドブレードの効果！守備表示のモンスターに攻撃する場合、そのバトルフェイズ中、相手のその守備力を攻撃力に加える！」

ガーディアンエルフＤＥＦ２４００
アックスドラゴニュートＡＴＫ２０００→４４００

回転し、電ノコの様になったシールドブレードをアックスドラゴニュートが振り、ガーディアンエルフに攻撃する。

ガーディアンエルフは自分の盾でそれを受けるだけでそれ以上、侵入を許さない。

「残念。ガーディアンエルフは戦闘及び効果では１回ずつ破壊されないんだ！」

「なにぃっ！？……くっ、アックスドラゴニュートは守備表示になる」

アックスドラゴニュートは後退し、膝を付く。
守りを固めているつもりなのだろう。

「メイン2でカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

「よし、僕のターン！ドロー！」

レッドはドローカードを見て、ニヤリと笑う。

「メインフェイズ、《魔法族の里》を発動。魔法使いをコントロールしていないプレイヤーは魔法カードを使えない。僕のエルフは魔法使いだから、君は魔法カードが使えなくなるよ」

「んだとっ！？……くっ……厄介なモンを……」

「ガーディアンエルフの効果！最後のオーバーレイユニットを使って、デッキから《騎士（ナイト）エルフ》を手札に加える。……さぁ、行くよ？《アーチャー・エルフ》を召喚！アーチャーは召喚に成功した時に手札から他のエルフを1体特殊召喚出来る！おいで、《騎士エルフ》！」

弓を携えたエルフと、騎士の装備をしたエルフがレッドを守る様に現れる。

「騎士エルフの効果！1ターンに1度、このカードの他にエルフが存在する時相手の魔法カードか、罠カードを1枚破壊出来る。そのセットカードを破壊だ！」

「なにっ！？……聖バリがっ……」

セットカードは《聖なるバリア―ミラーフォース―》。通称聖バリ、ミラフォと呼ばれる、攻撃反応の罠（トラップ）。相手の攻撃宣言時に発動出来、相手の攻撃表示モンスターを全滅させる事が出来る優秀な罠カード。上手い事これを破壊出来ず、発動を許すといきなり逆転負けもありえるカードだ。

「よし、ガーディアンエルフを攻撃表示にして、バトルフェイズだ！まず、アーチャーでアックスドラゴニュートに攻撃！」

アーチャーエルフＡＴＫ１５００
アックスドラゴニュートＤＥＦ１２００

アーチャーエルフが弓を引き絞り、矢を放つ。
アックスドラゴニュートは構えるも、盾を貫かれ、消滅してしまう。

「くそっ……シールドブレードの効果！守備表示モンスターに装備されたこのカードが破壊されるか、装備モンスターが守備表示の時に破壊される事でこのカードが破壊された場合、２枚ドローする！」

「成程……アックスドラゴニュートやマッドデーモンと相性の良い装備魔法か……そこまで馬鹿じゃないんだね」

「んだと！？」

てへっと流す。

「あはは。ごめんね。……アーチャーエルフの効果！このカードが戦闘を行なったダメージステップ終了時、このカード以外のエルフの攻撃力を永続的に３００アップさせる！」

ガーディアンエルフＡＴＫ１６００→１９００
騎士エルフＡＴＫ１８００→２１００

「ガーディアンエルフから攻撃！ダイレクトアタックだ！」

「ぐぁぁあああ！」

男ＡＬＰ８０００→６１００→４０００

「じゃあ、レベル４のアーチャーと騎士をオーバーレイ！エクシーズ召喚！２体目の　《ガーディアン・エルフ》を守備表示で特殊召喚！効果で、オーバーレイユニットを１つ使って、次の　《アーチャー・エルフ》を手札に加えるよ」

フィールドには２体のガーディアンエルフ。

２人で、レッドを守る盾となる。

「カードを１枚伏せて、エンド」

「ちっくしょぉ……ドローっ！」

「折角意気込んだ所悪いけど、　《ダスト・シュート》発動」

「……は？……っ！！」

男Ａは苛立ちながらもカードに従い、手札を見せる。

「……勝った、ね……」

「ええ」

手札は　《大嵐》、　《増援》、　《闇の誘惑》、　《死者蘇生》、　《クリッター》、　《不意打ち又在》の６枚。

決して悪くない。制限カードのオンパレード。しかし、どうにも廻りと運が悪かった。

「成程ね。闇属性の装備ビートかな？クリッターを戻すよ」

……と、言っても。

「モンスターをセット……ターンエンド」

男は完全に意気消沈。しかし、わからなくもない。

だが、レッドは冷酷に続ける。

「……わかった？自分の愚かな行動が。……でも、カリスはあぁ言ったけど罰は与えないよ。その代わり……」

ガーディアンエルフの効果で再び騎士エルフを加え、アーチャーを召喚し効果でデッキ内の最後のアーチャーを出す。引いていた様だ。

「しっかり反省してもらうよ！ガーディアンエルフを攻撃表示に変更！アーチャーエルフで攻撃！」

アーチャーエルフ（ａ）ＡＴＫ１５００

不意打ち又在ＤＥＦ８００

「効果、エルフはパワーアップ！」

アーチャーエルフ（ｂ）ＡＴＫ１５００→１８００
ガーディアンエルフ（ａ）ＡＴＫ１９００→２２００
ガーディアンエルフ（ｂ）ＡＴＫ１６００→１９００

「アーチャーエルフで攻撃！でもって効果！もう一度パワーアップ！」

男ＡＬＰ４０００→２２００

アーチャーエルフ（ａ）ＡＴＫ１５００→１８００（攻撃済み）
ガーディアンエルフ（ａ）ＡＴＫ２２００→２５００
ガーディアンエルフ（ｂ）ＡＴＫ１９００→２２００

「ガーディアンエルフ2体で、ダイレクトアタック！」

「す、すいませんっしたぁぁあああ！！」

男ＡＬＰ２２００→０．

「よし！」

第二章～第四話　鉄壁（後書き）

と言う訳でレッドの一方的な戦いでした。

最後の男の手札は正直手抜きです。
ただ、3枚使って、通常ドロー含め3枚ドローしてるからありがちではあるんですよね。

レッドのデッキは『エルフ』です。

エルフで思いましたが
《エルフの剣士》は英語名に『ガーディアン』が入っている（因みに英語名に『エルフ』が入ってない）ので『ガーディアン』のカテゴリから外される為に英語のカードではややこしい事になってるらしいですね。

第二章～第五話　猛攻（前書き）

最近、活動報告を書いています。
読んで頂ければ幸いです。

今回はカリスのデュエルです。

第二章～第五話　猛攻

――カリスｖｓ男Ｂ――

「先攻はオレだな！ドロー！」

男Ｂの先攻。意気込む男に比べカリスは手札を見て鼻で息した。

余裕。と、言わんばかりの笑みがバレない様に。

「オレはモンスターと、リバースカードを1枚ずつ伏せて、ターンエンドだ！」

「俺のターン。ドロー！」

相手のフィールドには2枚の伏せ。

「さぁ行くぜ！　《ＭＳ（ミラージュソルジャー）・ブレード》を召喚！」

現れたのは近未来的な機械の様な鎧……分かりやすく言うならば、パワードスーツを装着した戦士。

大剣を片手で軽々と持ち上げ、肩に乗せる。

ＭＳ・ブレードＡＴＫ１７００

「ブレードはモンスターを戦闘破壊したら、デッキから《ＭＳ・ブレード》以外のレベル４以下のＭＳを特殊召喚出来る！」

「くっ……リバースカード……っ！」

「残念だがブレードは召喚、特殊召喚に成功したらそのターン相手の魔法、罠の効果を受けない！」

「……ちっ、仕方ねぇ……」

「そう言う事だ。行くぜ！バトルフェイズ！モンスターにアタックだ」

「モンスターは巨大ネズミだっ！」

ＭＳ・ブレードＡＴＫ１７００
巨大ネズミＤＥＦ１４５０

凶暴で力のある鼠だが、呆気なくブレードの大剣で真っ二つにされてしまう。

「ネズミの効果！デッキから　《激昂のムカムカ》を特殊召喚！」

「俺はブレードの効果で　《ＭＳ・レイピア》を特殊召喚！」

次は同じくパワードスーツを纏う女の戦士。
細剣を持って綺麗に立っている。

ＭＳ・レイピアＡＴＫ１６００
激昂のムカムカＡＴＫ１２００→２８００

「ふんっ……激昂ムカムカは、オレの手札の数×４００ポイント攻守が上がるぜ！」

普通ならば強い。しかし外野のミカとシンファはアイスを一口、そして鼻で笑った。

「折角のムカムカも、残念ね」

「ええ、無駄……」

それに反応した男は二人の方を見る。

「無駄……だとぉ！？」

「あぁ、無駄だな。レイピアは、攻撃対象となる相手モンスターの効果を無効化する！行けレイピア！ムカムカに攻撃だ！」

ＭＳ・レイピアＡＴＫ１６００
激昂のムカムカＡＴＫ２８００→１２００

レイピアの剣が、ムカムカの甲を裂く。
まるで紙を斬るかの様に、簡単に。

「ぐぁっ！」

男ＢＬＰ８０００→７６００

「レイピアの効果！相手モンスターを戦闘破壊したら相手のセットされたカード、または手札をランダムに選択！選択したカードの種類……まぁ、モンスターか魔法か罠だな。それを当てる。選択したカードを確認し、宣言した種類のカードならばそれを墓地へ送る！俺はセットカードを選択！罠（トラップ）だ！」

「……奈落……　《奈落の落とし穴》……」

奈落の落とし穴。優秀な罠の一つだが、今回はレイピアの効果で墓地へ送られてしまう。

「よっし……メイン２！レベル４ブレードに、レベル４レイピアをチューニング！ＭＳ同士でシンクロだ！　《ＭＳ・アサルトランサー》！シンクロ召喚！」

巨大な鎗。積層されたパワードスーツの装甲はひたすらゴツく、その質量が窺える。

「メイン2でリバースカードを1枚セットしてターンエンドだ！」

「くそっ！ドロー！」

「その時、アサルトランサーの効果を発動！相手がドローをする度にドローしたカード1枚につき、このカードの攻撃力を400上げる！」

アサルトランサーATK2600→3000

「ちっ……だがな、メインフェイズ！　《N（ネオスペーシアン）・グラン・モール》を召喚！バトルだ！」

「おっと……グランモールか……」

「アサルトランサーにアタックだ！効果でエクストラデッキに……」

「悪いな！アサルトランサーの効果だ！このカードより攻撃力の低い相手モンスターは効果を発動する時、相手の手札1枚を選んで種類を当てないと、無効となる！さ、選べ……」

カリスが自分の手札を少し前に出す。

「なんだと!?……っ……（手札に残るのは大概モンスターか魔法……コイツはカードを1枚セットしてる……手札に罠は多くねぇ筈だ……モンスターは伏せる事が出来ない……だったら）……一番右、モンスターだ！」

「残念。《ミラージュ・ホール》……罠だ」

「トラップだと!?な、なんで伏せねぇ!?」

「なんでって……そりゃ勿論、アサルトランサーの効果もあるし、《大嵐》とか怖いしな。伏せる必要が無いんだ。当然だろ」

「くそっ！」

突撃するグランモールだが、虚しくもアサルトランサーの巨大な鎗で4分にされてしまう。

グランモールＡＴＫ９００
アサルトランサーＡＴＫ３０００

男ＢＬＰ８０００→５９００

「ぐぅっ……メイン2で2枚伏せる。エンドだ」

「へっ……エンドフェイズにカード発動！　《ミラージュ・カッター》。自分のフィールドの『ＭＳ』と名の付いたシンクロモンスターの数だけドロー！その後、相手のセットカードを1枚破壊する事が出来る。右側だ！」

「俺の　《激流葬》がっ！」

破壊される制限カード。どのカードもエンドブレイクに弱いのがこのゲーム。

「よし、俺のターン！ドローっと……手札は6枚で相手が2枚か…ラッキーだ！手札から　《サイクロン》！残った伏せカードを破壊だ！」

「ぐぐ……　《サイクロン》だ……」

遊戯王のよくある、『サイクでサイクを割る』光景だ。

「そしたら、　《手札断殺》だ！お互いに手札を2枚、墓地に送って2枚ドローだ！」

男Ｂの手札は2枚。選ぶ余地は無い。

「ちっ……　《死者蘇生》と　《ブラック・ホール》が……」

「俺は　《ＭＳ・バリア》と　《ＭＳ・ハルバート》を墓地に送る。さ、２枚ドローだ！」

アサルトランサーＡＴＫ３０００→３８００

シンファがアイスをペロッと舐め、呟いた。

「出たわ。断殺でアサルトランサーのパワーを上げてからの……」

美佳が、続きを言う。

「蘇生カードね」

「俺は、魔法カード　《蜃気楼の鏡（ミラージュ・ミラー）》を発動！効果は、自分の墓地の同じレベルの『ＭＳ』を２体、特殊召喚する！再び現れろ！　《ＭＳ・ブレード》！　《ＭＳ・レイピア》！」

「なっ！？ひ、卑怯だぞ！なんだよその効果！」

「落ち着けよ。この効果で特殊召喚したモンスターは、レベルは２になり、攻守共に３００となり生け贄やエクシーズ素材として使えず、エンド時に除外される。ま、レベル２になってくれりゃ俺は良

いんだがな。行くぞ！」

すうっと一息。

「レベル2となったブレードに、レベル2となったレイピアをチューニング！シンクロ召喚！シンクロチューナー、《ＭＳ・アクセルガンナー》！」

次に姿を現したのは、今までのＭＳと違い軽装の戦士。
引き締まった肉体に、両手には細長い、ガトリングの様な銃。
少し近未来的で、普通の銃よりはＳＦ物のビームライフル寄りだ。

「アクセルガンナーがシンクロ召喚に成功した場合デッキから『ＭＳ』を1体、墓地へ送れる。《ＭＳ・キャノン》を墓地へ！リバースカードを2枚伏せて……」

相手のフィールドは0枚。全員が勝利を確信した。

「レベル8のシンクロモンスター　《ＭＳ・アサルトランサー》に、レベル4のシンクロチューナー　《ＭＳ・アクセルガンナー》をチューニング！アクセルシンクロ！」

ソリッドビジョンにも関わらず、カリスと男に対し突風が吹く。

「シンクロ召喚！　《ＭＳ（ミラージュソルダット）・Ａ・チャリオット》」

空中には人型の重装備の戦士。
片手に巨大な銃。もう片方の手に両刃の大剣。
両肩には細い砲台。
両足にミサイルと思われるポッド。
そして胸部には大口径の砲台。
背中には機械の羽がブースターになっており、そこにも武装が確認出来る。

それは、その名前に恥じない巨体。
まるで戦車の様。

「チャリオットの効果！このカードのシンクロ召喚に成功した場合、自分の手札を全て捨てる事で以下の効果を一つ選択し発動する。一つ。捨てた手札の枚数だけ相手のフィールド上のカードをデッキに戻す。一つ。捨てた手札の枚数だけ相手の墓地のカードを選択し、デッキの一番下に任意の順番で戻す。一つ。捨てた手札の枚数まで相手の手札をデッキに戻す。俺は３つ目の、手札をデッキに戻す効果を使う！」

「……ぁ……ああ……」

手札、フィールドにカードは無い。恐怖する男にカリスはまだ続ける。

「更に、チャリオットの効果！このカードは墓地の『ＭＳ』の数×３００、攻守が上がる。７体だから２１００アップだ！」

チャリオットＡＴＫ３３００→５４００
チャリオットＤＥＦ３０００→５１００

「バトルフェイズ！チャリオットでダイレクトアタック！と、その時、墓地の《ＭＳ・キャノン》の効果！墓地のこのカードと『ＭＳ』と名のついたモンスター１体を除外する事で除外したモンスターとこのカードの攻撃力の合計分、自分のＭＳ１体の攻撃力をアップさせる！俺はキャノンとアサルトランサーを除外！」

墓地のＭＳの数、７体→５体。
チャリオットＡＴＫ５４００→４８００

キャノンＡＴＫ６００
アサルトランサーＡＴＫ２６００
合計ＡＴＫ３２００

チャリオットＡＴＫ４８００→８０００

「行け！一斉掃射だ！フルパワーバースト！『ハルマゲドン！』」

空中へ舞い上がり、まず手にもった銃を乱射。
素早く飛行し、ランチャー、肩のレーザー、各部位のミサイルを発射し爆撃。　最後に、胸部の発射口から極太のエネルギー波を放ち、男を完膚無きまでに攻撃する！

「ぎっ、ぎゃあああああ！！」

男ＢＬＰ５９００→０．

「やりいっ！」

第二章～第五話　猛攻（後書き）

モビルスーツではありません。

因みにＭＳの名前の由来は見てわかる通り武器です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7258t/

遊戯王 俺達が歩いていく道

2011年12月7日03時02分発行